平成27年10月1日発行第12巻第5号通巻97号

2D DREAM MAGAZINE

二次元ドリームマガジン

cover illustration by FCT

応募者全員サービスにiPhoneケース登場!

2015 10
Volume.84
1,280【税込】yen

夫のため、国のため、民のため――美貌の淑女は肉辱に熟肌を捧げる!

今号の Special Fetishism Series 特集

王妃

【応募者全員サービス】表紙&ピンナップテレホンカード

【連載&読み切り小説】
新居佑×コザ
筆祭競介×牡丹
大熊狸喜×しゅんぞう
酒井仁×ほへほへ
如月トモエ×潤咲まぐろ
斐芝嘉和×庵ズ
蒼井村正×FCT

【えっちマンガ&4コママンガ】
からすま弐式
天海雪乃
ぱふぇ
野晒惺
ゆたかめ

ハーレムシリーズ10周年&50作突破記念!

特別小冊子付き!!!!

新連載小説
光魔少女メイ
『魔法娼女理愛』のコンビが贈る新たな魔法少女!
高岡智空×草上明

立ち読み版

【カラーピンナップ】
うるし原智志
大林森／アレグロ／FCT

18 未満

淫辱のマーガレット王妃
小説／蒼井村正
挿絵／FCT
帝国軍の手に堕ちたマーガレット王妃！
ヒロイン絶滅計画
～清楚で可憐なヒロインたちをヤッつけろ！～
HEROINES DESTRUCTION PROJECT
今ならマーガレット王妃のカードがもらえる！
とコラボ！
詳しくは19ページへ！

「帝国軍……こんな、戦略上、何の意味も無い小国にまで攻め寄せてくるなんて……」
王都の外れにある小高い丘の頂上から、眼下に迫る軍勢を見つめた女性は、深い憂いの表情を浮かべてつぶやいた。
彼女の名はマーガレット。民たちに、聖女王マーガレットと呼ばれて慕われている王妃だ。
ただ立っているだけで、優雅さと気品を漂わせる彼女の身体を包んでいるのは、シンプルなデザインで仕立てられた、紫色のドレス。
ドレスの胸元からは、いささかボリューム過剰なバストの肉果がこぼれ落ちそうになっていて、革製のコルセットで引き締められた細いウエストとの対比が見事である。演舞会が似合いそうなドレス姿の王妃は今、王国を一望できる丘の上で、迫り来る侵略者の大軍勢に、たった一人で対峙していた。
事故で急逝した父母の志を継いで女王となったマーガレットが統治していた小国が、強大な帝国軍特殊部隊による奇襲を受けたのは、昨夜遅くのこと。
治安維持の騎士団以外にまともな兵力を持っていなかった小さな島国は、瞬く間に占領され、統治者である王妃もまた、数に物を言わせた軍勢に追い詰められようとしているのだ。
「あの女には、飛び道具は効かぬ！　近接戦で圧倒し、なんとしても捕縛せよ！　重装歩兵隊、前へ！」
指揮官の命令で、分厚い甲冑に身を包んだ重装歩兵たちが包囲の輪を狭めてくる。
「本当に哀しいですね……。でも、戦わなければならないのなら、私は覚悟を決めますッ！」
今にも泣き出しそうな表情を浮かべていた聖女王は、キッ！　とまなじりを決すると、右手に携えていたロッド状の武器を構えた。
「いにしえより伝わる聖杖よ、我が思いに応えて、その力、しばし解き放て！」
マーガレットが凛とした声を上げると同時に、聖女王に迫っていた数十人の重甲冑たちが、フワリ、と宙に浮く。
「うぉ⁉　身体が……ッ⁉」
「ぬうううっ！　また、魔術を使うかッ⁉」
刀槍も効かぬ分厚い甲冑に身を包んだ重装歩兵たちは、蜘蛛の巣に捕らえられた甲虫のように手足をバタつかせて空中で暴れる。
「荒っぽいことは本意ではありませんが、少しぐらいの怪我は覚悟してくださいね……ハァァッ！」
ロッドが小さく振られると、宙に浮いていた兵たちは一塊になって吹き飛び、丘の麓に布陣していた軍勢の真っ只中に突っ込んだ。
「ぐわぁぁぁ～ッ‼」
重鎧に包まれた人体が激突する耳障りな音と、兵たちの悲鳴、驚いた軍馬のいななきがマーガレットの耳にも聞こえてきて、戦いを好まぬ心優しき王妃の表情を曇らせる。
「……手加減は、しましたよ」
混乱に陥った敵軍の様子を憂い顔で見つめるマーガレットがその繊手に携えているのは、王家に伝わる秘宝、「エンチャントロッド」。
王家の血を引く者にしか扱えない魔道器で、使用者の魔力を強大な念動力に変換して使役することができる。
（あの者たちの狙いは、私の身柄拘束と、エンチャントロッドの確保に間違いありませんね……でも、これだけは絶対に渡すわけには参りません！）
強大な力を秘めた魔杖をしっかりと握り締め、マーガレットは思う。王家の始祖たちは、エンチャントロッドの力を用い、岩だらけの荒れ地であったこの島を開墾し、小さいながらも豊かな農業国を造り上げ、数百年にわたって統治してきたのだ。
王都が奇襲を受けて制圧された際、マーガレットが唯一持ち出せたのが、この秘宝であった。
「これ以上攻めてくるようなら、もっと強い力を使わないといけないけれど、でも、そうしたら、間違いなく大勢の死人が出てしまうでしょう……」
事ここに至ってもなお、心優しき聖女王は、人の命を奪うことにためらいを感じていた。
そのとき、まだざわついている軍勢の中から、でっぷりと肥満した体躯の男が歩み出て、おぼつかない足取りで丘を登ってくる。
「……総務大臣⁉　無事だったのですね、よかった」
つまづき、よろめきながら小道を上ってくるのは、若くして王国を継いだマーガレットを補佐し、国政に携わってきた中年男であった。いささか小心者ではあったが、根回しの巧みさと政務の才能は確かなもので、王妃も彼を重用していた。
「マーガレット王妃様にはご機嫌麗しゅう……」
マーガレットの前までやって来た肥満体の総務大臣は、汗まみれの顔をハンカチで拭き、肩を喘がせながら言上する。
「大臣もよくぞ無事でいてくれました。民は？　民に被害は出ているのですか？」
答礼もそこそこに、民を気遣うマーガレット。
「今のところ、大きな被害は出ておりません、ですが……あれをご覧ください」
丘を包囲した軍勢のほうを振り向き、大臣が指し示す。ようやく混乱のおさまった軍勢の中から、王宮に仕えていた侍女たちが十数人、引き出されてきた。遠目に見ても、彼女らが怯えているのがはっきりと伝わって来る。
「まさか、彼女らは人質なのですか⁉」
大臣と怯えた侍女たちを交互に見やりながら、聖女王は珍しく詰問口調で問いかける。
「うッ！　……うむ。不本意ながら、このような手を取らせていただきました。王妃様が投降されるならば、彼女らの身の安全は保証いたします」
普段は淑やかな王妃の剣幕に威圧されながらも、大臣はネットリとした口調で言ってのける。
「理不尽な侵略で国土を蹂躙している者たちに、投降せよと言うのですか⁉」
「それが現状では最善の策でございましょう？　王

国議会は既に全会一致で全面降伏を受け入れました。民たちにこれ以上の苦難を与えぬため、王妃様もどうか、懸命なるご判断を！」
ここぞとばかりに決断を促してくる大臣の目には、これまで見たことの無い狡猾な光が瞬いている。
「民を傷つけさせる訳には参りませんね……わかりました。投降、いたします」
哀しげに目を伏せ、肩を震わせながら、マーガレットは苦渋の決断を下す。
「ご英断に感謝いたします。では、この薬を飲み干してくださいませ」
大臣は、ふところから小さな薬瓶を取り出し、手渡してくる。
「これは毒、ですか？　ここで自害せよ、と？」
「いいえ、深い眠りに落ちる薬でございます。王妃様が心変わりして、エンチャントロッドを使われることを、帝国軍の方々は危惧されております故」
マーガレットが信頼していた男は、一体、どちらの側かわからぬ口調で薬を飲むよう促した。
「この薬を飲む前に、一つだけお願いがあります」
「願い、とは？」
「民には絶対に危害を加えないと約束してください」
携えていたエンチャントロッドを静かに足元に置いた聖女王は、薬瓶の栓に手をかけながら、強い口調で語りかける。
「彼らとて無為な殺戮は好みますまい。王妃様の願い違わぬよう、私の才知の及ぶ限り努力いたします」
「民たちのこと、侍女たちの安全のこと、くれぐれも頼みましたよ、大臣……」
念を押してから、小瓶の中身を一気に飲み干した王妃の意識が、スウッ、と遠くなり力が抜けた。
「……ンッ……うぅぅん……はっ!?　あ、ここは？」
小さく呻きながら、深い眠りから覚めたマーガレットは重い身体を起こし、周囲の状況を確認する。
「ここは……どこかの館の寝所？」
そこは、見慣れぬ部屋であった。
窓から射し込む日の光から判断すると、今は日中であるらしい。
「ンッ！　何？　胸と……秘所が……!?」
ベッドから降り立ったマーガレットの身体が、ビクンッ！　と震える。
身にまとっているのは、囚われの身となったときに着ていたのと同じ紫色のドレス。着衣の乱れは無いが、左右の乳先と股間に明らかな違和感があった。
左右の乳首にはジンジンとむず痒く痺れるような疼痛感に包まれており、股間には異物が押し当てられているような感触がある。
「ようやくお目覚めですかな、王妃様」
聖女王の目覚めを待っていたかのように、大臣が部屋に入ってきた。その背後には、護衛と監視を兼ねているらしい帝国軍兵士が数名付き添っている。
「大臣!?　民たちの様子は？　それと、私はどのくらいの間、眠っていたのですか？」
疼きの正体を確かめたい気持ちをグッ、と押し殺しつつ、矢継ぎ早に質問するマーガレット。
「丸一昼夜、お休みになっておられましたよ。さて、早速ですが参りましょう」
すっかり帝国軍に馴染んでいる大臣が急かす。
「一体、どこに行くというのです？　ここはどこなのですか!?」
「ここは帝国の首都なのですよ。王妃様がお眠りになっている間に、お連れいたしました」
「帝国の首都ですって!?」
囚われの王妃の目が、驚きに見開かれる。
「王妃様のお口から、帝国への無条件降伏と退位の宣言をしていただきます」
「そう……。王国は、私の代で終わりなのですね。民の皆さん、お父様、お母様、御免なさい……ウッ……クッ……」
憂い顔を俯かせた王妃の胸中に、複雑な思いが去来して、伏せられた目から涙の滴がきらめき落ちる。
「王妃様、お早く！」
大臣が無遠慮に急かしてくる。
「……参りましょう！」
キッ！　と顔を上げたマーガレットは、胸と股間から込み上げて来る疼きを堪えて毅然と歩み出す。
ドレスに包まれたその身から漂う威厳と気品は、虜囚となっても変わらない。
屋敷の前は、石畳が敷き詰められた円形の大広場になっており、その中央に造られた高さ数メートルの舞台周囲には、大勢の観衆が詰めかけていた。
「おっ、出てきたぞ！」
「あれが異国の王妃か……なかなかの別嬪さんじゃないか」
姿を現したマーガレットの姿を目にした群衆がざわめく。
（凄い人数……あの群衆の前で、降伏宣言させられてしまうのですね……）
敗北感があらためて込み上げてきて、目眩がしてくる。
「大臣、随分遅かったじゃないか。帝国の人たちも待ちくたびれているよ」
「王妃様屈服の儀式を、早く始めようよ！」
舞台で待機していた二人の少年が大臣に声を掛けてきた。
「あの子たちは？」
マーガレットの眉が怪訝そうに寄せられる。
「この方たちは先日、王妃様が特権を剥奪し、謹慎を命じられた大商人方のご子息であらせられます」
芝居がかった口調で大臣が紹介する。
「あの商人たちの？」
彼女はつい先日、果実酒の輸出価格を不当に吊り上げて暴利を貪っていた商人たちを叱責し、謹慎を命じたことを思い出す。
「商人の子息たちが帝国の首都に？　まさか!?」
疼きに包まれた豊乳の奥で、不安な想像が渦巻く。

著者近刊　『ウィッチ＆エッチ　クールな魔女をマゾ調教してみた』『対魔忍ユキカゼ 対魔忍魔調教に堕つ』『呪詛喰らい師１～３』『もののふガールズ１～２』ほか
好評発売中！

光魔少女メイ
拘束魔具の虜
第1章 二人の魔少女
光魔少女VS闇魔少女!!
戦いの中で快感に蝕まれてゆく
未成熟な少女の肉体!
小説 NOVEL 高岡智空(たかおかちから)
挿絵 ILLUSTRATION 草上明(くさかみあきら)

闇夜を覆う厚い雲、その合間から僅かな月明かりが差し、辺りを照らしだす。
コンクリートでできた校舎――その壁を蹴り、外壁全体を足場にするような立ち回りを見せながら駆け、対峙する二つの影があった。
「氷よ唸れ……立ち塞がる邪魔を葬れ……」
片方の影が、小さな声でささやくように口にし、手にした鞭を振るう。その乗馬鞭は、彼女にとって杖の役割を果たしていた。振るわれた鞭は詠唱と魔力に呼応し、紡がれた氷の嵐を巻き起こす。
「ルミエル・ボイユ……アドゥッシィル！」
即座に反応したもう一つの影は、手にしたバトンを一振りし、目の前に壁を作りだす。いや、壁というよりはカーテンというべきか。オーロラのような魔力の薄幕が広がり、氷の嵐を包み込むと、その勢いを鎮めてやがて空中に溶け消えた。
「ちっ……」
纏ったマントを翻して地に降り立った影が舌打ちすると、それを追ったもう一人も、短いスカートをはためかせ、タンッと地に足をつけた。
「もうやめて、ヤミヨちゃん！　あなただって人間でしょっ？　このまま続けたら、世界が闇の力に呑まれちゃうんだよ！」
バトンを握り、身構えたまま少女が叫ぶ。その瞬間、ザァッと風が吹き、厚い雲が払われた。
月光を跳ねて輝く、明るい栗毛。それを頭の高い位置でポニーテールに纏め、凛々しい眼差しは力強さと優しさを湛え、対する相手――ヤミヨと呼びかけた少女を見つめていた。
「いまさら手遅れよ――光魔少女、メイ」
こちらの名を呼び返し、ヤミヨが告げる。
「闇の氾濫？　それこそ望むところ……そして、そのときこそ私が世界を再生させ、導くときよ」
ヤミヨはそう呟きながら、鞭を――杖を構える。
「どうしてっ……」
声を震わせ、瞳を潤ませてそう叫ぶも、メイはバトンを構えざるを得なかった。
踏ん張るように足を肩幅に開くと、プリーツのついた短いスカートがヒラリとなびき、その奥の股座に、着用するレオタード状の下着が食い込んだ。その刺激が身を引き締め、集中力を高めさせる。
「だったら……私が、止めてみせるっ……」
バトンを両手で握り、正眼のような位置で構えると、両腕に圧される豊乳がムニュリとたわんだ。ノースリーブレオタードを紐留めの衣装で覆い、ミニスカートを穿いてバトンを手にしたその姿は、まるでマーチングバンドのコスチュームにも見える。
もっとも、バトンの構えと羽織ったマントを見れば、その印象も薄れるものではあるのだが。
「そう。でもそれは、無駄な努力だわ……」
それを見て、乗馬鞭を振りかざしたヤミヨにも、晴れた雲間から月光が差した。
白を基調とする衣装のメイに対し、こちらは黒を基調とした、アラビアの踊り子を思わせる妖艶な装束を纏っている。上半身はレース飾りのついたブラのみであり、下半身もショーツとガーターベルトと、異性を惑わす扇情的な格好だ。
羽織ったマントは紫色、それを薄くしたような生地で口元を隠しているため、表情は読み取れない。だが漆黒の髪と、同じような色の瞳は美しく、稀に見る美少女であることは見て取れる。
けれど、その眼差しは驚くほど冷たかった。
「闇の氾濫は、起こるべくして起こったもの……人々の負の感情が、闇世界からの力を招き、影響を引き起こしたのだから。私を止めようと、その流れは止まらない……どう、わかったでしょう？　あなたこそ、そんな無駄なことはやめることね」
「やめないっっ！」
叫んだメイはバトンを振り上げ、短い詠唱とともに振り下ろすと、そこに込めた魔力を解き放つ。
「ウーティユ・フラカッサ！」
「っっ⁉　これはっ……くぅっ！」
解き放たれた魔力は、黒の少女を襲うものではなかった。光の粉のような、無数の細かな魔力が舞い散り、それが風に乗るように流れて、彼女の手にする乗馬鞭を包み込んでゆく。
「武器破壊っ……小癪なことを！」
だが、均衡するほどの力を持つヤミヨも負けてはいなかった。すぐさま杖に魔力を満たし、光の魔力を押し返してゆく。競り合う力同士が激しい火花を散らして、それを支える二人の精神力、気力、体力が削がれてゆくたび、身体中に汗が滲んだ。
「っっ……リンドッッ！　この子に、なにを吹き込んだのっ……こんな、歪んだ考えをっ！」
そう叫ぶのは少女たちではない。白の少女の脇を漂うように舞い飛ぶ、翼の生えた蛇が、女性の声音でそう叫んでいた。
「――人聞きが悪いな、シュカ。私はすべて説明したし、この行動は彼女が望んだことだ。そうでなくては、これほどの力を得られまい、そうだろ？」
低い男の声音で答えたのは、ヤミヨの後方に待機し彼女を見守る、翼の生えた黒い狼である。
シュカと呼ばれた白い蛇、リンドと呼ばれた黒い狼。それぞれと契約を果たし、魔力を得たのがメイとヤミヨ、二人の魔少女であった。
「それは……でもっ……」
「おっと、こんな少女を戦いに――などと世迷い言は言わんな？　お前とてそうだ、そんな少女を、甘言を弄して惑わせ、戦いに巻き込んだのだからな」
勝ち誇ったようにリンドが吠える。その言葉に言い返せず、シュカは赤い舌をチロチロと躍らせ、悔しそうに唸りを上げた。

「――大丈夫だよ、シュカ」
そんなシュカを慰めるように、メイは優しい声で彼女に語りかける。
「私は、巻き込まれたなんて思ってない……自分の意思で、闇の氾濫から――悪い魔物たちから、世界を守るって決めたんだから！」
闇の力の氾濫――。
人間にはけして見えない、けれど確かに世界の裏側に存在する、光と闇の世界。そこからの力の奔流を、魔生物たちは力の氾濫と呼んでいた。
人々の心に悪しき想いが広がれば、均衡のとれた光と闇はバランスを崩し、それぞれの力がもう片方へと流れ込んでゆく。やがてその流れは、人々の世界へと溢れだし、すべてを無へと帰すのだ。
「悪い魔物？　違うわ、光だろうと闇だろうと、彼らはすべて魔生物なの。同じ存在よ」
「違うっっ！　光の魔生物……シュカたちは、氾濫を止めようとしてくれる、いい人たちだもん！」
かつて光が隆盛にあった頃、光の住人たちは奔流を鎮め、バランスを戻し、すべての世界への影響を最小限に食い止めたのだ。だが――。
「いまは、闇の魔物が……あなたたちだって！」
昨今、人々の心の荒廃が広がる中で、力のバランスが闇に傾き、闇が氾濫を起こすと、闇の住人たちはそれを止めるどころか、流れを後押ししだした。
その奔流は、世界を繋ぐ扉を軋ませ、隙間を生みだし、魔物たちをなだれ込ませる。闇の魔物は人々の心をさらに負に、悪に、闇に染め上げ――その結果、闇の氾濫は凄まじい勢いをつけるに至った。
「それがなんだというの？　ただの主張の違い、そうよね？　あなたたちはバランスを保ちたい、私たちは破壊し、闇に染め、再生する――」
「違うもん！」
「だったら証明することね……扉を閉ざせなければ、そんな主張は塵芥も同然よ！」
扉――そう、闇の世界とこの世界を繋ぐ扉は、彼女らが対峙する、この学園に存在している。いや、この学園を中心に築かれたというべきか。
「この学園はいいぞ……素晴らしい闇の気配が、感情が渦巻いていた。おかげで扉の基盤も、随分と作りやすかったのだからな」
黒き狼が笑いながら呟き、しかも――と続ける。
「俺と契約し、闇魔少女となってくれる女も――」
「話しすぎよ、リンド」
「おっと、これは失礼……我がマスターよ」
主人に窘められ、口を閉ざした狼を睨みつけ、メイはバトンを振りかざす。
「この学校はっ……そんな場所じゃない！　みんなキラキラしてて、明るくて、楽しい場所なの！」
「……呆れた。どれだけ外面を取り繕おうと、人は心に闇を抱え、ふとしたきっかけで発現させるわ……あなたも知っているはずなのに、そんなことを言うのね。自分のことしか気にせず、欲望を満たすために行動する――それが人間の本質じゃないの」
鼻でせせら笑い、そう告げるヤミヨの言葉に、メイは思わず息を呑んだ。
「それは――」
彼女の言う通りだ。闇に呑みこまれた人たちのほとんどは、そもそも抱えていた闇が、力の影響を受けて暴走した結果なのである。立ち直れる者もいるが、多くの場合は身体ごと闇の力に呑まれ、周囲に害を為す存在となり――倒すしかなくなる。
「それが人の業、人の罪、人の本性……欲望を満たし、快楽を覚えることがすべての浅ましい存在よ。そんな奴らを救っても、同じことの繰り返しだわ。そんな誤った存在、排除するほうが合理的よ」
「っっ……それ、でもっ……」
クルクルと回転させたバトンを強く握り直し、先端を突きつけ、メイは叫んだ。
「それでも――そんな人ばかりじゃない！　だから私は、大切な人たちを……キラキラした、素敵なみんなを――絶対に、守ってみせるっっ！」
魔力の気配が膨れ上がり、大気が渦を巻くようにゴォッとうねり、すべてが杖の先端に集中する。
「っっ！　これはっ……」
「気をつけろマスター、生半ではないぞ」
リンドが警戒すると同時、ヤミヨの杖が空を切り、鞭打つように振るわれる。
「壁よ――」
「ソレイ……ラディエイトォ――ッッッ！」
大気に潜む闇の粒子、扉から滲みだすそれらを集めて壁にしようとする闇魔少女だったが、その欠片のような闇すべてを吹き飛ばすほどの光の奔流が、光魔少女の杖から解き放たれた。
「マスターッ！」
叫んだリンドは翼をはためかせ、主人を守るべく立ちはだかろうとする。けれど――。
「させないっ……犬らしく、伏せていたら！」
「ぬぐっっ……貴様ぁっ……」
シュカの魔力が光の縄と紡ぎだし、リンドの脚を折らせ、地に伏せさせる。苦しそうに歯を剥きだし、唸り声を上げるリンドだが、メイの放った魔砲がシュカの魔法をもサポートし、脱出することは容易ではない。確実に両者を巻き込んだ、その確信がメイにもシュカにもあった。
「――甘く……見ないことねっっ！」
それでも、闇魔少女は瞳を血走らせ、全身の血管を大きく脈打たせ、魔力を総動員する。
「ヤミヨちゃんっ⁉　ダメ、それは――」
「黙りなさいっっ！　私を見下そうなんてっ……生意気っ……身の程を弁えろぉぉぉっっっ！」
魔生物と契約し、魔少女となった二人は、自然か

ら魔力を得ると同時、体内でも魔力を生成することができる。もちろん蓄積もだ。

とはいえ、無理な魔力生成は身体への負担も大きく――目の前のヤミヨは鼻や唇から血を滴らせ、瞳孔が開き切るかのごとく、目を見開いていた。

「すべてを――吹き飛ばせぇぇっっ！」

叫んだヤミヨの闇の魔力が大きく膨れ上がる。それに負けじと、メイも渾身の魔力を注ぎ込んだ。

「くっっ……ぇぇぇぇいぃぃっ！」

放出した光の魔砲を太く束ね、ヤミヨたちに撃ち放つ。けれどそれは、彼女の眼前に生みだされた黒いドーム状の膜に阻まれていた。

バチバチッと火花を散らし、均衡する二人の魔力。周囲の空間が歪曲し、異世界の風景までが見えかねないほどの、激しいぶつかり合い――このままでは、周囲に途方もない影響を与えかねない。

それほどの凄まじい衝突だったが、やはり急な生成による無理が祟ったのか、やがて――。

「――っっ！」

ビキィッと闇のドームに亀裂が走り、その隙間から光の奔流が滑り込んでゆく。

「いっっ……けぇぇぇ――っっ！」

夜闇を晴らし、月光さえ飲み込むほどの眩い発光が校庭を白く染め、メイの叫びが響き渡る。その叫びと魔砲の放出音の奥に、激しくガラスの砕け散るような音が、微かに響いていた――。

…

「はぁっ……はぁっ……やったっ!?」

「おそらく、あれなら――いいえっっ！」

メイの問いに、シュカが否定で答える。光と土煙が晴れたその奥から、片膝をつきかけながら懸命に立つヤミヨと、翼と四肢をボロボロにして佇むリンドの姿が現れた。

「そんなっ……」

二人を殺すつもりなどはなかった。だからこそ命中した瞬間、気絶する程度の威力まで絞ったのだが、それが彼女らを助けることになったようだ。

「甘いことを考えて……勝てる、ものかっ……」

「っ……でも、これならっっ！」

血走った瞳で睨むヤミヨに、メイは再び杖を振る。先ほどシュカが使った、捕縛用の網を投擲するような魔法だ。しかし――。

「甘いと言っているでしょうっっ！」

それを気迫に満ちた鞭の一振りで弾き飛ばし、傍らのリンドを抱え、ヤミヨは宙に浮かび上がる。

「待って、ヤミヨちゃ――きゃあっ！」

追い縋ろうとするメイに向け、ヤミヨが赤黒く明滅する光弾を放った。伸ばした手を振り払うようなその一撃は、狙い違わずメイの腕を弾き、光魔少女は杖を取り落とす。

「メイッッ！」

慌ててシュカが庇いに立つが、それ以上の追撃はなかった。それも当然、彼女らの魔力はもはや、二人合わせても転移するのがやっとというほどの、微かな残量しかなかったのだから。

（ヤミヨちゃん……わかって、くれないの……？）

メイは痣の残った痺れる腕を押さえ、彼女が掻き消えた空を見上げる。自分の手を払った一撃には、自分が彼女に向けなかった、明らかな殺意というものがこもっていた。

「メイ……」

「……うん。大丈夫だよ、シュカ」

心配そうに首をもたげる白蛇の頭を撫でてやり、メイは表情を引き締める。今回はダメだった、だけど諦めない――必ず彼女にもわかってもらうのだ。

（人は……素敵なんだよ、とってもっ……）

◇

そうして――戦いの夜を越え、闇の侵略を防いだメイではあるが、これも一時的なものに過ぎない。

（こうしてる間にも、扉から闇の力が流れ込んでるんだ……のんびりしてられないよね）

キリッと表情を引き締め、照りつける陽の光を浴びながら、校門前に立つメイ――いや、いまの彼女は時明台学園の生徒会長、響芽衣（ひびきめい）だ。白色と水色を基調とする涼やかなセーラー服に身を包み、年齢にそぐわぬほど熟れ育った豊乳を誇るように胸を張り、太陽のような眩い笑顔で声を張る。

「おはようございまーす！　皆さんの学校生活を応援する生徒会、ただいま荷物検査中でーす！」

校門脇には長机が置かれ、生徒会の役員や風紀委員たちが、登校中の生徒を順に並ばせ、カバンの中や服装をしっかりとチェックしていく。

「応援？」「素行を疑われてるだけですよね……」

苦情混じりの冗談を口にする生徒たちに、芽衣は苦笑いを浮かべながら、パタパタと手を振った。

「あっははは……ごめんねー？　だけどほら、最近は色々と事件もあったから、みんなの心配をなくすためなの！　ご協力、お願いしますっっ！」

全員がチェックを通過すれば、校内の人物に不審はないと誰もが安心できる、そういう意図だ。そのことを訴え、誠心誠意頭を下げる生徒会長。彼女が学園のために尽力する姿を知っている生徒たちは、そもそも冗談だったこともあり、すぐに笑みをもらして、荷物を検査係に渡してゆく。

「冗談だってば、会長」「頑張ってなー、会長」

「あ、はい！　ありがとう、みんな！」

口々に労いの声をかけられ、それに応えるように笑顔を振り撒く芽衣。と――。

「なに言ってんだ、こりゃ護身用だ！」

「――えっ、なになに！」

そのとき、芽衣のすぐ隣で役員を相手に、検査を受けていた一人の生徒が声を荒らげた。

著者近刊　草上明先生とのタッグ作品はこちら：『魔法娼女理愛　獣欲に嵌まる母娘』『神聖騎士オリアナ　淫魔の牢獄』『性感淫魔エステ　搾精コースはじめました』『お嬢さまはペロちゅーLOVE！』『妹とラブる！』『もっと！妹とラブる!!』　好評発売中！

「ですが、その……規則は規則ですから」
そう応えるのは、生徒会長に次ぐ役職である、副会長の少女である。そして彼女は、二年の途中に転校してきた芽衣にとって初めての友人、いまでは一番の仲良しと言える、大親友だった。
「別に包丁とかナイフってわけじゃねぇし、カバンの奥にしまってるじゃねぇか！　危ない目に遭ったとき、威嚇に使うんだよ！」
「――そうかもしれませんが、見つけてしまった以上、取り締まらないわけにもいきません。あなたにとっては護身具でも、多くの人にとってそれは、ただの凶器なのですから」
どうやら生徒の一人が、小振りの特殊警棒を持ち込んでいたようだ。最近は刃物を用いた恐喝事件も多発しており、こうした護身用アイテムを持ち歩く人は少なくない。ただ、両者の言い分はわかるが、今回に限っては、副会長に分があるだろう。
とはいえ、相手の男子は大柄な体躯で、少々気の荒いタイプに見える。それを相手に堂々と意見する彼女は立派だが、刺激するような物言いは、二人にとってもよろしくない。
「ちょ、ちょっとストーップ！　八千代ちゃん、落ち着いてよ！」
そう考えた芽衣が、慌てて二人の間に割って入ると、美しい黒髪を長く伸ばした少女――副会長の常峰八千代は、申し訳なさそうに頭を下げた。
「会長……すいません、すぐに済ませますので」
「いやいや、じゃなくて！」
ひとまず彼女を庇うように前に立つと、机から身を乗りだし、男子生徒が凄むように顔を寄せる。
「なー、会長よぉ。なんとか言ってくれよ」
「あ、うん……気持ちはね、わかるよ？」
彼の言葉に嘘はないだろう。大きな身体ではあるが、不良というわけではないし、凶器と悪意に晒されることに怯えている、そんな気配を感じた。
（だけど……）
そんな彼が武器を持って、学内で暴れる立場になればどうだろうか。大勢の人が恐怖し、下手をすれば怪我をして、怒り、悲しみ、憎しみ――それらの負の感情が膨らんでいくことになる。
闇を増大させる行動だけは、絶対にさせてはいけない。だからといって、彼を頭ごなしに批判するのも以ての外だ。
「――こんなの持ってたら、逆に君が危なくなると思うんだ、私は」
「……って、どういうことだよ？」
「相手が複数だったり、より強い武器を持ってたりしたら……刺激された相手が、攻撃してくるかもしれない。それならまず、危険に近づかない、近づいて来たら逃げる、ってことのほうが大事だよ」
諭すようにゆっくりと言い聞かせるが、やはり彼は納得できないらしく、表情を歪めている。背後で八千代が息を呑み、警戒を露わにする、その緊張した気配が背中から伝わってきた。
「それにね――」
その気配を和らげるように、芽衣はにっこりと柔らかな笑みを浮かべると、男子の肩を優しく撫で、その大きな手をそっと握る。
「君は、こんなに大きくて、強い身体を持っているじゃない。誰かを威嚇することじゃなくて、もっと弱い誰かを――私や、副会長や、小さな子たちを守ることを、考えて欲しいな」
「――っ！」
なぜだか男子は顔を赤くし、不意にその視線を背けて顔を覗き込ませると、重ねて告げる。
「これは放課後に返すけど……もう持ってきちゃだめだからね？　誰かを守るのに必要なのは、武器でも暴力でもなくて――勇気と優しさだもん」
「っっ……や、その……それは……」
「大丈夫！　自分を守ろうとする君なら、きっとできるよ……一緒に頑張ろ、勇気だしてさ！」
ギューッと、力いっぱい彼の手を握り締めると、男子は言葉を失ったように口を開閉させ――。
「――す……すんません、したっ……」
赤くなった顔を勢いよく下げ、机の上の護身具を、おとなしく押収物の箱へ入れた。そうしてカバンを手にすると、足早に門を潜ろうとする。
「あ、ちょ、ちょっと待って！」
それを制止し、警棒を返すためにクラスと名前を聞こうと、芽衣は声をかけたが――。
「いえ――そんなもんあっても、か……会長は守れないんで……返してくれなくて、結構っす！」
叫ぶように言い残し、彼は走り去ってしまった。
「あ……あ、そう？　えっと……それじゃ今日も一日、頑張ってねーっっ！」
呼び止めかけた手を伸ばし、ブンブンと振って彼を見送った瞬間――周囲の生徒たちから、お囃子のような口笛と喝采が響いたのは、言うまでもない。
……
「おかしいなぁ、普通に対応したのに……」
生徒たちの熱い視線と歓声から逃れ、ようやく息をついた芽衣がため息をもらすと、そこに優しい笑い声が降り注ぐ。
「ふふ、仕方ありませんよ、会長」
「八千代ちゃん……って、会長禁止！」
同級生、そして初めての友人である彼女には、名前呼びをし合うと約束していた。その指摘を受け、困ったように微笑みながら、八千代は頷く。
「はいはい……ですが芽衣は、皆に慕われていますからね。いまのもそうですが、以前も……不良生徒を更正させたりと、実績も豊富ですし」

「いやー、あれは、ほら……なんていうか、その……たまたまっていうか……私が、そういうのやだなって思っただけで……」

しどろもどろになりながら答えることになった、八千代からの指摘は、転校してきて半年と少しが経った頃、二年の冬の話である。忘れもしない、芽衣がシュカと出会い、世界を守るために契約を果たし、光魔少女メイになった出来事だ。

転校した当初は普通の学園だった、この時明台学園の異変は、その夏を越えた辺りから、急激に雰囲気を変えたと言っていいだろう。いや、学園のある街も、同じように空気が濁りつつあった。

街では犯罪が多発するようになり、学園の生徒が事件に巻き込まれることもあれば、問題を起こすこともある。特に、不良と呼ばれる生徒たちの問題行動は、学園外ではなく、学園内にて顕著だった。

芽衣はこの学園の、以前までの雰囲気をとても気に入っていたし、問題の生徒たちも悪い人ではないと信じていた。だからこそ、どうにかして彼らを説得しようと考え、夜の学園に向かったのである。彼らは家にも帰らず、使われていない旧校舎の倉庫を、溜まり場にしていると聞いたからだ。

「無茶をします……せめて私にも、ひと言くらい伝えていってくだされば……」

「だめだよ、そんなの！　八千代ちゃんが危ないじゃない！　うん、絶対ダメ！」

「それは芽衣も、同じだと言っているのです」

据わった目でジトーッと睨まれると、うっと言葉が詰まり、なにも言い返せなかった。

「確かに芽衣は、学業優秀、スポーツ万能、おまけに武道も嗜んでいると、まさに完璧な人間です」

その言葉通り、芽衣は学年一の成績を誇り、八千代はそれに次ぐ成績だ。そんな彼女らが生徒会を仕切っているこの学年は、黄金世代とまで称される。

「えっへへへ……そっかなぁ……」

「褒めてません、お説教です」

据わったままの目に気づき、芽衣はカクンと頭を下げた。これだけ暑い時期なのに、彼女の視線はあまりにも冷ややかだった。

「だからといって、男女の膂力差も考慮しない、短絡的な行動を起こして……あのあと、旧校舎は大火事になりますし……本当に、その……し、死んでいたかもしれないんですよっ!?」

「はい、反省してます……」

なにしろ、あれを燃やしたのは芽衣だったと言っても過言ではない。もちろん、間接的にだが。

夜の学園、旧校舎で見たものは、闇に蠢く異形の化け物だった。悲鳴を上げて逃げだした芽衣だったが、化け物は追ってこない。そこで芽衣は『あれ？』と疑問を抱き、足を止めたのだ。

――どうして彼らはいないのか、そして、あの化け物はどうして追いかけてこないのか。

（……怖かったけど、確認してよかった）

戻った芽衣が見たものは、小さく呻き声を響かせる化け物と、それに向かい合う、白い蛇の姿。会話を聞いたところ、蛇は化け物を倒そうとしているらしかったが、どうして蛇がしゃべっているのかと考えるより先に、芽衣は化け物の声が気になった。

彼ら全員の声、それが多重音声となって響いていたからだ。

（で、思わず声をかけたんだよね、そしたら……）

芽衣の声に反応した化け物は、急に理性を失ったように暴れだし、白い蛇――つまりシュカは、それで大怪我を負ってしまった。放っておけず、彼女を連れて再び逃げだした芽衣は、そこでシュカから説明されることになる。世界のこと、闇の氾濫のこと、闇の力によって人々に異変が訪れていること。そして彼らが、その影響で化け物になったことも。

当然、芽衣はそれを聞いて、シュカに訴えた。

（みんなを元に戻そうって……シュカは無理だって言ったけど、それでもって――）

もちろんシュカは、そんなことは不可能だから、自分を置いて早く逃げろと返す。けれど芽衣は即座にそれを拒否し、彼女を抱えて逃げたのだ。あなたが死んじゃう、置いていけない――そう伝えたときの戸惑いの表情は、よく覚えている。

（一応、蛇なのに……きょとんとしてるの、よくわかったもんね……ふふ、可愛かったなぁ）

そんな芽衣にシュカは、自分ならあいつを倒せるから大丈夫と告げたが、それを聞いた芽衣はなおさら彼女を放せなかった。倒せるなら、元に戻す方法も考えて――そう訴えたのだ。

無理、無理じゃない、そんな言い合いを何度も繰り返し、結局根負けしたのはシュカのほうである。どうしても戻したいなら、方法がなくはない、ただし――相応の覚悟はしてもらう、と。

そんな脅しのような言葉に、芽衣は一も二もなく頷いて、方法を教えてもらったのだ。

（なんて言ってたっけ……それなら――）

『私と契約して……世界を救ってちょうだい！』

（ちょっ……学校では静かにしてて！）

遠方からテレパシーで話しかけてくるシュカを嗜めながらも、芽衣はそのことを思いだす。

（そうそう、契約……みんなを戻したいなら、光魔少女になって、闇と戦うしかないって――）

ロクに説明も聞かず応じたメイに、シュカは魔少女になるリスクを、何度も説明してくれた。戦いに敗れれば人として終わる、闇の氾濫を防ぐまで戻れない、なによりも危険が大きい――等々。

（……それにしても、もっと早く提案してくれてもよかったのになぁ。どうして隠してたんだろ？）

『魔少女になることは、その子の身体に負担をかけ

るということだもの。できれば契約したくなかったのよ……即答されるなんて、思わなかったわ』
テレパシーはやめてと言ったのに、シュカは聞き入れてくれない。時々、それで授業の邪魔までしてくるのだから、困ったものである。
（それで契約して、闇に呑まれたみんなと戦って、魔法で元に戻したはいいんだけど……そのときもれた闇の力が、火種になって――）
旧校舎は炎上した、大炎上した。景気よく燃え上がる校舎を呆然と眺めながら、慌ててみんなを担いだ芽衣――ではなくメイは、まず火災の原因に疑われないよう、彼らを遠くのビルの屋上へ運んだ。それから魔法で消火活動を行い、シュカの声で通報を済ませて、自分も慌てて逃げだしたのである。
あのときは大変だった――などと考えていると、八千代が目の前で、大きなため息を吐いた。
「あの生徒たちを、芽衣が気にしているのは知っていましたから……もしかして、巻き込まれたんじゃないかって……気が気ではありませんでした」
翌日の学校での騒ぎを思いだしているのか、頬に手を添え、表情を曇らせていた。
「ごめんね、心配かけちゃって……」
「いえ、無事でしたから。でも、それからですよね。芽衣が学園のために、色々な活動をしていたのは元からですけど……さらに精力的になったのは」
うん――と、笑顔で頷いて応える。
元に戻った彼らは、あれから憑き物が落ちたように真面目になり、いまではすっかり優等生だ。闇が人を変えるというのは間違いない、けれどそれは、闇を払えれば元に戻れるということだ。
（……そう、だよね……だから私は――）
間に合わず、闇とともに取り込まれた人が消えてしまうこともある。そして、闇の氾濫はいまだに止まらない、それもわかっている。
けれど少しでも可能性があるなら、自分がそれを行えるなら、芽衣は光魔少女として、溢れてくる闇の力をここで食い止めようと、改めて誓う。
（絶対――みんなを、守る……ヤミヨちゃんのことだって、諦めないっ……）
きっと彼女は、あのリンドという闇魔生物に唆され、あのようになってしまったはずだ。あるいは闇の力に大きな影響を受けたか、それとも事実、あれが彼女の本音なのか――いずれにせよ。
（その原因も、全部……聞かせてっ……ヤミヨちゃんと、もっとお話がしたいのっ……）
芽衣は初めて会ったときから、彼女が闇魔少女として、闇を助ける戦いをしていると聞いたときから、ずっと気になっていた。どうして彼女はそう思ったのか、どうしてそんなに人を信じられないのか、どうして――そんな冷たい目をしているのか。
彼女は、自分は一人だと言っていた。だけどそれは、あの冷たい瞳がそうさせているのだと思う。笑えば可愛いと思うし、それを見れば、友達だって増えるはずだ。彼女を思い止まらせることができるとすれば、家族や友達、信頼できる相手だと思う。
彼女のことをもっと知り、自分がそうなればいい――そう思って芽衣は、彼女との会話をずっと望んできた。その結果、相容れないとなれば、彼女を倒すしかない。だが、そうなる前に納得したい、あわよくば彼女と友達になりたい。一緒に戦えるなら、どれほどの人々が救えるだろうか。
「私、頑張るから――」
「はい、お願いします。そろそろ戻らないと、二人も抜けていては、検査も大混雑ですし」
「――――あ」
その言葉を聞いてようやく、いまが朝の荷物検査、その真っ最中だったことを思いだした。
「い、いっけないっ！　八千代ちゃん、早く！」
「急がなくても大丈夫ですよ。それよりもっと、余裕を持っていてください……会長なんですから」
「そ、そうだけどぉ……」
立候補でなくても、一クラス分ほどの他薦があれば候補者になる生徒会選挙、その結果を思いだし、芽衣は大きくため息をもらす。
「はぁ……八千代ちゃんがいなかったら、会長なんて絶対無理だったよぉ……推薦って怖いね」
「私もです……芽衣がいなかったら、副会長なんてしていませんでしたよ？」
疲れ切った顔の芽衣を見つめて、八千代は上品に口元を覆い、クスクスと笑みをこぼすのだった。

◇

そんな日々を送り、数日後――。
「……やっぱり、新校舎のほうじゃないのかな」
昼休みの屋上、誰も入れないはずのその場所に、生徒会長の権限を利用して入り込んだ芽衣は、周囲を広く見回して、そうこぼした。
夏の日差しは相変わらず厳しいが、今日は風が強く、日陰にいると心地よい。その心地よさを堪能し、大きく伸びをする芽衣の視線は、半壊し立ち入り禁止になっている旧校舎に向けられている。
「そうね。初めて出会ったときもそうだけど、あっちのほうは闇が集まりやすいみたいだし……」
普段からそうしているように、芽衣の肩に乗ったシュカがそう告げた。授業のときなどは姿を隠し、芽衣から離れているシュカだが、調査中や家にいるときなどは、いつもこのようにくっついてくる。一体感を持つことで魔力を同調させ、強化されるとかなんとか聞かされたことはあるが、ただ楽したがっているだけにしか見えない。
そんな彼女の言葉に頷きつつ、芽衣は考える。
（そういえば……ヤミヨちゃんも、初めて見たときは、旧校舎の屋根にいたんだっけ……）

ああああああ
クリいひいいいッ♥
…っあ…♥
あが…っ♥
…ッ♥
触手スーツでのクリ責め&
ハカセとの密着Hで
ミコト大ピンチ!!
深淵戦隊
クトゥルンジャー
～姦濫！正気を失った仲間たち～
ホットパンツは脱がさないままで♥
漫画 COMIC
からすま弐式
んやっと
輝きが消えたね…っ
ハカ…セ…
だ…め……
ついに
ついにサンジュエルが
六つ揃ったぞ！

ミュンッ

――っ!?

装着
解けちゃったね♪

ゴォォ…

もう勝ち目ないよ…
ぼくと一緒に
ハスタードの所へ…

うわぁっ!?

ギュッ

チッ!

わぁぁぁぁぁ…!!

ゴ

ハカセ…えっ…!!

ゴ

ゴ

ゴ

ハカ…セ…

ゴ…

ゴ

み…みんな…っ しっかりして…！ ハカセを… 追わなきゃ…っ
う…！ …ぐっ…
…だが…っ サンジュエルは… 奪われて…
もう…誰も… 装着できないんだぞ…っ
……装着…できなくても…
私は… クトゥルンジャー…!!
ハカセは私が… 絶対助けるわっ!!
――!?
ここは一体…!? 洞窟ってより… 生き物…っ？
!?
ククク… 来たか愚かな人間よ…

ハスタード!?

サンジュエルが揃い
完全顕現までもうすぐ…

洞窟と…
同化してる!?

後はこのまま
この星との一体化を
進めるだけだ

っ貴方と無駄話に
来たんじゃないわ!
ハカセはどこに…

はえっ!?

なっ何してるの
レッドっ!?
放してっ

うう…

モヒャッ♡

きゃうっ!?

みんなっ どうしたの!?

ガバッ

クトゥルプスの冥助もない ただの人間が私の前で無事でいられるはずがないだろう

正気は殺がれ そのうちに発狂する

まぁ…そ奴らの望むままにしてやれば少しは諍える…かもなァ

…っ でたらめ言ったって…!

ミコト…お!

俺…おかしくなりそうだ…っ 助けてくれ…えっ!

……っ!

ハスタードの言う事が本当かは分からない…

でも…レッド達がおかしくなっているのは事実…っ

敵が動けない今…まずは…みんなをどうにかしなきゃ…!

みんなっ…落ち着いて! な…何すればいいの…?

ぺちゃっ

こ…これをっ口で…
してくれぇ…っ！
きゃあっ!?
口で？
舐めろってこと!?
ありえない…！
変態だわ…っ
ミコトぉっ早く…！
意識トびそうだ…っ
わ…わかった…
から…ぁ
はっ…ぅ
舌…触れただけでっ
汗の…苦くて…
しょっぱい…
濃い味して…
ひっ…！
舌先…
痺れう…っ
そんな…亀頭ばっかり
舐られたら…
もどかしすぎて…っっ！
へぁあ…！
あ

口っ口全体で咥えてくれ…!! 時間がないんだ…っ!

こ…こんなおっきいの入れるの…?

んぉ…おぽっ…ぉ…!

あッ…ぉおお…あったけぇ…!

そんままベロで包んで…あぁそう…っチ■ポ融けそうだ…ッ!

んっ!…ごっぉ…ぉぉ!

くそっ一人ずつなんて待てるかよっ!

ッ!?

焔侍(えんじ)だけズルいよミコト! 手でしてっ!

んむぉぉっ!?

ごめんミコト…っ俺髪借りるね…っ

んんっ!?

小説／酒井仁（さかいひとし）
NOVEL
挿絵／MISS BLACK
ILLUSTRATION
キャラクターデザイン／ほへほへ

未来を見通す王妃が知った
自らに訪れる最悪の結末！

選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説！

聖王妃陵辱
～狂った運命の歯車～

ご案内 この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～5の番号がふられていますので、各シーンの末尾にある選択肢を選び、ストーリーをお楽しみください。

シーン1

その侵略は、じつに半年以上をかけ、ありとあらゆる情報統制を敷いたうえで仕掛けられたものだった。

侵略の牙を向けられたのは、数百年以上、他国の侵略の一切を退けてきた神秘にして無敗の王国、エルフニル。

そのエルフニルに対し、執拗なまでの対抗意識を燃やし、その豊かなる領土を我がものにせんと幾度も進行してきたのが、隣国ゲディス帝国、そしてゼベダリウス・ゲディス王である。

「バカな……なぜこの包囲陣が読まれていたというのだ」

崩れ落ちる自陣を前に、ゼベダリウスは茫然自失で呟かずにはいられなかった。

エルフニルは特に軍力で勝っているというわけでも、優秀な将軍がいるわけでもない。国力からすれば、ゲディス帝国に簡単に飲み込まれる程度の小国にすぎない。

なのに、この国が無敗を誇っているのは、王妃シェーラ・エルフニルの唯一無二の「ちから」によるものだ。

エルフニル王国王族の女性にのみ発現するといわれる神秘なるちから。

それは、天を突くような大男を叩きのめすような怪力であるとか、大地を裂くような攻撃魔法などの、わかりやすい能力ではない。

先読み――。

一見地味に思える能力こそが、戦(いくさ)においては最も有用に生かされるのだ。

敵がどのような布陣で、どのような戦略をもって、いったいいつ攻め込んでくるのか。

その常に一歩先を読んで先手を打つ。他国に攻め入ろうとする軍勢からすれば、これほど恐ろしい能力はない。

自分たちがどれほど周到に戦略を決め、戦術を選び、軍勢を配置しようとも、それがすべて筒抜けなのだ。

そして、その能力を生まれつき身につけたエルフニル王国の指導者にして高貴なる王妃……彼女こそがシェーラ・エルフニルその人であった。

「む――西の河の堰があと数刻で決壊、氾濫します。作業と住民の避難を急いでください」

「はっ！」

「シェーラ王妃さま。帝国の追撃に警戒すべきでは」

「いえ――彼らの兵站はすでに伸びきっています。前日、我らの特務隊が補給路を断ち切っていますので、もはや退却するしかないでしょう」

「ははっ！」

シェーラの先読みは、ただの一度も外れたことがなく、兵士たちは王妃の能力に全幅の信頼を置いている。

どれほど強力な軍勢相手でも、彼らは敵軍の一歩手前を制することで、いくらでも優位に戦況を進めることができるのだ。

それでいて、美しき王妃シェーラは戦闘的でもなければ残忍でもなく、民と国土、自然を愛する優しき女性であった。

新緑を思わせる碧の髪、碧の瞳……抜けるような白い肌と造化の神が念入りに作りあげたであろう美貌に、みとれぬものは誰ひとりといない。

しかもむっちりと豊満なバストとヒップ、美しいドレスと軽甲冑を身にまとって戦場を駆けるその姿は、まさしく神秘の戦乙女。

エルフニルの兵士たちは、この異能と美貌と慈愛を持った王妃に心からの忠誠を誓い、彼女に仕えることに誇りを抱いていた。

軍事行動にしたところで、ゲディス帝国が無駄な――まさしく国力の無駄遣いとしか言いようのない――侵略行為を仕掛けてこなければ、無駄な血が流れることもないだろう。

（ゼベダリウスも……ああもムキになら なければ、国交や貿易でもっと友好な関係になれようものを）

だが、平和を愛するシェーラと違い、帝国の王はただひたすらに覇道を突き進もうとする「征服王」と呼ばれる男だった。

聞くところによれば、帝国は軍備増強のための重税を国民に強いており、国の内情は決して豊かとは言えないという。

民は重税に苦しみ、徴兵に若者は駆り出され、国力は疲弊する一方だという。すでにエルフニルへの侵略行為はゼベダリウス個人の意地によるものだと言っても過言ではない。

ことごとく自らの前に立ちふさがるシェーラに対する個人的恨みで挑んできているのだ。

（ゲディス帝国の民も哀れなことだ……聞けば領内では疫病が流行りつつあるとか）

しかし、シェーラ王妃にとってなにより大事なのはエルフニルの民。

先読みのちからを持って王国の平和を保つのが王妃の役割。

その先読みのちから……エルフニルの平和を保つ要に、ほんの僅か歪みが生じていることに、誰が気づいていただろう。

その歪みがおぞましい未来をもたらそうとしていることに、エルフニル王国民、いやシェーラ王妃自身も気づいていなかったのだ。

「よぉしっ、先発隊の報告通りだ！左右よりエルフニル軍を包囲し、殲滅だぁっ」

「シェーラ王妃だ、王妃を捕らえよ！」

うぉおおお……という鬨(とき)の声と共にエルフニル軍に襲いかかるのは、勇猛を持ってなるゲディス帝国騎馬隊。

王妃の率いる騎士団は退路を阻まれ、為す術もなくその数を確実に減らされていく。

「シェーラ王妃、我らが突破口を開き

ます。どうか王妃さまだけでもお逃げください！」
「おぉ、我が命燃やし尽くしても、我らが主君さまに傷一つつけてはなるまいぞ！」
騎士たちの献身にもかかわらず、怒涛のように押し寄せる帝国兵士によって一人、また一人と騎士たちが打ち倒されていく。
もとより、帝国とエルフニルとでは軍事力自体は比較にならない。
だが、シェーラ王妃の先読みのちからによってエルフニルは常に優位に立ち、敵を欺き、これまでただの一度もピンチに陥ったことなどなかったのだ。
（なぜ……どうしてこんなことに!?）
これまでただの一度も先読みを外したことのない美しい王妃は、次々と打ち倒されていく自軍の騎士たちに血の気を失っていた。
そして気がつけば自軍の半数以上を失い、シェーラはここにおいて投降を決意した。
（このままでは……彼らは最後の一兵卒までわたくしのために命を投げ出してしまう）
武装解除させられ、縛りあげられた兵士たちの前に、美しき王妃は引き出される。
凶暴な目を血走らせる帝国兵をかき分け、姿を現した巨漢……彼こそゲディス帝国、征服王の名を持って知られるゼベダリウス・ゲディス。
剛甲冑を身にまとったその威容、分厚い胸板、太い二の腕に髭面。
だが王の威厳というよりは、弱き者を一切の容赦なく蹂躙する、乱暴で粗野で危険極まりない、常人離れしたオーラをしていた。
「ようやくお目通りかなったというわけだな、シェーラ・エルフニル……我がゲディス帝国王、ゼベダリウス・ゲディスだ」
引き出された神秘のちからを持つ王妃に、ゼベダリウスはじろじろと無遠慮な目を向ける。
「ふうむ……これが先読みのちからを持ち、これまで我が帝国を退けてきた王妃。だがどうしたのだ、これほどにあっけなく包囲され、投降してしまうとは」
髭面の暴虐王の嘲笑に、エルフニルの兵士が歯がみをする。
「くっ、我らの王妃さまの先読みは絶対だった！　これまで王妃さまの先読みの下、我らがなんど貴様たちを退けてきたか……」
「その先読みとやらも、今回は通じなかったようだな？　いかに神秘のちからといえど、ただ一度の敗北でこのありさまだ……！」
ずらり剛剣を抜き放つと、ゼベダリウスはただ一刀のもとに丸腰の兵士を斬り伏せる。
「ぎゃぁあああっ」
鮮血を迸らせて倒れ伏すエルフニルの兵士に、シェーラは「あぁっ」と声を上げる。
「敗残の兵を辱めるとは、それが帝国のやり方か！　手にかけるなら、わたくしにしなさい、ゼベダリウス！」
美妃の顔は怒りに満ち、唇は震えていた。シェーラにとって彼らは単なる臣下というだけではない。
シェーラは「先読みの王妃」と呼ばれてはいるが、じつはエルフニルに「王」はいない。
シェーラが王を選び、夫を迎えるのは、次代の王妃をその身に宿すとき、その一度だけ。
シェーラにとってすべての臣下、国民こそが愛しき「夫」であるのだ。
それゆえにシェーラは「夫」のために身も心も捧げ、すべてのエルフニル臣民は王妃シェーラをあがめ、敬愛しているのだ。
「そうはいかぬ、シェーラ・エルフニル……聞きしに勝る器量よし、そう簡単に命を奪ってはもったいない」
ゼベダリウスの目に、血に飢えた獣のような剣呑な光が宿る。
毛深い指を乙女のおとがいに当てて顔を上げさせ、にたにたといやらしい笑みを浮かべる。
その凶暴な脳内でいったいどんな悪辣な考えを巡らせているのか……考えたくもない。だが囚われの身であるシェーラに反撃の機会はない。
（それに下手をすればまたわたくしの大切な兵たちの命が奪われてしまうことに）
「これからお前は我の所有物、愛玩物だ。エルフニルの民の前で存分にいたぶり、永遠に我の持ち物になってもらおう」
「くっ」
それにしても、なぜこの一戦においてのみ、先読みのちからが発動しなかったのか――シェーラには理解できない。
帝国に魔導に通じた者がいると聞いたことはないし、ゼベダリウス本人に先読みを破るちからがあるとも思えない。
征服王は戦場においてもただただ力のごり押しで責めるタイプの猛将で、策を弄するような繊細さなどは持ってはいない。
だからこそシェーラ率いるエルフニル軍は、先読みを十分に生かし、勝ち続けてきたのだ。
（なにか……なにかこ奴の向こうに途方もない悪意、企みを感じる）
それは眼前にいる凶悪な巨漢よりもさらにおぞましい、邪な悪意のような気がしてならなかった。
（けれど、それはいったいなんだというの……？）

◆ゼベダリウスの裏で暗躍する存在を感じる↓　シーン2　77ページへ
◆ゼベダリウスの裏にいる悪意の正体に気づけない↓シーン3　78ページへ

シーン2

その男を一目見た瞬間、「先読みの王妃」シェーラ・エルフニルの背中を冷たいものが走った。

（な、なんだこの禍々しい気配を持った男は）

見たところ兵士でもなさそうだし、腕力があるとも思えない小男だが、全身から悪意を放っているような不気味な雰囲気を持っていた。

「万事首尾よくいかれたようですな、おめでとうございます、ゼベダリウス陛下」

「おお、そなたは邪悪なる魔導士『闇のゾンブ』ではないか。こたびの貴公の活躍、見事であった。おかげでこの忌々しい雌狐一派を撃破することができたわ」

黒いフード付きのゆったりとした導士服を身にまとった猫背の男。

目だけがぎょろぎょろとした男の顔に見覚えはなかったが、シェーラは直感した。

（間違いない、この男が身にまとう闇の気配……こ奴がゼベダリウスに手を貸し、わたくしの先読みを妨害したのですね）

その方法まではわからないし、今先読みのちからはたしかにシェーラの中に感じる。

だがそれではダメなのだ――国力でも武力でも劣るエルフニル軍にとって、先読みこそが必勝のちから。

こうして先読みが撃ち破られてしまえば、力で押し切られてしまう。

シェーラはこの不気味な魔導士から逃れ得る方策を先読みしてみたが、未来は闇に閉ざされたままだ。

「まったく大した男だ！　いかに我が勇猛なる征服王であろうとも、妙な先読みとやらのおかげでなんど屈辱を味わってきたことか」

そういうと巨漢の王はぐいと酒杯を呷り、兵士と共に縛りあげられたシェーラを愉快そうに見下ろす。

「ゾンブ、お主が先読みを乱せられると持ちかけてきたときは、さすがに信じられなかったが」

やはり、シェーラの先読みを狂わせたのは、この小男の仕業。

だが、たかが人間にそんなことができるとは、シェーラはいまだに信じられない。

「それはもう、私めの長年の魔導学の結晶にございます。そして我がちからは、ゼベダリウス陛下のような天下の覇者たる方のために使われるべき」

揉み手して追従する暗黒魔導士に、巨漢はぐわははは豪快に笑い、再び酒杯を呷る。

悪辣な王と悪辣な魔導士、醜悪な二人の男を、シェーラとエルフニル兵士は憎々しげに睨む。

だが縛りあげられた彼らに抵抗する術はないのだ。

「それで陛下……シェーラ王妃についてですが、ぜひ私の魔導研究のために下賜してくださるというお約束なのですが」

ぎょろ目の魔導士に、巨漢の征服王は鷹揚に頷いた。

「うむ、我は幾度となく彼奴等に苦汁をなめさせられてきた。その目障りなエルフニルが、その女が倒せればよいのだ。神秘のちから、先読みのちから？　そんな怪しげなちからを持った女になど興味はない」

その言葉に、猫背の小男は深々と頭を下げる。

「我はもっと無力で純朴な村娘を力ずくで壊すのが好きでのう。あとはなにか欲しい褒美はあるか」

「ははっ、ありがたきお言葉……では、エルフニルの兵士を数名ばかり、いただけますでしょうか。シェーラ王妃ともども、我が魔導研究の贄と致しますれば」

好きにしろ、とだけ言い残すと、帝国の征服王は兵士たちを連れて近くの村の襲撃に出かけた。

勝利に酔いしれる彼らは領民に対しても一切の容赦をしない。抵抗する村人は殺し、女を犯し、戯れに子どもを殺す残虐集団なのだ。

圧政と重税によって自国の民をも苦しめているゼベダリウスは、村の若い女を侍らせ、夜通しかけて埒もないどんちゃん騒ぎに興じるつもりなのであろう。

その後ろ姿を見送った暗黒の魔導士は、にんまりと悪意に満ちた笑みを浮かべる。

「ふん、力任せの戦争しかできぬ、無知蒙昧の愚王めが……我が魔導のちからが完成すれば、貴様などいずれ傀儡としてくれるわ」

どうやらゼベダリウスに力を貸していたのは事実のようだが、彼自身に帝国への忠誠心はないようだ。

（『闇のゾンブ』とか言ったか……ゼベダリウス以上に底知れぬ男……こんな男がわたくしの先読みを破ったというのか、まだ信じられない……）

魔導の道は下法の道。

魔導士と呼ばれる者は、富や名声といった現世利益や権力を求めるものである。

だが、この黒ローブの魔導士は、ゼベダリウスから報奨金を受け取るわけでもなく、ただ魔導研究のためにシェーラが欲しいと申し出た。

（あるいは根っからの研究肌の人間なら、それもありうるかもしれない。だが、このゾンブという男からは邪悪の気配……危険な匂いがする）

聖王妃は先読みのちからによってそれを見極めようとした。ゾンブによる妨害の術はすでになく、先読みのちからはすでにシェーラの中に甦っていた。

すると――――。

◆「闇のゾンブ」の中に潜む真の邪悪に気づく↓　シーン4　81ページへ
◆ゾンブの裏に潜む真の邪悪に気づけない↓　シーン5　86ページへ

著者近刊　『魔法少女W調教　フレイア＆クリスタ』『退魔剣士 鎖夜　魔窟学園の罠』『引きこもり勇者のために美少女パーティーが一肌脱ぐようです』『乙女騎士団が隊の存続のために枕営業するようです』　好評発売中！

シーン3

「くっくくく、なにが神秘のちから、無敗の王妃だ！　貴様などこうなっては、ただの女にすぎぬわ」

薄布の肩口を力任せに掴み上げると、征服王はぐいとシェーラを抱き寄せて唇を奪った。

オスの強烈な体臭にむせかえる唇を割って唾液を流し込まれ、シェーラはなんどもむせかえる。

「くっ、げほ……ぶ、無礼者……！」

「神秘の王妃は、涎まで甘露のようだな。それに、なんともいい匂いだ」

そう言って太い腕に抱きすくめた女体を撫でまわし、乳や尻を揉みまくる手つきは、一国の王とは思えないほどの品のなさ。

だが、ゼベダリウスの振る舞いは、帝国兵士にはそう珍しくはないのだろう。王の面前でありながら、げらげらと無力な王妃を嘲笑っている。

武装を解かれたエルフニルの兵士たちは、自分たちの敬愛する王妃が、下品な征服王に弄ばれるのをただ見ていることしかできなかった。

「シェーラ、これから自分がどういう目にあわされるのか、当然先読みできるのだろうな」

いくら先読みができると言っても、それは直接的な強さにはつながらない。相手の策、行動を読んで先回りをしなければ、その真の力は生かせないのだ。

それを理解したうえでゼベダリウスは王妃を辱めていた。

薄布の上から豊満な乳房を力任せに揉みしだき、指先でつまんだニップルを捻り上げる。

痛みに打ち震える美しい乙女を嘲笑っているのだ。

「どうした、不敗無敵のエルフニルの兵士は、自分たちの王妃が汚されても知らん顔か！　それともあれか、我が君が敵の将に乳を揉まれ、口を吸われるさまを見て、マラをおっ立ててでもいるのかな？」

れろりとシェーラの首筋をねぶり上げ、これ見よがしに乳房を揉み潰す様子を、エルフニルの兵士に見せつける。

だがシェーラはその屈辱に耐えつつ、自軍の兵士たちに目で訴える。

（わたくしはどうなってもいいのです。きっと逆転の好機はやってきます。だから命を簡単に投げ出さないで）

シェーラの率いていた主力隊が危機に陥ったことを知れば、きっと救援部隊が送られるはず……だがシェーラを辱め続けるゼベダリウスのもとに、絶望的な報告が届く。

「ゼベダリウスさま、ご報告申し上げます！　エルフニル別働隊を発見、これを包囲、殲滅に成功したとのことです！　我が軍の被害は軽微、エルフニルは敗走しております！」

「そうか、でかした！　この勢いのまま、エルフニル王都に攻め上がるぞ」

（な……そんな、あ、りえない）

勝鬨（かちどき）を上げる帝兵士、そしてシェーラの愛する兵士たちは絶望にうなだれる。無敗を誇るシェーラの先読みは、ほんの少しの歪みから壊滅的敗北を喫してしまったのだ。

「おっと、顔色が悪いぞ奇跡の王妃。いや『元王妃』か？　国も民も、もはや我らの支配下に置いてくれよう。もちろん、お前自身もな」

細く白い喉に太い指を巻きつけると、ゼベダリウスはシェーラの唇を奪い、肩口の薄布をびりびり引き裂いていった。形のいい乳房がまろび出ると、帝国兵たちがひゅうっと下品な口笛を投げかける。

「おお、元王妃の乳はじつに張りがある。この桃色のコリコリした乳首など、そう見られるものではないぞ」

きゅっとくびれた腰回りを抱き寄せて後ろを向かせると、征服王はシェーラの尻に股間を押しつけた。

ごりっと硬いものを感じ、シェーラは目元を赤く染めて身をよじる。

「くっ、は、はな、せ……っ」

それが男性器であるということは理解できる。そして、この卑劣漢が自分の肉体に興奮しているということも。

「エルフニルを統治するのは代々王妃……王妃にとっての王とはすべての国民であり、それゆえ次代を産むときまでは清らかな体だそうだな」

「とすると当然、我らがゼベダリウス陛下のお子をお産みになられるのですか、これはめでたい！」

手を打って喜ぶ帝国兵たちは、言うまでもなく本心から祝っているわけではない。

エルフニルは敗北し、これからゲディス帝国に支配されるのだ。

敗者は何もかも奪われ、すべてのエルフニル国民が帝国の奴隷同然に扱われるということなのだ。

もちろん――それはシェーラ王妃も同じ扱いということ。

「くそ……くそぉおおおおっ！」

「い、いけませんっ」

絶望にうなだれていたエルフニルの兵士が、隙を突いて傍らにいた帝国兵の腰から剣を奪った。

憎悪に燃える眼差しをゼベダリウスに向けるや、剣を構えて突進する。

周囲の帝国兵は一瞬のことに対応できず、剣先はゼベダリウスの胸に吸い込まれるかのように見えた。

鋭い金属が筋肉を刺し貫き、狙い過（あやま）たず心臓に吸い込まれる――ゼベダリウスの胸ではなく、エルフニル兵士の心臓に。

「あぁ――っっ」

思わず目を背けるシェーラ王妃の前で、兵士は胸から血を噴き出して倒れる。征服王はシェーラの体を弄びつつ、兵士が反撃の機会を窺っていることにとっくに気づいていたのだ。

「せっかちな男だ。王妃と崇めてきた女が、我が肉槍に貫かれる貴重な瞬間を待たずして、自らが貫かれるとは」

「くっ、ゼベダリウス……！」

ぴりっ、びりびりいいいっ。

王の手の動きにあわせ、シェーラの体を包む薄布が大きく引き裂け、白い肌がみるみる露出する。

下街の娼婦でもここまでひどい扱いは受けまい。むき出しになった乙女の尻に股間を押しつけ、征服王は「くい、くいっ」と下品に腰を振り立てる。

「おおっ、さすが我が君。その腰つきだけでシェーラどのは気持ちよさげ、いまにも昇天しそうですな」

「生娘王妃を発情させるとは、我が君の精力は天下無双よ！」

弄ばれるシェーラの半裸に、帝国兵たちの股間ももっこりと盛り上がっている。絡みつくようないやらしい視線が碧の髪の王妃の肌を陵辱する。

為す術もなく辱められる自分たちの王妃の痴態に、エルフニル兵士たちの顔が絶望に染まっていく。

「見るがよい、敗残の兵たちよ！　我がマラに貴様たちの王妃の純潔が奪われる瞬間を！」

「あぁあっ、いやっ、いやぁあぁ！　みっ、見ないでくださいっ」

だが、帝国兵はうなだれる兵士たちの顔を無理矢理上げさせ、シェーラの股間にゼベダリウスの膨らみが擦りつけられる光景を見せつけられる。

暴虐の王は凄まじい膂力（りょりょく）でばりばりと股ぐらの布を引き裂くと、隆々と天を仰ぐ肉蛇を露出させた。

これまで何人の女を陵辱してきたのか、赤黒い亀頭は金属のようにてらてらと張り詰め、ぶら下がった陰嚢は子どもの拳より大きい。

「我はこれまで、一〇人以上の側室に子を産ませてきた。正室も三人いたが、すぐに壊れてしまう……」

乙女の花弁に極太の凶器を擦りつけながら、征服王はおぞましいことを語り始める。

「だが……神秘の国の王妃、シェーラ・エルフニルであれば、そう簡単に壊れることもあるまい」

「ひっ？　い、痛い、痛いいいっ」

ごりっ、ごりっ、みしみし……まごうことなき純潔の証を保ったシェーラ王妃の肉穴は、言うまでもなく濡れていない。その窮屈な処女穴を、ゼベダリウスはたっぷりと時間をかけて拡張していった。

（な、なぜひと思いに……いいえ、わたくしのこの痴態を両軍の兵士にできるだけ長く見せつけるため）

自分は――――自分は、これほどまでに無力だったのか。

恥辱に屈するまい、涙を浮かべまいとしても、美しき王妃の白い頬に幾筋も涙が伝い落ちる。

「さてシェーラ。我も度重なる戦闘で女日照りが続いていてな。兵士どもは近隣の村を襲って若い娘を徴用しているようだが」

平和を愛し、規律を尊ぶエルフニルの兵士と違い、ゲディス帝国の兵士は平気で略奪行為を繰り返すために恐れられている。

必要とあれば、自国領内の村を焼き払うことすらいとわないのだ。

「だが、征服王ともあろう者が、そこらの村娘を相手にするのも業腹。お前のように美しく気品ある女こそが我の子種を受けるにふさわしい」

「や、やめ、ろ……この、卑劣漢め」

だが、太く逞しい腕に背後から抱きすくめられたシェーラに逃げ場はない。

それどころか、股間を強く擦られた拍子に腰が引け、「みりりっ」と亀頭の半分ほどがねじ込まれたのだ。

「うぎ、いい……っ。か、体が裂けるぅううっ」

シェーラとて女性としては長身のほうなのだが、ゼベダリウスは天を突く巨漢、その股間でそびえたつ凶器はまさしく陵辱兵器。

それでも、成熟した乙女の肉は悲鳴を上げつつも王の巨根に屈服してゆく。

「さすがは神秘の王妃。我がデカマラをしっかり呑み込んでいくではないか。その美しい女体が妊婦腹になるまで、子宮を満たしてやるぞ」

「いやぁ……あなたの子どもなんか孕みたくないいいいっ！」

「そうは言いつつ、まんこ肉はきゅうきゅうと我がマラを締めつけてくるぞ。そらそらっ」

みしみしっ、ぎし、ぐちゅ、ぶじゅうううっ。

シェーラ本人の意志とは無関係に、その肉体は己の生命を守るための本能に従おうとしていた。すなわち、肉穴の奥から熱い蜜液が分泌され始めていたのだ。

僅かな潤滑油を頼りに、悪辣なる征服王はほとんど肉棒一本だけで王妃の体を真下から刺し貫いていた。

ずっ、ずぶ、ずぶぶっ。

突き上げと共にゆさゆさと乳房が重たげに揺れ、二の腕を掴みあげられると、あたかも肉球を兵士たちに見せつけているかのようだ。

その哀れな、だが淫らきわまる王妃の姿に、いつしか帝国兵士だけでなく、エルフニルの兵士たちも目を奪われていた。

彼らの、シェーラへの敬愛、思慕の情が強ければ強いほど、目の前で無残に犯される女体から目が離せないのだった。

「おぉ、もはや長きの禁欲で辛抱たまらぬッ。最初の一発目をしこたまぶちこんでやるぞぉおおおお！」

「いやぁあああ、出さないで、中になんか出しちゃ、ダメぇえええええええええ」

体液と呼ぶにはあまりにも濃厚なそれが子宮にぶつかり、物理的な衝撃で女体はがくがくと揺さぶられる。

（お、お腹の奥が苦しい……内臓まで圧迫されて、いったいどれだけ流し込まれているの……）

「さあ、今宵は戦勝の宴だ！　お前たち、近くの村を襲撃するぞ、酒を、食料を奪え、村の女はババア以外は一晩中犯しまくれぇえええっ」

王と呼ぶにはあまりに野蛮なその言

葉に、帝国兵たちは諌めるどころか歓声を上げる。

そこよりじつに半年以上をかけて、ゲディス帝国はじわりじわりとエルフニル王国を削り取っていった。

「先読みの王妃」を失ったエルフニルにもはや勝機がないのは明白。一気に攻めのぼって王都を焼き払うことなど、赤子の手をひねるより簡単だったろう。

だが、ゼベダリウスは敢えてそうしなかった。

散発的なエルフニル残党を退けながら、ほとんど毎日シェーラを強姦するさまを敵兵に見せつけていたのだ。

「うわはははは、見るがよいエルフニルの者どもよ！　そなたらの王妃はいまやこのゼベダリウスのもの。貴様らが手をこまねいている、今この瞬間もゼベダリウスの子種を植え続けられているぞ！」

だが、僅かに残ったエルフニル残党には、どうすることもできない。

国力、戦力で劣る彼らが常勝してきたのは、ひとえにシェーラのちからあってのことだと、彼ら自身がわかっていたのだから。

「くそっ、奴らああやってシェーラさまを辱めることで、俺たちの誇りを根こそぎにしようとしてやがるんだ」

「ああ、シェーラさま……」

山車に立てられた支柱に両手首を括りつけられ、碧の髪の色艶も失った哀れな囚われの王妃。

その骨盤を抱き寄せて下腹部をぱんぱんと叩きつけると、元王妃は弱々しく呻く。

「おね、がい……少しでいいから休ませて……お願い、です」

ゆっくりした進軍の間中、征服王はシェーラを犯し続けている。

すでに朝から五発は射精されただろうか――――恐るべき精力というほかはないが、シェーラもまた、気を失うことすら許されずにいた。

「苦しがっているわりに、火陰はずっと濡れそぼっておるぞ。つい先月まで生娘だった王妃とは思えぬ淫乱さだな、シェーラ」

「あぁ、そんなっ。は、激しすぎますうっ」

エルフニル王国領内のあちらこちらの村や町を進軍しながら、シェーラは一日の半分以上を犯され続けた。

その女体は暴虐の王の乱暴に少しずつなれていき、いまや中出し射精されるたびに愉悦の声を漏らすまでに開発されてしまっていたのだ。

シェーラにとって不幸だったのは、彼女の先読みのちからは、ただあの一度の敗戦のとき以来、すっかり元通りになっていたことだ。

（あぁ、中でおちんちんがびくびくしてる、もうすぐ、またどぴゅどぴゅされてイッチゃう……！）

自分の体がいかに敏感になっているのか、これからどれほど強烈なアクメに包まれるのか。

それらすべてを先読みしつつも、シェーラにはどうすることもできなかった。

皮肉なことに、そのちから故にシェーラは狂気の中に逃げ込むことすらできなかったのだ。

「どうれ、お前の愛する国民に見せてやるがいい。我らの愛の結晶を」

「あっ、いやぁ、やめてぇえええ」

びりっ、びりびりいいっ。

ゼベダリウスの手が、シェーラの下腹部を包む薄布を大きく引き破った。

それを見た村人たちが息を呑むのも道理――――この半年間、ゼベダリウスにひたすら犯され続けてきた先読みの王妃の腹は、見事に膨れ上がっていたのだ。

「ひ、ひどい……あのお美しかったシェーラさまのお腹が、あんなに大きくなってしまって」

「あれって、征服王の子ども……ってことなんだよな」

「くそ、なんてことしやがる！」

そう、ゼベダリウスはシェーラを独占し、自分以外の誰にもシェーラを抱かせてはいない。

その膨れた腹の中にいるのが、ゼベダリウスの子であることは明白。

残酷なる征服王の凱旋に怒りの目を向けるものの、敗戦国であるエルフニルの民にはどうすることもできないのだった。

「どうだ、怨敵の赤子を孕まされる気分は？　その腹の子をひり出せば、すぐにまた種付けをしてやる。お前は一生、我の子を産み続ける運命にあるのだ」

（あぁ……）

王妃として敗北したばかりか、憎い敵王の子を孕まされる――――これほどの屈辱があるだろうか。

だがシェーラは先読みのちからによって、腹の中の胎児がすくすくと育っていることが、手に取るようにわかってしまうのだ。

（もういっそ自刃したい……）

そう思ったことはなんどもあった。

シェーラが自ら命を断てば、エルフニルの血は途絶え、国はなくなるだろう。

だが、散り散りになった民はシェーラの面影を抱いたまま、生きていけるかもしれない。

けれど、自らの子宮に新しい生命が宿ったことを知ったとき、シェーラは自ら命を断つことも諦めざるを得なかったのだ。

（たとえ征服王の子とは言え、わたくしの中で息づいているこの子にはなんの罪もないのだから……わたくしはこれから先も、永遠に正気を保ったまま、この悪逆の王の奴隷として生きていくしかないのだ……）

それは予感ではない。

国も民も失った哀れな元王妃の先読みのちからが指し示す、決定事項そのものであった。

《ＢＡＤ　ＥＮＤ１》

政略結婚に応じ、姫から王妃となるが……
ハードにエロい衝撃作が登場！

わがまま放題に育ててしまったアーネリアがまさか政略結婚を承諾するとは…

ツ/ッ…

勘違いしないで下さいね父上 私が嫁ぐのはこの国を守る為でも父上母上の為でもありませんから

わかっておるアーネリアのことだクラウスを夫になるウィルム二世に利用させない為なのだろう？

はい当然です 戦場で犬死にさせるか傀儡にして国民の憎悪の標的にしようとするでしょうから

姉上… 結婚なんてしないでどこかに逃げて下さい

ぐす

ぐす

僕のことは気にしないで

お断りよ 気にするわ あなたは私の大切な弟なのだから

安心なさい 私は何があっても あんな連中に屈しないから！

終わらない 凌辱奈落の アーネリア

漫画 野晒惺

アッハッハ！
素晴らしい
結婚式だったな
アーネリア姫
いや俺の
十二番目の可愛い妻
アーネリア王妃！

披露宴での余興の
準備は抜かりないな？
怪我でもされたら
今夜の楽しみが
減るからな
ええ…任せて
あの程度の相手なら
傷の負いようが
ないもの
に…にこっ

フン！
今はそうして
笑っているといい
すぐに殺して
あげるから
ムスッ

さぁ皆の者
注目してくれ！
俺の新たな妻の
勇姿を！
バッ

古代種の
竜人相手に魔法は
要らないわね
デールントの
若き王妃よ
我を侮るなよ

姉上……
始めろ！
手加減はせんぞ
口だけは勇ましき
王妃よ！
わっ
!!?
ビクッ
スッ
ギャアアアアッ!!
わ…
我が…一撃で……
スポーン
ね？
安心でしょう
クラウス
ニヤッ
近隣諸国の
武闘大会で
優勝し続けた
という腕前
確かに見せて
もらったぞ
やっぱり
姉上は凄い！
もじもじ
今夜…いや
これからの
アーネリアとの
新婚生活が
楽しみだ

政略結婚といえば
まだ聞こえがいいわ
実態はデールントによる
ランダルの属国化

でも私が
結婚を拒否していたら
国は滅ぼされ
クラウスは
使い捨ての
先兵となって
犬死にさせられる

もちろんこうして
結婚してもいずれ
クラウスは戦場に
出されてしまう

だから今しかないし
結婚したからこそ
絶好の機会が
あるんだってこと

クラウスを
西の大陸に逃がす
手はずは万全よね？

アーネリア様
ご心配いりません
ですが国王陛下は…

クラウスさえ
守れればいい

この事態を招いた
父上と母上のことなど
気にする必要はない

…アーネリア
参りました

おぉ…
闘技場での勇ましさは
幻術だったか…

今夜はたっぷり
楽しませて
もらうぞ

はい
存分に楽しんで
いただきます

スッ

地獄でね！

グッ

死ね！

カッ

え？

ぴたっ

余興は
ここまでだ

か体が…
動か…な…い

くっ…密告と

悪いが王妃が
望むようには
いかないんだ

スッ

拘束の
魔法か…

サッ

シュッ

さすが
聡いな

で私の
処刑は何時？
明日にでも
火炙りかしら？

ぐっ

処刑なんて
しないさ
結婚した
ばかりだぞ？

クラウス…
ごめんなさい

私を
どうする
つもり？

キャッ!!

ひょいっ

決まってるさ
俺の子を
できるだけ多く
産んでもらうのさ

なんの儀式か教えなさい！

呪いの類よね？

準備完了だな

ギュポ

チュポ

ぐいっ

ぐいっ

フルルッ

シュルルッ

ふあぁぁっ！熱い！

あそこが焼けるっ!?

ひくっ

ひくっ

くうぅぅ
んひっ!?
びくっ
びくっ
ブル
最低！
プシャッ
んあぁぁぁっ!!
ブル
なんなのよ
この印は！
ぴくっ
ぴくっ
ぐにっ
ぐぐっ
いい反応だな
王妃
それでは
早速

光の戦士
プリティーシャイン
～失われた世界の中で～
小説/NOVEL 如月トモエ
挿絵/ILLUSTRATION 潤咲まぐろ
少女が守ろうとした世界は
無残にも闇へと堕ちる……

月下。

小高い丘に建てられた小さな研究所の周囲には、無数の影。二本足で研究所に向かって歩く姿はヒトに似ているものの、その全身漆黒の、影のような姿は異形そのもの。

魔物、と呼ばれた存在。

かつては人間として生きていた存在。けれども今では、人間だった頃の人格も、まともな思考力すらも残ってはいない。ただただ、本能のままに生き、人間を襲うだけの存在。

その、幾百幾千の魔物たちの群れの中に、研究所の屋上から、青白い光がゆらりと舞い降りる。

「雑魚ばかりっ」

光の中から発せられる光が、魔物たちを薙ぎ払っていく。

「倒しても倒してもキリがない……けれど、この研究所だけは、やらせないっ！」

青白い光を纏っているのは、一人の美女。

大きなリボンでまとめられた、蒼く光る長い髪。所々にフリルの装飾が施されたコスチューム。豊かな胸元には、これまた大きな青いリボン。跳躍する度にめくれ上がるスカートの下には、黒のスパッツ。

シャイニーブルー、というのが、かつて彼女が使っていた名前である。しかし、今となっては、何の意味も持たない名前……。

『葵さんッ。研究所のバリアー、損傷率が五〇パーセントを超えましたッ』

イヤリング型の通信機から聞こえる声。

「オッケーさつきちゃん。もうじき夜明け……。ちょっとキツいけど、大技で一気に片付けてみせるッ」

青白い光を纏った美女の両腕に装着された機械から、ギュイィィィンと、モーターの駆動音。

「みんな、消えてしまえ」

ボソリと呟くと、腕の機械から強烈な閃光。その光を剣のように振り回し、周辺の魔物たちを一掃していく。

「消えろ、消えろッ、消えろォォォッ」

叫び声と、モーターの駆動音だけが響き渡る。

東の空が、瑠璃色に染まり始めていた。

◇

朝が訪れると、奴らは姿を消す。

光に弱い魔物たちは、太陽から身を隠すように、昼間は完全にこの地上から姿を消すのだ。さながら、小説の『タイムマシン』に出てくる、未来の野蛮人のよう。

私――シャイニーブルーこと蒼樹葵は、変身を解いて、そのままベッドに倒れこむ。

汗くさいな、と思う。シャワーを浴びたいと思うけれども、疲労困憊で、そんな余裕はない。

明日の夜も、また戦わなければいけない。

私がかつて守れなかったこの世界で、私のセカイを守るため、戦い抜かなければいけないのだ。

◇

夢を見た。

あの頃の夢。

教室の片隅。誰とも関わりを持たず、一人で本を読んでいた私。周りの浮ついた話題を聞いただけで心のどこかがケガれる気がして、イヤホンで耳を塞いでいたあの頃。

「ね。蒼樹サン。今日、このあと暇？」

ある日の放課後、声をかけられた。紅羽茜。クラスメイトの、明るい子。誰とでも仲良くできるけれど、誰とも特別仲良くしない。そんな女の子。

私のことをジッと見つめる、ぱっちりとした大きな瞳。とても綺麗な顔立ちをしている彼女だけれど、美少女という形容が似合わないのは、その表情が、とても少年じみているからだろう。

「何？」

「ちょっと付き合ってよ」

そのまま、半ば強引に腕を引かれて連れられた、怪しい研究所。

そこで聞かされたのが、世界の闇化という現象。

ある日始まったその現象。

闇に呑まれた人間は、理性と人格を失い、魔物と呼ばれる異形の姿と化して、人間を襲う。そうして襲われた人間が闇に堕ち、また別の人間を襲う……。

まだ世間一般には知られていないものの、この町を中心に起こり始めているその現象に、いずれ、この世界全てが呑み込まれてしまうだろうということ。

闇に対抗するため、彼女の祖父である紅羽博士が開発したシステムに適合する人間が、茜と、私だけだということ。

両腕に機械を装着し、「変身」と呟いた茜。その身体をまばゆい光が覆い、彼女は〝変身〟した。どう？　と首をかしげてもみせる。

私は唖然とした。

「な……っ」

何だ、というんだ。そのヒラヒラとした恥ずかしいコスチュームは。それに、変身する時、一度裸になるのはおかしい。いや、おかしくはないけれど、ヘンタイ的だ。

「このスーツは、こう見えても身体の能力を最大限に高めるための……」

「これを、私が？」

着て、戦うというのが、ここまでの話の流れだ。うん。と、当然のようにうなずいてみせる少女。

「そんなのって」

簡単に納得がいくわけがない。そもそも、さっきから話に出てくる彼女の祖父が、この場に居ないことだってヘンじゃないのか。そういった疑問を口にすると、紅羽茜は、困ったように眉

を八の字にした。
闇に呑まれ、人としての理性を失った紅羽博士を、その手で葬ったのが彼女自身だということは、それからしばらく経った頃に知ったことだった。
「この娘は、私の妹のさつき。一応、この研究所のメカニック担当だから。よろしく」
そう言って紹介された、紅羽さつきという美少女。
陶磁のように肌理細かく真っ白な肌に、艶やかな黒髪。前髪は眉下で切りそろえられ、そのすぐ下の、猫を思わせる大きな眼が、ぱっちりと私のことを見据えていた。
小柄な身体をゴスロリ風ファッションで包んだその姿は、精巧な少女人形のように繊細な美しさを持っていた。
「よろしくお願いします」
少女の薄い唇から、鈴を転がしたような声。嗚呼。私、何も言えなくなってしまった。
なにはともあれ、私はそのままなし崩し的に、彼女たちと一緒に正義の変身ヒロインとして闇と戦う生活を送ることになってしまった。
はじめはとても嫌だったし、紅羽茜という少女の、他人を自分の楽しみのために巻き込むような性格に反発を覚えることもあった。振り回さないで、って。
それでも、茜と、彼女の妹のさつきちゃんと過ごす日々は楽しかったし、変身ヒロインとして闇を打ち倒すという行為は、単純に痛快なものだった。
光の戦士、プリティーシャイン。
私たちの活動は段々と世間の人たちの目にも留まるようになっていき、ちょっとした人気者にもなった。ちょっとヘンテコな日々だったけれど、今にして思うのは、あの時期が、あの時期こそが、私にとっての青春だったなァということ。
「っ……くぅっ……」
「茜ッ……」
「葵っ……さつきをっ……お願いっ」
平穏な日々は、終わりを告げた。
週に一度程度だった魔物の出現は、毎夜毎夜のものとなっていき、現れる魔物の数も、強さも、日々増していった。
苦戦を強いられるようになっていった私たちは、ある日、破滅の時を迎えることになる。
さつきちゃんを人質に取られ、罠だと知りつつ入ったビルの中。
数多の強力な魔物。みるみる減っていく体力とエネルギー。戦闘中、ふと気を抜いて、敵に隙を見せてしまった私のことを庇って、茜は、致命傷を負った。
「でも、茜……」
「早くッ……ここは、私がなんとかするから、あんたはさつきをッ」
「……。絶対助けに来るから。それまで、絶対待ってて。負けないで」
「了解ッ」
そのまま茜を残してその場を脱出した私は、幸運にもさつきちゃんを助け出すことができた。彼女を安全な場所へ避難させ、茜が、残って戦っているはずのフロアへと戻った。
「おぉっ……あっ……んぐぅっ……」
「あ……か、ね……？」
最初、何が起こっているのか分からなかった。
茜の姿が見えない。魔物たちが、何かに群がっている。青臭い、生臭いような、におい。魔物たちが何かに群がっている。何に群がって、何をしているの……っ！
心臓が早鐘を打つ。
「あっ……んんっ……んぁっ……ぁっ……」
茜が、魔物たちに犯されていた。
仰向けに寝転がった茜の腰に、魔物が、自らの腰を打ちつける。コスチュームの所々が破かれ、露わになった乳房が、白濁液で汚されている。くぐもった声を漏らす唇には、肉棒がねじ込まれて……。
「っ……あおいっ……見ないでっ……あぁっ……んっ♡　んぐぅッ！　ッ♡っ〜〜♡」
「ッ……」
何よりも私にショックを与えたのは、陵辱を受けているはずの茜の声に、明らかに、快感が混じっていたことだった。感情の昂りに、身体の奥が熱くなり、頭の中が真っ白になる。
私はそのまま、茜を救出することなくその場から逃げ出した。もう手遅れだ。さつきちゃんを助け出せたことだけでも良かった。そうやって、自分に言い聞かせた。
「ごめん、さつきちゃん。茜のこと……」
「そんな……。あぁ。ごめんなさい。葵さん。私。私の、せいで……。お姉ちゃん……」
世界が終わるのに、それから一週間もかからなかった。
一度の敗北で、全ては決定づけられた。闇に呑まれた世界はねずみ算式に増殖していき、研究所を盾に戦い続けていた私とさつきちゃんを残して、世界は闇へと沈んだ。
私は、世界を守れなかった。

◇

カーテンの隙間から漏れる陽光。
時計を見ると、十一時を少し過ぎた頃。
ベッドから起き上がり、居間へ。
すると、ちょうどさつきちゃんが朝食を用意し終わったところだった。
「おはようございます、葵さん」
「おはよ。さつきちゃん」
レンジでチンするタイプのご飯に、インスタントのお味噌汁。サバ缶。それに野菜ジュースが、今日の朝食。
さつきちゃんは、本を読みながら箸を進める。お行儀が良いとは言えないけれど、その仕草は、目の前の白磁の美少女によく似合っていた。

著者近況
「闘うヒロイン陵辱」という今回のテーマ。自分の生活を守るため、見えない何かを相手取ってもがく毎日を省みると、目に見える敵を直接武力で打ち倒す事を許された彼女たちの事を、少し羨ましく思います。

静かな時間。
街の喧騒も、車の走る音も、遠くから聞こえる学校のチャイムの音も、全て、この世界から消えてしまった。
「葵さん。私、今日、海が見たいです」
シャワーを浴びて居間に戻ってくると、朝食の後かたづけをしていたさつきちゃんから、そんなことを言われた。
「良いよ。どこの海？」
「日本海」
「遠いけど」
「見たことないんで」
「行こっか。トばせばすぐだし」
研究所のガレージには、茜が遺した赤いスポーツカー。
それに乗って、さつきちゃんとふたり、あちこちを走って回るのが最近の楽しみだ。
黙示録だとか、北欧神話のラグナロクで語られるような、容赦のない破壊を伴う終末とは異なる、ただ、私たちふたりだけを残し、人間だけが消え去った世界。そんな街並みを鉄の塊に乗って駆け抜けるのは、正直言って、中々に痛快な気分。
途中、コンビニに寄ってお菓子や缶詰を失敬したり、ガソリンスタンドでガソリンを失敬したりする。嗚呼すばらしい人類の遺産。
高速道路に乗り、時速二五〇キロで目的地を目指す。けたたましいエンジン音に、ロードノイズ。がたがたと揺れる車体。流れる景色。
「あ。あははっ」
助手席のさつきちゃんが、笑った。
釣られて私も笑ってしまう。ふ。ふふふっ。
運転をミスしたら即死んでしまいかねないスピード。だけど、出さざるをえない。凝縮された時間。かけがえのない一瞬。嗚呼。永遠を手に入れることのできない私たちが、時間を超越しうる数少ない方法。
目的地に到着。
潮風。雲一つない晴天の空に、激しく波打つ、群青の海原。
「わぁ……」
と、美貌の少女は息を漏らす。
「ありがと。葵さん」
振り返って、さつきちゃんは私に笑顔を見せた。紅潮した白い頬を、柔らかな黒髪が撫でる。その姿を見て、私は、なんだか涙が出そうになった。
私たちが現れる前から存在し、私たちが去った後も永続的に続いていくはずの、世界という存在。それが、今や消失してしまった。世界という背景を失った私たちの生活は、白昼夢のように幻想的で、ふわふわしていて、リアリティがない、けれども。
「葵、さん……」
「……」
少女の身体を、後ろからぎゅっと抱きしめる。
「守るから」
この娘と私のセカイだけは、本物。
がらんどうの世界の中で、唯一残された現実感。
「本当に、ありがとうございます」
小さな手が、私の頬を撫でた。

◇

夜が訪れた。
「シャイニィィッ……バスタアアァァ――ッ！」
いつものように、変身した葵が魔物たちを駆逐し、さつきが研究所の防衛システムおよび葵のフォローを担当する。
今宵は満月ということもあり、魔物たちの動きが鈍い。これなら、十分体力を温存して戦えるだろう。
葵は、そう、思っていた。
「葵さん。強力な闇力反応！　気をつけてください」
「了解」
さつきからの通信に応えつつ、あたりの様子を窺う。
「え……どうし……」
通信機から聞こえる、戸惑ったようなさつきの声。
「どうしたの。さつきちゃん」
言いつつ、あたりを見回す。
と、魔物の群れの中。赤黒い光を纏った何かが跳躍した。
何か。
その正体に、蒼い光を纏った少女は一瞬で気づき、そして叫んだ。
「茜っ！」
見間違うはずがない。その正体は、シャイニーレッドこと紅羽茜。葵にとって、友人であり、相棒であり、そして、あの時、守れなかった……。
くるくると跳躍した茜は、葵の目の前に着地した。紅い髪が揺れる。あの日の、あの夜と同じ姿。
「葵。久しぶりだねぇ」
けれども、その表情を見て葵の心は凍りついた。
ジッと、蒼の少女を見据える大きな瞳が細められる。ニヤりと笑った彼女は、こう言った。
「一緒に堕ちよう。葵」
人間だった頃の姿や人格を残したまま闇に堕ちた魔物を、葵はこれまでに何度か見てきた。そういった魔物は決まって手強く、何より、倒すのに精神面での抵抗が大きかった。
「茜……」
「おじいちゃんの作ったこの装置。これ、闇の力も増幅させることができるンだよ」
「どうして」
「試してみる？」
刹那。
茜の拳が、葵のみぞおちにめり込む。
「ぅッ……」
「♪」
「おぶっ……おげぇっ……」
「わ。汚い」
ほぼノーガード状態でみぞおちを殴りつけられた葵は、その場に跪き、胃の内容物を吐き出した。痛みと衝撃と、そして精神的ショックに、涙がぽろぽろと溢れ出てくる。

――相手が誰であろうと、私が、ここで倒れたら……。
葵はよろよろと立ち上がり、かつての相棒をキッと睨みつける。
「フフ♪　良いカオだよ。アオイ。ちょっと抵抗できないようにキミのことを痛めつけるけど……、死なないでね？」
「冗ッ談」
向かい合った少女たちは、互いに、両腕の機械を作動させる。キュイィィィンと、モーターの音。
「光よ」
「闇よッ」
閃光。
決着は、一瞬のうちについた。
ばたりと、蒼の少女の身体が地面に投げ出される。
「あっ……かねっ……」
ボロボロになりつつ、かつての友人を睨みつける葵。あおいさん、あおいさんっ、と、通信機から聞こえるさつきの叫び声が、頭に響く。
立ち上がらないと。
そう思って地面に手をついた葵の腹部を、紅の少女が蹴りあげた。ぐぷぅ。息を漏らした少女の腹部に、茜は馬乗りになる。
「はぁっ……葵。フフっ。私、昂ってる。興奮してるよ。凄く、凄くっ……」
「あっ……ぐぅっ……」
「葵。ブルー。分かるよ、その気持ち。悔しいよね。怖いよね。だけど、大丈夫。こっち側に堕ちれば、そんな気持ちもなくなっちゃうから。だから。ね？」
「その押しつけがましさ、変わってないわね」
「嬉しい？」
「……。貴女のそういうところ、大嫌い」
「嘘ばっかり」
ニヤリと笑う茜。
「だけど、ごめんね。私、変わっちゃった」
「な……に……？」
葵は、自らの腹部に、妙な感触を覚えた。おなかの上を、何かが、もぞもぞと蠢いているような……。
次の瞬間、茜のコスチュームのスカートの下から、十本ほど触手が顔をのぞかせた。
「こういう触手を生やした魔物、苦労したよね。一緒に倒すの」
「そん……な……」
赤黒い触手。
粘液にまみれたそれらのうち、何本かは、勃起した男性器のような形状をしている。
茜のスカートの下から伸びたそれらは、まるで一本一本が意思を持っているかのよう蠢き、葵の身体の上を這い始めた。生温かい感触が、彼女に嫌悪感を湧きあがらせる。
こんなグロテスクなものが、懐かしい少女の身体の一部だということが、葵には信じられなかった。
男性器のような形状をした太い触手の先端。鈴口のような部分から垂れ出るトロリとした液体が、葵の頬にポトリと落ちる。
「ひっ……」
と、声を漏らした少女の顔から、どんどん血の気が引いていく。
こんな、こんないやらしいものが茜の身体の一部だ、なんて、そんな、嘘、いや、だ……。
言いたいことは沢山あるものの、思考がまとまらず、うまく言葉にならない。ただ、ぱくぱくと唇を動かすだけ。
「……♪」
「っ……ッ⁉」
そんな葵の唇が、茜の唇によって塞がれた。
「んっ……ちゅっ……んちゅぅっ……♪」
「んんっ……ッ……んッ、んんッ……！」
口腔内に強引に舌をねじ込まれ、ぢゅうぢゅうと唾液を流し込まれる。歯茎を、口腔内を情熱的に舐められ、舌を絡まされる。
「んちゅっ♪　ちゅっ♪　ぢゅるぅぅっっ♡」
「っ……。ッ……っ～～っ⁉」
茜の唾液は蜜のように甘く、葵は、口腔内をぢゅぶぢゅぶと満たすその唾液を、無意識的に、ごくりと呑み込んでしまう。
「っ……ッ⁉　あっ……ハっ……」
なっ、これ。熱、い。
蜜のような唾液を呑み込むと、喉のあたりが、かぁーっと熱くなるのを感じた。その熱は腹部で燃え上がり、少女の身体を、内側から灼いていった。
「ふふ。美味しいでしょ」
「あっ……はっ……」
頬に、じっとりと汗がにじむ。
混乱する思考。どうして、茜が私のことを襲うのか。どうして、茜の身体から、触手が伸びているのか。どうして私に接吻をするのか。どうして、どうして、どうして……？　そんな葵の頭が、次第にぼんやりとしてくる。身体が、頭が重い。
クスリと笑いつつ、赤の少女は、スカートの下から伸ばした触手で、眼下に見据える少女の両腕を縛り上げる。
「っ……」と、声を漏らす葵の、豊かな乳房が強調される。
「ホント、おっきなおっぱいだよねェ。ふふ」
性器を思わせる形をした赤黒い触手によって、乳房をつつかれる。
「あかねっ……やめ、てっ……」
「はぁ……。コーフンしてきた。ねぇ。この触手。スゴイんだよ。男の人のおちんちんって、こんな風に気持ち良いんだなぁって。こんなもの持っちゃったら、女の人と、いっぱいえっちしたくなっちゃうよなぁって」
「そんな、いやらしいもの……」
「葵の身体のほうがいやらしいよ」
ふぅふぅと息をする茜の両手によってコスチュームの胸のあたりを掴まれ、力を加えられる。並の力ではびくとも

しないはずの衣装であったが、その耐久力も、茜が赤黒い光と共に腕の装置をキュイィィンと作動させ、さらに強い力を加えると限界を迎えた。

ミチミチとした音が鳴った直後、ピシャリィと、コスチュームの胸部が一気に破れ落ちた。青いリボンが弾け、たわわに実った果実を思わせるじっとりと汗ばんだ豊かな乳房が、たゆんとこぼれ落ちる。

月下に露わになった、白い胸元。その、ぷっくりと膨らんだ先端を指先で撫でられる。

「ッ……!?」

ほんの少し触れられただけだというのに、電気のようなものが背筋を駆け、葵の腰が、ガクンと揺れる。

「ほぉら。こんなにいやらしい……」

「っ……ッ」

大きな胸は、蒼樹葵という少女にとって、肉体的なコンプレックスであった。異性からの欲望にまみれた目線と、同性からの妬みの目線は、彼女の性格を、より内向的なものへと変えていった。

そんな彼女にとって、社交的で、常に堂々と自分を貫いて生きていた紅羽茜という存在は憧れでもあった。

「はぁ……♡　こんな揉めば揉むほど、えっちなおっぱいだよ、あおいっ……♡」

そんな、かつての親友に、乳房を揉みしだかれる。手のひら全体で、乳房全体をこねくり回されるように、じっくりと、執拗に……。

「ぐっ……うぅぅっっ……ッ」

悲しくもあり、悔しくもあった。

けれども葵は、自らの身体を蝕む、ある感覚を耐えることに必死であった。じりじりと、身体の中を灼かれるような感覚――。

「そんなに、胸っ……」

じたばたと長身をよじり、くねらせてみせる。だが、彼女の身体を蝕むその感覚から、逃れることができない。

魔物の体液に媚薬効果がある、ということを、葵は思い出していた。無理矢理舌を絡められ、流し込まれた唾液を呑み込んでからというもの、身体の奥が、熱くなってたまらないのだ。

脳裏に蘇るのは、数ヶ月前の記憶。

数え切れないほどの魔物に犯されながら、快感の入り交じったような声を漏らしていた、目の前の少女の姿。

「乳首、こぉんなにいやらしく勃起しちゃってる。フフ。ねぇ。硬くなってるの。分かるでしょ？」

「先っぽっ……駄っ……ッ……。ひぅぅッ……ッ！」

両乳首をコリコリと摘まれると、思わず大きな声が出てしまう。先ほど、少しだけ先端を撫でられた時とは比べ物にならない刺激。

「アハッ♪　今の声、良いよっ！　もっと聴かせてッ」

愉快そうに笑った茜は、眼下に見据える少女の豊かな双球を手のひらで弄びつつ、執拗に乳首を弄り続ける。

電流のようなものが背筋を駆け抜け、全身が、ビクンとはねる。ガクガクと震える腰の奥で、何か、熱いものが溶け落ちていく。

「やっ……いじらなっ……っ……んんっ……っ！」

鼻にかかったような自らの声の色っぽさに、自分自身で驚いてしまう。

「はぁっ……もう、たまらない。こんなの、我慢できないよ、葵。あおいっ、あおいあおいあおいぃっ」

「何をっ、いっ……嫌っ……」

茜のスカートの下から伸びた、男性の生殖器を思わせる形の触手が、葵の汗ばんだ乳房の間に挟みこまれる。

「こんなっ……気持ち、悪いっ……」

目の前で見せつけられて、あらためて、その触手のグロテスクさ、いやらしさに気づかされる。赤黒くぬめった触手には、血管のようなものが浮き出ており、それが、とくんとくんと脈打っているのが生々しい。亀頭を思わせる先端の割れ目からは、白濁した汁が、とろとろと漏れ出ている。

「あおいのおっぱいっ……柔らかくて気持ち良いっ……はっ……。動かすね？　動かすからっ……♡」

そんな、硬くて、生々しくてグロテスクなものが、自らの胸の間で挟まれ、ぐにゅぐにゅと往復運動をする。

ぐにゅぐりゅぐにゅぐりゅぐにゅるぐちゅっ♡

「ああっ……♡　パイコキっ♡　パイコキしてるっ♡　おっぱいで、硬くなった触手チンポシゴきしぢゃってるッ♡」

「ぅッ……ううぅッ……ッ……」

目を硬く閉ざし、頭を振って抵抗の意志を見せる少女。振り乱れた蒼い髪が、汗にまみれた頬に、乳房にべたりと張りつく。

その様子は、自らに向けられる獣欲の炎に、油を注ぐ結果をもたらすだけであった。

歯を剥いたような笑みを浮かべた茜は、自らの中からとめどなく溢れてくる熱い感覚に酔うように、からからと笑った。

「はっ……ははっ♪　レイプって、力任せに女の子をなすがままにするのって、こんなにっ……はふぅっ♡」

茜の口から、甘い声が漏れる。

乱暴に乳房を犯す触手の動きが、速度を増す。ぐちゅぐちゅとした粘液の音。甘ったるいような、生臭いようなにおい。

「ああぁっ♡　来るっ……上がってくるっ……っ～～ッ♡」

「なっ……んんっ!?」

「ンっ……はぁっ♡　でるッ♡　でるっ♡　でっ♡　ははあぁっっ♡」

びゅるぅぅっ♡

びゅるぅっ……びゅるくるぅぅっ♡

びくんびくんと痙攣した触手の先から、白濁した液体が、勢い良く吐き出された。

「嫌ッ……ッ……あぶぅっ……」

熱い液体は、少女の蒼い髪を白く汚

麗しき王妃でも肉欲を求めてしまう？

我慢はよくないですぞ リリアナ王妃様

あ…ぁ そんなに擦りつけない…で

お汁が…は…あぁ熱ぅい

すごい…牡の匂い…

ああ…もうよして…

皆に知られたら私…ぃ

嫌…だめ 来ないで

そう言いながらも体は疼いて仕方ないのでしょう？

さあっ 遠慮などなさらず

大…臣！身分を弁えるの…です

ぢゅっ
ちゅぱ
ぢゅっ
ぢゅぽっ
ぢゅぽっ
ちゅぷ
んっ
陛下が相手してくれないのですからこれは仕方ないのですよ
く…ッ
ずぷ
心の思うがままに
欲しい…これ…が
ぴくん
ぴくん
そんな事思ってはいけないの…に…
れろ
れろ
気兼ねなく堪能してくださいませ
あはっ♡

国王陛下がお倒れに!?
お歳だしなぁ…
王はあれでまだ40だぞ
マジで!? 老けてんな
ただの過労でしょう 命に別状はありません
衰弱の原因がわかりませぬ
ただ…
病でなければ呪い…か?
――にしても
最近 兵隊が多いなぁ
散れ!
妙な相談をしていると召し捕るぞ!!
なんか物騒だよな…
国王陛下はご無事です
心配には及びません
なっ なんだ!?

国王不在で好機と見るや
侮るな！この私は
魔族どもが蠢動しよる
魔王を倒した者ぞ!!
陛下はすでに完治されておいでですが
この機に十分休んで頂く事にいたしました
皆様も陛下を支えてあげてくださいませ
おお！さすがはリリアナ王妃様!!
く…
『獣欲の花嫁たち』好評発売中!!
王妃リリアナの陥落
～魔王の遺せし災い～
漫画 COMIC／ぱふぇ

大丈夫ですか？ リリアナ様
カリオストロ伯爵は潔白でございました
その裏にいると目されたマルケス大臣も
セ…フィ心配なく…
それ…より件の報告を
は…
世間の噂とは違いとてもご立派な方と感じます
お二方とも先の大戦で活躍されて
はぁ…♡
ぱぁ～
…ナ様？
王妃様！
英雄との誉れも高いですし杞憂のようであります
すみません少し…疲れました…
後を…頼みます
は…
ドクン
ドクン
ドクン
ドクン
ドクン
ドクン
ガタ

ッ――♡
だめぇッ こんなこと して…るっ 場合では
あ…あぁ ないのに 指がぁ♡
おのれ！ 封印の巫女
我が呪いを 受けよ！
このままでは 終わらぬぞ
貴様は いずれ！ 人の手で破滅 するのだ!!
イ…クっ♡
イくう…っ
く…うう ランノ♡

堕奮
～王妃エルミオーネの落魄～
小説／NOVEL 斐芝嘉和（いしばよしかず）
挿絵／ILLUSTRATION 庵（あん）ズ
国に裏切られた美しき王妃が
淫猥な魔の手に堕ちていく……

「こ……これは、いったいなんの真似ですッ!?」
板状の首手枷に吊られた身体を揺すり、王妃エルミオーネは叫ぶ。睡眠薬でも混ぜられていたのか、食事をしている最中に急に意識を失い、気がつけばこの地下室に――。
美しい眉を逆立ててキッと周囲を見回せば、夫である王もいるし、脂ぎった大臣も美麗な甲冑を纏った近衛の兵も居並んでいた。エルミオーネ自身も王妃らしい豪奢なドレスを纏ったまま、なのに囚人のように首と手首を板枷に拘束されている。
「説明してください、貴方！」
「お前はやりすぎたのだよ、エルミオーネ」
わざとらしいほど芝居がかった哀しげな表情で、王が一歩前に出た。
「徴兵制の施行や学校の設置までなら、よかった。おかげで国力が増したからな。だが、荘園の廃止はいかん。貴族が喰っていけなくなるではないか」
「な……なんと愚かな……！」
あまりの蒙昧さに眩暈を覚え、エルミオーネは思わず叫んでしまった。貴族の力を削いで中央集権を進めることが改革の主眼なのに――。
女ながらに内政に嘴を挟み、数々の改革を断行してきたエルミオーネは、国力を倍増させた功績によって多くの民草から国母と讃えられ崇められ慕われているが、それだけに敵も多い。特に、守旧派貴族たちからは蛇蝎のごとく嫌われている。
それでもよいと、エルミオーネは思っていた。
軍事力の増強、技術や生産性の向上、知識人の流入――改革の成果は明らかだ。どれほど蒙昧な輩でも、この輝かしい実績を無視できまい。
それに、自分には王がついている。
封建制の弊害で権力が分散し、威光が減じていたとはいえ、それでも王は王なのだ。
王という強力な後ろ盾と、明確な成果。このふたつがあれば改革を完遂できる――睡眠薬で意識を失うまで、そう思っていたのに。
「貴族の力を削ぐことが国のためになるのだと、この間ご説明いたしましたでしょう？　あの時は貴方も、分かってくださったではありませんか！」
「いや、もういい。もうお前には騙されぬぞ！」
それまで落ち着いていた王が、いきなり激昂した。自分に向けられた瞳の、狂気を孕んだ輝きに、エルミオーネは息を呑む。
「なにが国母だ、なにが啓蒙王妃だ！　この国の王は私だぞ、私が王なのだ！」
「あ……貴方……」
「エルミオーネ、お前が成し遂げた改革は確かに素晴らしい。しかしもう充分だ、もうたくさんだ！　これ以上の改革は無用！　この国は私の物だ！」
絶叫した王は、肩で息をしながらしばらくエルミオーネを睨んでいたが、やおら背を向けると靴音高く、足早に立ち去っていった。
まさか、王に嫉妬されていたとは――。
思いもよらないことだった。王を蔑ろにしていたつもりは毛頭ないし、王を疎んじてもいない。それどころか、好きなように改革できるのは王の権威があればこそと、常々感謝の念を示していたのに。
予想外の出来事にしばらく呆然としていたエルミオーネは、ふと、視界の端の影に気づく。
暗い地下室の隅、澱む闇に半ば以上溶け込んだ、黒いフードを被った魔法使い。
「……そなたかッ！　そなたが王に、なにか妖しげな術を……！」
「キキキ……さすがはエルミオーネ様。ご炯眼、感服いたしました」
粘着く闇を引きずるようにして一歩前に出た魔法使いが、慇懃な仕草で腰を折る。エルミオーネの改革に惹かれて周辺諸国から流れ込んできた知識人のひとりだが、兵に術を施して魔物と同等の力を得るなどという言語道断の邪法を披露したため、国外追放にした――はずだったのに。
「捨てる神あれば拾う神ありでございますよ。王妃様のお気に召さなかった我が術も、必要とされている方は大勢いらっしゃいまして……」
おそらく、守旧派の貴族に雇われたのだろう。そしてエルミオーネの目を盗み、王に接近して、心の奥底に燻っていた嫉妬心を燃え上がらせた。
からくりが分かっても、後の祭りだ。
「王様の命により、不肖私めが、この国の改革を引き継がせていただきます。まずは王妃様の……いえ、元王妃様のお身体の改革から……」
「無礼者ッ！　私に指一本でも……あっ!?」
叫ぶエルミオーネの背後から、いきなり無遠慮な手が巻きついてきた。それも、一本や二本ではない。壁際に居並んでいた近衛兵や大臣たちが、いやらしく笑み崩れながら群がってきたのだ。
その数ざっと十人以上。
「おお、おお……これが王妃様の乳房か！」
「尻、尻……王妃様の、お尻……ッ！」
首と手首を水平に拘束されて身動きできない王妃の、健康的に熟しきった伸びやかな肢体に、鼻息を荒らげた男たちが前後左右から無遠慮に貼りつく。指先に欲望を乗せた何十本もの手が、張りのある胸元や肉感的な尻に傍若無人に這い回る。
王妃という地位に加えて美貌も人望も兼ねそなえたエルミオーネは、王国に住まう者ならだれもが敬い慕う聖母のような存在だった。高嶺の花と思うことすら不敬の極み、まして性欲の対象として見ることなど言語道断の存在だった。
それが、いま――王妃という地位から滑り落ち、国賊として獄に繋がれている。そのうえ、王の新たな右腕となった魔法使いが、王の代理として陵辱を

著者近況　梅雨は明けましたでしょうか？　これを書いているときは梅雨の最中、しかも久々に梅雨らしい梅雨で、部屋の中がカビ臭い。でも、梅雨が明けると本格的に暑くなるわけで、それも勘弁して欲しい……ぬぅん。

促している。
結果、いままで男たちの奥底に抑圧されていた欲望が、一気に解放された。
「なんと美しい脚じゃ……おお、おおっ！　肌がすべすべしておる！」
「い、いい匂い……こ、これが王妃様の、アソコの香り……なんと芳しい……！」
憧れだった美女の肢体にしがみついた男たちはたわわに実った乳房や形よく丸い桃尻をニヤつきながら揉み回し、眩しいほど白い太股に頬摺りしたり、スカートの上から股間に鼻を押し当てて犬のようにスンスンと匂いを嗅いだり。
耐えがたい恥辱――ではあるが、エルミオーネの心は折れない。こんな程度の嫌がらせにいちいち屈していたら、老獪な守旧派貴族たちを相手に数々の改革を成し遂げることなどできなかっただろう。
身体中を這い回るいやらしい手やうなじに吹きかかる生温かな吐息を無視して、真っ直ぐに魔法使いを睨むエルミオーネ。
「私を辱めるのがそなたの言う改革ですか？　ならば好きなだけ辱めるがよい！　どんなことをされようと、私は決して屈しません！」
「ええ、ええ、そうでしょうとも。エルミオーネ様はそうでなければなりません」
キシキシと耳障りな声で笑いつつ、魔法使いが手振りでなにかを指示した。
途端、エルミオーネの豪奢なドレスが大きく引き裂かれる。いくつもの手に揉みまくられてほんのり熱を帯びていた豊満な乳房がぷるるんっ！　と小気味良く弾みながらこぼれ出し、地下室の薄闇にワインレッドの乳首を輝かせた。下着も力任せに毟り盗られ、いやらしい手つきで撫で回されていた美尻も大きく露わになってしまう。
「こ……こんなことでは屈しないと……あっ!?」
恥辱に負けまいとして声を荒らげかけた矢先、尻穴にグリッと硬いモノが押し当てられた。
太くいかつい男の指だ。
軟膏を乗せているのか、穢らわしい肉穴にぬるっぬるっと、生温かなぬめりが塗り広げられる。
「ふぅむ……こちらの穴は処女のようでございますな、エルミオーネ様。ずいぶんと硬い」
「あ、当たり前ですっ！　そんな、穢い、場所……くッ!?　ふ……う、ンぅっ!?　な、なにを……いったいなにを、す、擦り込んで……」
意識することすら恥ずかしい排泄孔を弄られ、恥辱に頬を赤らめていたエルミオーネは、硬い指先に揉みまくられている肛門がじんわり温かくなってきたことに気づき、上擦った声を漏らした。
話に聞いたことがある、いやらしい薬だろうか？
どんなに慎ましい淑女でも、それを用いられると発情した牝猫のように見境がなくなるという――。
「おや、どうされました？　お顔が真っ赤でございますよ？　まさかとは思いますが、ひょっとして、お尻の穴で感じてしまわれたとか？」
「ぶ、無礼なッ！　そなたが擦り込んだ、妖しい薬のせいで……ンくぁっ!?」
エルミオーネの言葉を遮るようにグリグリグリッと、指より遥かに太いものが、淫熱を帯びた尻穴に挿し込まれた。菊膜に擦り込まれた軟膏が潤滑剤の役目を果たし、硬く冷たく滑らかな棒状の物体が一気に直腸を埋め尽くす。そして――。
ヴン……ヴヴヴぅぅンッ！
羞じらい強張る括約筋を押し拡げ、処女直腸の奥の奥まで深々と潜り込んだそれが、小刻みに、だが力強く、まるで生きているかのようにうねりながら振動し始める。
「ま……魔動、淫具ッ!?　なんとおぞましいッ！」
「無粋ですなあ、王妃様は。夜の営みに彩りを添える、便利な道具でございますよ」
「なにが彩りですか！　淫魔の細胞を核にした、邪法の、ふぅ、はぁ……道具……ふク、ンぅ……ンぅぅうぅ……」
魔法使いの言葉に必死に抗うエルミオーネだが、その声は揺らぎ、上擦り、次第に甘い響きを帯び始めた。直腸を埋め尽くして妖しく震えながら力強く蠕動する棒状の物体が、薄い粘膜隔壁越しに膣穴を揉みしだき、細かな膣襞を擦り合わせて、秘裂の奥底に淡い淫悦を生じさせているのだ。
エルミオーネがどれほど歯を喰い縛って耐えようとしても、胎内に刻み込まれる肉悦からは逃れられない。薄明かりを浴びて弾み揺れる形よい乳房に牝香を含んだ甘酸っぱい汗がうっすらと滲み、獣欲を露わにした男たちの目の前でワインレッドの乳首がみるみるうちに勃起していく。
「おお……見ろ！　我らが王妃様が、お尻の穴で感じていらっしゃるぞ！」
「肌の色艶が、いっそう増して参りましたなあ」
「く、うぅ……ッ！　貴方たち、それでも王国の兵ですかッ!?　臣ですかッ!?　いかがわしい邪法使いに、ま、まんまと乗せられて……ッ！」
火照る身体を揺すって群がる男たちを睨み回すが、まったく効果がなかった。むしろ、いままでとりつく島のなかった美女が肉の悦びに羞じらい悶え、わずかに隙を見せ始めたことで、下劣な欲望がいっそう煽られた様子。
「ではそろそろ、御開帳と参りますか」
「あ……な、なにを……やめなさいっ！」
止める間もあらばこそ、片方の膝裏が太い腕に掬い上げられ、首手枷に吊られた身体が斜めに傾いだ。スカートを毟り盗られて露わな股間が大きく開き、男たちの目に晒されてしまう。
「ほほう……これはなかなか」

著者近刊　『淫妖蟲　凶　～凌蝕病棟退魔録～　姦禁蟲嬲り』『アリシア　淫獄の姫騎士』『トリプルとらぶるプリンセス』『凌辱レオタード　～淫獄に堕ちた女子高生～』『若妻の秘蜜　堕ちゆく美沙子の爛れた日々』　好評発売中！

「くっ⁉　あ……ッ⁉」
　エルミオーネの恥丘を彩る淡い叢が、ニヤついた大臣の太い指先に逆撫でされた。別の手は尻側から前へと回り、柔肉の土手を求めて太股の付け根をまさぐり始める。
「熟れた身体に反して、なんとも儚げな……まるで乙女のような和毛でございますなあ」
「だ、だからなんだというのですっ⁉　や、め……あっ⁉　く……ああダメ、ひ、開かないでッ！」
　頬を赤らめたエルミオーネが藻掻けば藻掻くほど、男たちの手は劣情を増した。
　恥ずかしい割れ目が硬い指先に探り当てられ、羞じらう肉畝が掻き開かれて、紅く熟れた粘膜花弁がプルンッ！　と震えながら咲きこぼれる。
　途端、周囲に漂う牝香が一気に濃くなった。直腸を埋め尽くした魔動淫具が王妃の膣洞を裏側から揉みしごき、押し歪めて、肉壺の口から芳醇に香る愛液を搾り出しているのだ。
「おおお……ッ！　これが王妃様の、甘露……」
「うぅっ⁉　あ……ぶ、無礼な……ふぁっ⁉　あぅ、く……ンぁっ⁉　うぅうっ⁉」
　ひとりが指で掬ったのを見て、他の男たちも一斉に手を伸ばし、熟した割れ目に指を挿し込んで滅茶苦茶に掻き回し始めた。何十本もの硬い指先に繊細な粘膜花弁が揉みくちゃにされる。尻穴を犯す魔動淫具の淫らな魔力のせいか、エルミオーネの予想を遥かに超えた肉悦が、あられもなく開いた淫唇に次から次へと産みつけられる。
「ふむ……意外にサラサラしておりますな。まるで生娘のようじゃ」
「胸も尻も、よう育っておりますのになあ」
「だ……黙りなさいッ！　んクッ⁉　あ、ダメ！　そ、そこは……ひぁうっ⁉」
　キュッキュッ、キュッキュッ――と、エルミオーネのクリトリスが硬い指先にしごかれた。秘裂に入り損ねた指が、割れ目の端で秘かに痼っていた肉豆にたまたま触れて、集中的に弄り始めたのだ。
（だ、ダメ……感じては、ダメッ！）
　このような下劣な輩にいいようにまさぐられているだけでも耐えがたい恥辱なのに、こんな連中の指先で気持ちよくされてしまうだなんて――王妃としてのプライドが、深く深く抉られる。
　だが、どれほど歯を喰い縛ろうとも、
「ふ……ンくっ⁉　ふ……ふひぃンっ⁉」
　磨くようにしごかれた淫核に快感の稲光が次々と弾け、首手枷で吊られた身体の芯を矢のように駆け抜けていく。秘裂に群がった無数の指も飽きることなく、それどころかいっそういやらしさを増して、滲む愛液をくちゅくちゅと掻き回し続ける。
「いや、惜しい……実に惜しい……お歳の割に若々しい、なんともそそる女体なのに……」
「このまま肉奴隷に……いや、肉便器にしてはなりませんかな、魔法使い殿？」
　羞じらい喘ぐ王妃の姿に鼻の下を伸ばした大臣たちが、陵辱の輪に加わっていない魔法使いに顔を向け、哀願するように訊ねた。
「なりません、なりませんとも。王国の兵を精強にする乳牝計画の、第一号でございますぞ。王妃様をしっかりと改造し、その効力を証明せねば、我が改革は始まりませぬ」
「ち……乳牝ッ⁉　く……ふぅ、なんです、か……そ、それ、は……ッ⁉」
　股間に閃く淫悦に喘ぎつつ、エルミオーネが上擦る声を絞り出した。邪法の徒が口にした言葉、よからぬ企みに決まっているが、しかし――。
「乳牝とは要するに、乳牛化した人間の牝。王妃様の乳房を大きくしてお乳を搾るのですよ。もちろん育乳には魔法薬を用いますから、その乳液を飲んだ者は魔力を得て、精強な兵となるのです」
「ま、またそのような、邪なことを……！　許しません！　そんなこと、絶対に……んっ⁉　くッ⁉」
　男たちの指に掻き回されている秘裂に、突然熱い拍動が起きた。淫核に閃く快感を凌駕するほど鮮烈な、高波のような肉の悦び。
「キシシ……薬が効いてきたようですなあ」
「く……くす、り……ッ⁉」
「そうです。ここにいる者たちはすべて、私の有能な助手。王妃様のお身体をただ弄っているだけではなく、軟膏状の薬を擦り込んでいたのですよ」
「な……なんて、ことを……ッ！」
　呻いた声に、自分でも恥ずかしくなるほどの甘やかな響きが混じった。己の身体に意識を向ければ、全身が熱い。胸と言わず尻と言わず、すべての柔肌が感度を増して、揉み込まれた腕や脚にも蕩けるような快感が満ち始めている。
「ふ、く……ンぅうっ⁉　あ、や……ンぅうっ⁉」
　意識はまだ必死に抵抗しているのに、脂肉はもはや陥落寸前だ。いやらしく蠢く男たちの指先が、肌に肉に気持ちイイ。強張る股間を擦りつけられた太股には淫らな欲望が充満し、無数の指で掻き回されている秘裂にはもどかしい疼きが溢れ返る。
　ゆさゆさと揺れ跳ねる乳房が火照りを増し、美しい丸みの頂点では深紅の乳首が弾けんばかりに勃起。柔らかな乳谷には牝香を含んだ汗が噴き出し、淫らな匂いがいっそう濃くなる。
「ぬぅぅ……王妃様の締まり具合を我が逸物で確かめられないのは残念だが、ふむ……これはこれでなかなか、乙なものだな」
「まだ軟膏しか塗っていないのに、この乱れよう。魔法使い殿から渡された薬をすべて使ったら、いったいどうなることやら……楽しみですなあ」
「な……なんと下劣なッ！　それが人の上に立つ者

敗戦国の王妃に待ち受ける
淫辱なる運命とは!?

亡国后妃の異端審問
インクイジション

漫画 COMIC ゆたかめ

アドゥニス王国はこの時をずっと待っていたのかもしれません

此度の戦よくやってくれた青騎士して頼みがあるのだが

明日エルメス姫に同行してダンジョンを探索してほしいのだ

何なりとお申しつけ下さい

あら♥

そなたならあのじゃじゃ馬も任せられよう

皇国最強である青騎士の不在を狙ってアドゥニスが攻め入り――

ブオオオオオ

皇帝は殺され我が国は一夜にして滅ぼされました

そして皇妃であるわたくしは…

遠路はるばる
よう参られた
ウィスキアの…

いや 亡国の皇后
メアリー・オブ・ウィスキアよ

くっ

青騎士さえいれば
我が騎士の国が負ける
事など！

戦しか出来ぬ
蛮族が
何が騎士の国だ
笑わせる

料理しか能の無い国と
思っていたけれど…

卑怯な事は得意
でしたのね

貴様ぁ

我が国を侮辱
するかぁぁ

まぁ待て

皇后であるにかかわらずこの粗暴さ…

我等が神の教えが行き届いていないと見える

蛮族には神の教えで導かねばなるまい!!

イヤアアア

これより異端審問を執り行うっ!!

ウオオオオオ

聞きましたかな 何でもウィスキアの皇后を

この宮殿劇場で 異端審問に かけるとか

あの王の事だ 我々を楽しませて くれるに違いない…

おお 幕が開き ましたぞっ!?

ザワ

ザワ

諸君 突然の呼び出し にもかかわらず よく参られた

異端の皇后を 改宗させる儀式を これより執り行うっ

ひっ

ギリ

ギリ

ボロン

ほれ 早く咥えぬか
そうか それならば こちらで…
さあ 悔い改めるが 良い!!
いやあああぁ

これのどこが裁きなのですかっ!!

ほう あまり使い込まれていないではないか そなたの夫は不能であったか?

皇帝(夫)に捧げた身体をこのようなゲスに汚されるなんて…

我が夫を愚弄するとはっ

これが王のする事ですか!?

そうとも我が国民もよろこんで見ているぞ!!

わたくしはウィスキア皇国皇后――メアリー・オブ・ウィスキア

やめろっ見るな見るなぁ!!

くっ締りが更に強くなったな

このような辱めに屈しなどはしません!!

そうか…
よく言った

ならばもっと
泣き叫んで観客を
喜ばせてみせよっ

ぎゅ

ぐぐぐ

何をっ

ほほう…
こんなに乳首を
立たせおって…

ひっ！

ぐるっ

違…

ぐにゅ

ビリィッ

おおお
おおおっ!!

姫騎士会長アイラ
背徳の接待快楽
第三話 堕ちていく姫騎士　裏切りの輪姦アクメ
悪には屈しない。
だけどこの身体はもう、快楽を拒めない――。
小説／新居佑
挿絵／コザ

登場人物紹介

蘇芳アイラ

聖アザリア学園の生徒会長。国内でも数人しかいないS級魔法騎士資格保持者で、みんなから慕われている。

春日巧

魔法の授業が苦手でお世辞にも強いとはいえないアイラの彼氏。純粋で優しく愛らしいルックス。

小寺仁三

国内でも有名な政治家。魔法騎士を育成する学園を買って、自分の利権のために利用している。

前号までのあらすじ

闇オークションで徹底的に穢されたアイラ。処女の次は二本刺しでアナルを奪われてしまった。しかしアザリア学園の借金はまだ返せていない。彼氏にこの状況が知られてしまう前に、なんとかお金を稼いで事態を打開したいアイラだったが。

アイラが、学園の経営危機を救うため、小寺仁三に命じられるままに、その身体を使ってお金を稼ぎ始めてから、すでに三ヵ月が過ぎようとしていた、ある夜……。

昼間の刺すような暑さと違い、ひんやりとした過ごしやすい空気を持った港湾。そこに隣接する倉庫街の一角で、アイラは蘇芳家に代々伝わる宝剣でもあるレイピアを握り、目の前の十数人に及ぶ武装集団を相手に、流麗な魔法剣技を魅せつけていた。

「くっ、魔法騎士だとっ!? どうしてこの場所が……っ」

「相手は女一人だ。とにかく撃てっ! 飛んで火にいるなんとやらだ。特製の媚薬魔弾を目いっぱいお見舞いしてやりなっ!」

黒いスーツ姿の、いかにも闇組織の構成員といった風格の男たちが、手に持った自動小銃や拳銃を、倉庫の入り口側に立つアイラに向けて、一斉に発砲してくる。

それら無数の弾丸は、かつて仁三の息子・小寺洋介が聖アザリア学園で用いた、撃たれた者を昏倒させるものと同系統の魔弾だ。

普通の人間なら――いや、一般的な魔法騎士でさえ、両手では足りない人数の集中砲火を浴びては、たちまちのうちに返り討ちにあい、彼らの慰み者になってしまうだろう。だが、

「悪いわね。悠長に説得している時間はないの。沈みなさい、はぁああっっっ!!」

アイラはフェンシングに似た半身の姿勢をとると、構えたレイピアを、音速に迫る弾丸に向けて、文字通り目にも留まらぬ速度で疾らせる。

魔法で強化された圧倒的な身体能力は、放たれた数多の弾丸の先陣に、アイラの得意技にして、彼女を最強騎士の一角足らしめる『誘惑』の刻印を、容易かつ正確に彫り込む。

ギンギンッッッ! ガギギギィィィンッッ!!

近代科学の領域・そして常識を拡大させた魔法という概念。

それを修めたエキスパートである、アイラが施した刻印により、通常の物理法則ではありえない軌道で弾丸がUターンし、男たちが放った残りの弾丸に正面衝突する。

互いに運動能力を失った凶弾は、カラカラっと乾いた音だけを残し、倉庫の冷たい床に落ちて転がる。

「なっっ!? 弾丸に乗せられた魔法の意志を操ったっ? その金髪、その制服……お前はまさか……っ」

「『幻惑のワルキューレ』蘇芳アイラ……。ば、ばかな……。S級騎士がなんだって、ここに……?」

闇組織の間では音に聞こえたアイラの正体と実力を目の当たりにし、男たちの顔に絶望と焦りの色が浮かぶ。

「くっそっ、構うかっ! せっかく『商品』が完成したんだ。こんな小娘に押収されてたまるかよっ!」

ズガガガガガッッッ! と逆上した男たちが、再び銃を乱射してくる。しかしそれも無駄なあがきでしかない。

「愚かね。あなたたちでは私に敵わないわ。そう、正々堂々魔法さえ使えれば……私はっっ!」

なにか胸の奥に秘めた鬱憤を吐き出すかのように、アイラは先ほどより数倍速さを増した、降り注ぐ流星雨のような剣戟をもって、男たちを次々に打ち倒し、行動不能に陥らせていく。そしてわずか一分の後――。

「これで、依頼は完了ね……」

十数人に及ぶ男たちを美しい魔法剣技で制圧したアイラは、はぁと、やけに大きく肩で息をした。

結果として悪の組織のひとつを潰すことにつながったとはいえ、『この貴重な情報』をもたらしたのは、彼ら以上の深い闇をもつ小寺仁三なのだ。

今回の検挙は、魔法騎士協会からの任務ではなく、アイラが無理やり服従を誓わされている仁三からの『紹介』だった。

仁三にとって不利益となる商品を取引しようとしていたこの組織を潰せば、借金返済に十分役に立つ額の金を渡すと、アイラに告げ、断れるはずもないアイラは、この仕事を引き受けるしかなかった。

魔法騎士が本来もつべき高潔な魂を、下種な男に弄ばれている事実と、それでも仁三の言うことに従わなければならない自分の立場に、たまらない悔しさが胸を締めつける。

「くっ、お金を工面し終えたら、必ずあの男を捕えてみせるわ……っ」

そう呟くアイラの吐息には、拭い去れない甘い色と香りがまとわりついている。

およそ三ヵ月間、ほぼ毎日に及ぶ卑猥な性的接待、それに伴う変態的な性癖の開発と、強力な媚薬と魔術刻印を使った肉体改造によって、麗しき魔法騎士の身体は、悪党を捕えるときであっても、極度の発情状態に晒されている。

（うぅ……。はぁ、オ、オマンコが熱いっ。身体を激しく動かすと、こんなに欲情して……っ）

気を抜けば、今にもこの場で噴火寸前の股間を弄り、騎士とは思えないオナニー行為に浸ってしまいかねない。

戦っている最中でさえ、早く終わらせなければ、敵の目の前で、恥ずかしすぎる欲情姿を晒していたかもしれないのだ。

初めは言わされるたびに、嫌悪と羞恥を煽られていた卑猥な隠語も、今ではそれが標準の言葉になってしまっている。

魔法騎士育成校の私物化をもくろむ仁三は、伝統ある聖アザリア学園をわが物にせんがために、アイラが断れないのを承知で、その類まれな美貌と魅惑的な身体を使い、学園が抱える多額の借金を返済するよう迫った。

仁三としては、その過程でアイラを性の虜に堕とし、学園と同時に、圧倒的な戦闘力をもつ彼女を、自らの手駒に加えようとしているのだろう。

「ぜ、絶対に負けないわ……っ。私はお金を稼いで、学園を守る。快楽なんかに、決して屈しないっ！」

しかしアイラは、自分の意思に反して、ただ立っているだけで、グツグツと煮えたぎってしまう牝の情動を、気高く強い精神力で振り払う。

（待っていて、巧。私があなたの夢を、必ず叶えてみせるわ）

アイラが学園の存続と同等……それ以上に大切に思っている恋人――春日巧（かすがたくみ）の笑顔を、胸に浮かべる。

アイラが仁三のいいなりになっていることを、知るはずのない巧は夏休みを利用して、彼の夢である『アイラと同じS級騎士』になるために、高い志を掲げる騎士の卵たちが集う、二週間の夏期合宿に参加している。

巧が出発した一週間前。旅立ち際に巧は、アイラの頬に、軽くキスをしてくれた。

二人の仲はまだ秘密であるため、大っぴらにハグやキスはできない。

そんな巧が人目を忍んでしてくれた口づけと、小さく耳元で呟いた「立派な騎士なって、必ずアイラを幸せにするよ」という言葉。そして頬を赤く染め、はにかみながら見せてくれた笑顔が、アイラの心を決して肉欲の水底に沈めることはない。

仁三の狡猾な罠にはまり、王族の血を引く高貴な身体を売ることになっても、アイラの気持ちが決して折れないのは、その胸の中になによりも大切な少年への、純真な想いが詰まっているからだ。

「そういえばあの男、結局何の取引をやめさせたかったのかしら？」

男たちが床に倒れている中、倉庫の中央に一際大事そうなスーツケースがいくつも置かれている。

規模は小さくとも、仁三と同列の悪党たちの商品だ。どうせろくでもないモノに違いない。早く魔法騎士協会に通報し、この場を立ち去らなくては……。

「テロにでも使われる爆弾だったら、危ないものね」

最高位の騎士であるS級のアイラには、きちんと現場の状況を把握することが、深く身についていた。

慣れた手つきでケースのロックを外し、開いてみる。そこには、

「こ、これは……っ!? ま、さか……っ」

ケースに収められていたのは、見るからにグロテスクな……いわゆる性玩具と言われるものだった。

粘つく緑色の……臭いからして強力な媚薬ローションに漬け込まれているソレは、まるで大型のヒトデの形をした触手か、スライムのようにおぞましいものである。

腹の部分には、大きな口が開いており、粘ついた全身の液体から、強烈な媚薬の香りが鼻をつく。大の字に広げられた手足のような触手には、対象に張りついて離さないための、吸盤がびっしりと生えそろっている。

文字通り、女を堕とすために、魔法によって生成された、生ける淫具だ。見ているだけで、気分がおかしくなる。

（い、いけないわ。早く閉めなくちゃ。こんなものを世の中に出回らせるわけにはいかないっ！）

この組織は、仁三が関与する組織の商売敵といったところなのだろう。とにかく急いで、これらを処分してもらうよう連絡を……っ。

「な、なんて臭いなの……っ。どんな媚薬を使っているのかしら……？　あの男が依頼してくるほどに危険なもの……なんて……あ、くふぅっ」

今この倉庫には、仁三も……そして当然巧もいない。組織の男たちも全員、魔法で昏倒させている。

ゴク……っ。と無意識にアイラの喉が大きく唾を呑み込んだ。それは極上のエサを前にした、腹を空かせた獣のようにも見える。

思わずレイピアを離し、チェックのスカートを、右手で上から押さえつけてしまう。左手で鼻と口を押え、媚薬の香りをガードしている風にみせて、手の内にこもった濃度の高い媚薬臭を、す～は～と小刻みに気道の奥、そして脳幹にまで吸い込んでしまう。

（い、いけないわ。……いけないけど、今は誰も見てないのよ？　戦闘をすれば、たまらなく身体が発情して……っ。こんな状態じゃ、あの男の元に戻れるかどうか……っ）

仁三に弱みを握られる前のアイラなら、下賤なものとして、スーツケースごと、『獄炎』の魔法で焼き尽くしてしまっていただろう。

しかし今、赤々とした炎を灯しているのは、姫騎士の子宮なのだ。それを治めてくれる『魔性の玩具』が目の前にある。

（オ、オマンコの疼きが強くなってるわ……っ!? も、もうダメ。ちょっとだけ……ええ、被害者の立

著者近況 ロリに目覚めたのは「ファフナー」だったんですがまさか今頃、百合すげーっと思うとは。「私、特別になりたいの」。

場に寄り添うのも騎士の務めのはずよ。い、いったいどんな感覚に……っ）

豪奢な制服に収まりきらないほどのグラマラスボディが、淫具を前にブルブルと小刻みに震える。

太ももがモジモジと擦れあい、ピンっと凛々しく張った背筋が、いつの間にか盛りのついた猫のように丸くなってしまっている。

ブレザーとワイシャツに隠れた乳首が、ビキビキと硬さを増していく。

仁三の命令でノーブラを強要されているため、かわいらしい肉芽の先端が、直接ワイシャツと擦れて、ジンジンッと甘い痺れが、少女の爆乳の芯まで響く。

「はぁはぁ……っ。んっ、あぁっ！」

砂漠で水をちらつかされた旅人のように、アイラは生徒会長の理性を振り切った本能で、ケースの中の生体淫具に手を伸ばそうとした。その瞬間、

ビリリィィイッッッ!!

背中から脳天、そして足先にいたるまで、官能とは違う、明らかな痛みを伴う電流が駆け抜けた。

「なっ……あ、あなたは……っ!? うぅ……」

薄れゆく意識の中、振り向いた視線の片隅には、先ほど昏倒させたはずの、組織の男が、スタンガンをアイラの背中に押し当てていた。

「あ、く……ぅぅ」

「ふふ、ココがバレたのは想定外だったが、まさか噂に名高い『幻惑のワルキューレ』を捕えることができるとはなぁ」

不意を突かれたスタンガンの一撃によって、昏倒させられたアイラが目を覚ますと、目の前には先ほど行動不能にさせた闇組織「バッドエンド」の構成員たちがニヤついた表情を浮かべ、こちらを見下ろしていた。

アイラの美しい肢体は、SMプレイに使うような、ラバー材質の拘束具によって、恥ずかしいM字開脚を強いられたまま、鉄の格子柱に固定されてしまっていた。

脚だけでなく、両腕も頭の上で拘束されており、自慢のレイピアは、アイラの手から離れ、姫騎士の敗北を強調するように、床へ突き立てられている。

（あくっ、動かないっ!? 対魔法騎士用の拘束具……っ。こんなものまで……。はぁ、はぁぁっ）

M字開脚を強要されているアイラの姿を見つめる、十数人の男たちの顔には、一様に下賤な牡の表情が浮かんでいる。

ボリューム満点のお尻を無様に床につけたまま、肉厚でムチムチの太ももが惜しげもなく晒されている。

さらに、姫騎士のデリケートな股間に、きつく切れ込んだ純白のショーツと、ワイシャツを剥ぎ取られ、左側だけ露わになっている、熟れた超高級メロンのように、豊満かつ甘い牝の香りを放つ巨乳。

それらは、闇に生きる男たちの欲望に、容易に激しい火を点けるほど、魅力的なものだ。

しかも先ほど本能的に淫具に見とれてしまったアイラの身体は、魔法騎士として恥ずべき状況にもかかわらず、淫猥に牝の反応を示してしまっていた。

「おいおい、なんだよっ!? この女、戦いの最中に股間をビショビショに濡らしてやがるぜ？ 本当にあの蘇芳アイラか!?」

「さっきチラリと見えたが、こいつ、臍と尻に特上の発情魔術刻印を押されてやがった。大方、あちこちでイケメン騎士たちにやらせまくってるんだろ？」

「なにせ、俺たちのブツに見とれてたらしいからな。実は相当淫乱なんじゃねえか、このお姫様はよぉ？」

「くっ、黙りなさいっ！ み、見ないで……っっ！」

男たちの言うとおり、アイラの身体に深く刻まれた発情魔術、そして子宮内の淫蟲は健在だ。なにより、淫具に見とれていただけでなく、もう少しで手に取ってしまうところだった。

姫騎士会長として恥ずべき事実を、こんな小悪党にまでバカにされるなんて……っ。

男たちの邪な視線を防ごうと、両足を閉じようとしても、ギチギチにきつく締めつけられた、黒光りする拘束具により、逆に男たちのサディスティックな心を楽しませてしまう。

（こんな屈辱を受けているのに……。あぅっ、オマンコが疼いて治まらないっ。全身が……熱いぃっ）

周囲を囲う黒服の男たちから放たれる、十数人分の牡の汗や息の臭い、漂う性的フェロモンに、アイラの意思とは関係なく、卑劣な肉体改造を受けた身体が、芯から焼け焦げるように、熱く反応してしまう。

M字開脚を強要されている両脚の、プルプルした媚肉の上には、ジワリと大粒の汗が浮かび、淫らな重力に従って、アイラの妖艶な股間部へとツーと垂れ落ちていく。

スカートを捲り上げられた女のデルタ地帯は、すでにムワッとした牝の濃い臭いが、容赦なく放散されている。

夜なお蒸し暑い、真夏の熱気と混じり合ったその香りは、誇り高いアイラの心をたまらなく苦しめ、同時にその身体を狂おしいまでに昂らせていく。

「んくっ、あぅぅっ……はぁ、あぅぅ」

自分の落ち度とはいえ、快楽を与えられる寸前までいった女体の欲求は、如実に少女の性感帯を、牡を誘う淫らな姿へと変えていた。

丸見えになっている、かわいらしいショーツには、じっとりと粘っこい蜜が、その内側から表面まで滲んでいる。

雨に降られたワイシャツのように、股間にぴっと

著者近刊 『キュアリープリンセス 正義の心を悪堕ち洗脳』『気高き妖狐は悦獄に堕つ』『エンゼルヴィーナス 失墜の天使』『守護姫 淫神復活の宴』『ダブル姫騎士 隷辱の王室』『サムライスレイブ 姫武者淫辱』 好評発売中！

りとへばりついた下着には、アイラの淫らにヒクつく女唇の桃色。その頂点で、とっくに自ら包皮を脱ぎ捨て、物欲しげにギンッ！　と硬くなっている、親指ほどの肥大化クリトリスが、はっきりと透けてしまっていた。

「へへ、アソコもエロそうな騎士様だが、上のほうもたまらんぜ。やっぱり金髪は育ちが違うな」

男たちの視線が集まっているのは、アイラの下半身だけではない。

片方だけとはいえ、ワイシャツもブラジャーも脱がされた豊満なバストは、両脚と同じように淫らに湧いた牝の汗で湿っていた。

しかもまだ触られてもいないのに、赤くかわいらしい左右の乳首が、ガチガチに勃起しきっており、周りの乳輪も薄桃色の淫らな色に膨らんでいる。

（くぅっ、早くここから脱出しないと……っ。こんな奴らにいいようにされるわけには……っ！）

男たちは油断しているようだが、アイラとて伊達でS級騎士、そして『幻惑のワルキューレ』の二つ名で呼ばれているわけではない。

スタンガンによって疲弊している今は無理でも、時間が経ち、体力が回復すれば、この程度の戒めで、アイラを捕えておくことはできない。

あとはそれまでの時間、男たちの情欲の矛先を耐えしのげるかどうか……。

いや、あの男にすっかり調教されてしまった、この淫らな身体を抑えきれるかどうかが重要だった。

「はぁ、はぁ……んく、ふ、ぅぅっ」

日本人離れした見目麗しい面立ちは、頬を赤く染め上げて、半開きになった唇の端から、礼儀正しさを重んじる騎士とは思えぬ、物欲しげな涎が、細い顎を伝う。

「これだけ発情して、あの強さとは。くく、王族の血を引く気の強い姫騎士様ねぇ……。『商品』の試し打ちにはもってこいというわけか」

アイラの前に、組織のリーダー格であろう男が現れる。中肉中背で眼鏡にスーツの姿は、一見するとしがないサラリーマンにしか見えない。

現状、仁三に代表される、魔法犯罪を取り締まる騎士を私物化する輩が闊歩していることで、治安の悪化が進み、一般人が闇組織の構成員になることが、珍しくなくなっている。

増え続ける組織ひとつひとつは小さいが、新興勢力であるがゆえに度を知らず、歪んだ専門知識を使って、犯罪の凶悪化、悪質化の元凶となっている。

そんな輩の一人である、男の手の中には、ウゾウゾと蠢く、例の生体淫具が握られていた。

「く……っ！」

アイラは、美貌をキッと引き締め、男をきつく睨みつける。

「察しがいい女だ。こいつは最近仕上げられた『玩具（オモチャ）』でな。目的は捕えた女潜入捜査官や女騎士の調教だ。こいつを売り込んで、組織をさらに大きくする。危うくお前に押収されかけたが……くく、最終試験に魔法騎士の期待の星『幻惑のワルキューレ』様はもってこいだろう？」

言った男が顎で合図すると、部下たちがアイラの姿勢を、尻もちをついたものから、いわゆる立ちバックの態勢へと変化させる。

腕の拘束具はそのままだが、両脚のものは外され、抵抗するアイラの足を無理やり左右に開かせ、さらに尻をグンッ！　と突き出す卑猥ポーズを強要される。

しかも同時にショーツを脱がされ、ジュクジュクに蕩けきった、淫靡な蜜まみれのピンクの花園や、屈辱の魔術刻印が押された臍、そしてプリンとした大きなヒップが、男たちの前に晒されてしまう。

胸の部分もシャツのボタンが完全に剥ぎ取られ、ボリュームたっぷりの二つの白い果実が、どうぞ収穫してくださいと言わんばかりに、丸出しになってしまっている。

（こ、こんな……恰好っ。く、ぅぅっ）

正義の魔法騎士の養成を主な目的とする聖アザリア学園らしい、欧州の騎士を模した、派手な装飾を持つ制服。その上着だけは脱がされていないため、自分が騎士であること、学園の生徒会長であることを、強く意識させられてしまう。

アイラの明確なアイデンティティである、二つの職名を背負ったまま穢されようとしていることに、たまらない屈辱と敗北感が襲う。

「くく、準備はいいようだな。俺たちをぶちのめしてくれた恨み、女のイキ地獄で、たっぷりかえさせてもらうとするか」

言った男が、手のひらの上の生体淫具に、極度の発情、感度の引き上げ機能を有する非合法魔薬を直接注射する。

魔媚薬を打たれた淫獣は、ビクンッ！　と気色悪く跳ね上がると、色をさらにグロテスクな黒っぽい紫へと変化させる。

「こ、これは……っ⁉　んはぅっ、ふ、ぁぁあっっ」

淫獣がその粘ついた全身から放つ、濃い媚薬の発情臭が、ブワッと倉庫内に立ち込める。それを受けたアイラの秘唇が、触られてもいないのに、ブクンッと限界まで充血しきり、発情をしきりにアピールする牝アワビへと膨れ上がる。

左右に膨張したプニプニのマン肉の真ん中に開いた、淫ら極まる女の洞窟からは、アイラの意思に反して、ドプドプと半透明の愛蜜が溢れ出てくる。

「あ、ふぅっ、あぅっ……く、ひぃぃっ」

気高い生徒会長の本気汁が、恥ずかしそうにキュウっと擦り合わされた太ももの裏を垂れ、白いタイツが引き締まった脚線美にベッタリと張りついてし

まう。

下半身を中心に、背筋がブルっと震えあがり、なにかを期待するかのように、お尻がフルフルと左右に振れる。

「ふふ、いい反応だ。それでは始めるとするか」

闇組織のリーダーは、そう不敵に笑うと、手のひらに乗せた生体バイブを、まるでピザかケーキでそうするかのように、アイラの浅ましく突き出た桃尻、そのぷっくりと膨れきった陰唇へ、ビタァァンと思いきり張りつけた。

「はっっ、ぐぅぅうんっっ！」

瞬間アイラの透き通った碧眼が大きく見開き、バックの姿勢で拘束された女体が、ビククッッ！　と淫らにわなないた。

デリケートな部分に、平手を受けたかのような強い衝撃が引き終わる前に、アイラの陰唇にべっとりとしたオモチャの触手部分の感触が触れる。

ズチ……ヌチュ、ズチュチュゥッッ！

「んふぅっ、あ……はぅっ、はぁはぁっ」

（こ、これ……思った以上に……っ、ひ、んぐぅぅぅぅぅっ！）

無事、学園を守り抜くためにも、女を堕とすためだけに作られた玩具に屈するわけにはいかない。

しかし、魔術刻印がもたらす強制発情によって、すでにたっぷり仕込まれていたアイラの快楽神経に、媚薬体液でヌメついた触手とイボがもたらす、濃密な官能パルスが迸る。

膣内への挿入こそしてこないが、生の人間の手による愛撫とも、シリコンなどで作られた普通のバイブとも異なる、無数のイボのざらつきによって、むき出しの性感帯を嘗め回されるような感覚に、突き出した下半身がブルっと大きく震えてしまう。

強靭な精神力による必死の我慢を嘲り笑うかのように、膨れ上がった肉唇が、ズリュズリュと擦りあげられ、甘く切ない感覚が、白い柔肌を劣情の朱色へと染め上げていく。

「おほほっ、普段偉そうな騎士様が、あんなグロい玩具で思いきり感じてやがるぜ？」

「あの刻印も自分で刻んだものだったりな？　綺麗な顔して、実は好きものだってことだ。学園の生徒たちも幻滅だなぁ!!　げへへッ」

「くっ、これ以上私を侮辱すると、必ず後悔す……んはぅっ！　あっ、くふっ、ぉぉぉっ」

こちらの事情を知る由もない連中が、嘲っているだけだとわかっているが、自分――ひいては学園の生徒たちまで、そんな小物だと思われることは許せない。

だが抗議の意を唱え終わる前に、股間にへばりついた生体玩具が、まるで陰唇に直接キスをするかのように、変態的なバキューム責めを行ってきたのだ。

（オ、オマンコがジュブジュブ吸われてるっ!?　い、いやぁっ。こんなのが気持ち……ああっ、感じてしまうなんてっっ！）

グチュグチュッッ！　ジュブルゥウウッ!!

これまで老練な男たちによって、気持ちよすぎるクンニ責めを受けたことは何度もあった。けれど今行われているのは、文字通りの吸引だ。

桃色に充血しきった左右の花弁を、無数の吸盤によってジュズルウウゥゥ！　ときつく、時には優しく、硬軟織り交ぜてバキュームされている。

肉ビラである小陰唇、その下にふっくらとエロティックな果実を実らせている大陰唇。股間に張りついた生きた淫具は、あえて性感帯の本丸である膣や勃起クリトリスを責めたりはせず、執拗なまでに外堀を刺激し続けてくる。

「あっ、んんん……っ。ふぃ、くふぅっ！　あぅっ、ぉぉんんっ！」

陰唇を吸い上げられた途端、両手を頭上で固定されたアイラの美貌が、切なげに眉をひそめてしまう。

小刻みに震えながらも、きつく閉じようとする唇の端から、明らかな官能の声が漏れ出てくる。

犬のように、床と水平に伸びた背筋のラインが、ビクビクとわななき、その振動が太ももから両足の先にまで、甘い痺れとなって伝わってくる。

「どうだ、ワルキューレ？　摘発するはずの淫具を、自分で味わう感覚は？　ほら、だんだんへっぴり腰になっているぞ？　乗り込んできたときの威勢はどうしたんだ、はははっ」

「だ、誰が感じ……んんっ、おぅっ……！　私は……はひぅっ、負けな……いっっ！」

言葉だけは気丈にふるまって見せるが、アイラの肉体は淫具がもたらす執拗なまでの陰唇への刺激によって、両脚をガクガクと震わせるほどに昂らされていた。

（ダメッ。か、感じるわっっ！　くぅ、あの男に調教さえされてなければ……っ。ぉぉんっ、ひぐぅっ……んひぃぃぃぃぃっ!!）

アイラは、目の前で笑う男たち以上に、自分を散々媚薬漬けにし、変態的な調教を施してきた憎き小寺仁三への怒りを募らせた。

あの男さえいなければ、自分がこんな悪魔的な快楽を味わうこともなかったはずなのだ。気高い騎士であり、凛とした生徒会長で居続けることができたのに……っ。

ただでさえ膣の周りは、身体の中で最も感じやすい部分だが、アイラの感度は常人のゆうに百倍を超える敏感さに改造されている。

感度に比例した圧倒的な快楽信号の渦が、陰核を触手でこねくり回されるたびに、全身へ駆け巡り、子宮内に潜む淫蟲の媚薬製造を活発化させる。

ブシュブシュゥウッ！　と子宮内で濃密な媚薬が

噴出され、もうここまでと思っていた劣情の限界点を、簡単に塗り替えていく。
（た、耐えなくちゃ……っ。ここで堕ちるわけには、お金、せっかく稼いできたのに……のぉっ、おほおおおっっ!!）
迸る桃色の雷撃とともに、お尻がビクビクと震えてしまう。膝が情けなく折れ曲がり、エロティックな内股になった太ももに、新たに噴出した愛蜜の熱さが染み込んでいく。
感じやすい身体に、感じれば感じるほど、さらに感じやすくなる無限牝豚機関。それを初めに仕込んだ男の狡猾さと、歪んだ精神に抵抗したい……。
いまだ未熟な自分を生徒会長に推し、今もなお立派な魔法騎士になるべく励んでくれている生徒たちに報いたい。
（た、巧……っ。私は負けないっ。絶対にお金を持って帰って、巧の夢を叶えてみせるわっ！）
恋人である少年の顔を思い浮かべる。それがアイラの力の源泉であり、理性の最後の砦だ。世界で一番大好きな人の、夢破れた悲しい顔は見たくない。絶対にさせない。だから快楽に屈するわけには絶対にいかない！
「ふっ、さすがにすぐは堕ちないな。ならばこっちにも追加してやろう」
男は新たに二つの同型淫具を取り出すと、いまだに責められていない性感帯――重力に引っ張られなお、ツンと上を向いた、張りの良さを維持している、たわわに実った二つの乳果実の頂点に、グロテスクな魔生物を張りつける。
ベチャッ、ブチュゥッ、ジュズルルゥウウッッ!!
「んんぉおっ!? む、胸にまで……っ。ひぐぅっ、あはっ……んひぎぃいいっ！」
瞬間、声が一際色気を帯びたものへと変わり、その快楽衝撃の重さに大きく瞳が開かれ、眉が切なげなハの字を描く。
下半身と違い、一切責められることなく放置されていたガチガチの勃起乳首が、ようやく訪れた快楽刺激によって、すぐさまアイラの理性を灼熱の淫獄へと突き堕とす。
ビタァッ！ と豊乳にへばりついた魔淫具は、まるで飢餓状態の赤ん坊のように乳房に食らいつき、吸いたて始める。
コリコリの乳首はおろか、内部の乳線まで、猛烈な勢いで刺激され、上半身と下半身で同時に生まれ、互いに増幅された快感の奔流が、激しく全身を駆け巡り、何十倍もの悦楽となって、アイラの気高い理想をグズグズに溶かしにかかってくる。
「あんんっっ、くひっ、こんなっ……ふぎぃっ！ あふ、あひっ！ はっはっっ、んふぅうっっ!!」
どうにか漏れ出る野太い牝の嬌声を堪えようとするが、欲情しきった身体に人外の刺激は計り知れない女の心地よさを、神経の奥、細胞の中にまで鋭く深く突き刺してくる。
普段クールで物静かな唇は、はぁはぁっという甘く切ない声を吐き出し、下卑た男たちを興奮させる。
（だ、ダメっっ！ このままじゃイクッ！ 玩具なんかにイカされるっっ!!）
これまで仁三に躾られてきた身体が、騎士の誇りに有無を言わせず、牝の絶頂へとアイラの本能を突き上げてくる。
今こうして捕まっているのも、玩具の誘惑に傾いてしまったせいだ。
任務を達成すれば、学園を救うお金を手に入れることができる。それなのに自分は、目の前の快楽に心が揺れてしまい、今も身体は絶頂へと至る激しい快感を欲している――。
焦れに焦れた女壺は、触れれば爆発する臨界寸前の溶鉱炉のようだ。ここに硬く勃起した逸物を突き込まれれば、いったいどれほどの快楽が待っているのだろうか？
（はぁっ……チ、チンポ……。!? だ、だめぇっ！）
思わず、自分が快楽によって屈してしまうかもしれない恐怖や悔しさよりも、その先にある一匹の牝としてすさまじい快楽に悦ぶ淫らな自分を想像してしまう。
「た、巧……っ。私……あぅぅぅっ、ほぉぉんっ、あふぅぅっ！」
知らぬ間に変わっていく……変態の牝へと堕ちていく自分の心を保つように、恋する少年の名前を口にする。
そうでもしなければ、本当に性欲に屈してしまいそうなほど、身体はトロトロに蕩けきってしまっていた。
「あ？ 巧だぁ!? へへ、彼氏の名前かよ？」
「ほう、彼氏持ちとはな。しかし肉体のほうは、この玩具のほうが好みのようだぞ？ もう十分焦れたようだし、そろそろトドメをさしてやるか」
アイラの心の要を見抜いた男は、サディスティックに唇を歪める。魔法の素養が薄くとも行使できる、簡易的な操作魔法を発動させ、アイラを焦らし責めにする触手たちに、被虐の信号を送信する。
命令に従い、ヌメヌメとしたヒトデ状の玩具が、その真の姿を露わにし、ジュクジュクに熟れきった姫騎士会長に、裏切りの恍惚を思い知らせる。
ズボォォオッッッ！ ズヌチュゥウウッッッ!!
「んおぉおっっ!? な、なに……お、おほぉおおおっっっ!!」
不意に下半身――その最も過敏で快感に飢えている淫壺に、突然、人の腕ほどの太さの肉塊が、猛烈な勢いで侵入したかと思うと、膣の中が爆発的な快感に晒され、野太い官能の叫び声を、夜の倉庫とそこにいる男たちに響かせてしまう。

（おぉぉっ、い、いったいなにが……っ⁉　んひぃいっっっ、突かれてるわっ！　わ、私のオマンコ、のほぉおっ……お、おっきいチンポに犯されてるぅうっっ‼）

焦らされ熱しきった膣窠に、何の前触れもなく突き込まれたのは、文字通りの肉根の感触だった。

しかもただの逸物ではない。表面にイボイボが連なり、カウパー線代わりの媚薬が巨大なペニスから溢れ出し、ビクつく膣壁に塗り込まれていく。

その破滅的ともいえる気持ちよさに、完全なる不意打ちを受けた気高き理性が、一瞬で盛りのついた本能に取って代わられる。

「ははは っ、『おほぉっっ！』だとよ？　正義の騎士様が叫ぶ言葉かね？　完全な牝豚じゃねえか！」

「あ、くぅっ。おぉぉおっ、こ……れぇっ⁉」

男たちにバカにされながらも、自分を犯すモノの姿を確認しようと、バックスタイルで拘束された顔を後ろに向ける。その光景に思わず言葉を失ってしまう。

股間部でウゾウゾと動く玩具の中心が、引っ張られたゴムのように外側へと伸びると、その内側に触手が束になったかのような、硬い肉突起が構成される。

その形はまさに、勃起しきった肉根そのもので、それがグチュン、ズチュンンッッ！　と発情した牡猿より激しいピストン運動を行っていた。

「くはは っ、どうだ俺たちが開発した商品の触手チンポの味は？　感じる女の蜜を原料に媚薬を作り出しながら、発狂するまで犯し続ける……どうやらS級騎士様にも、効果は抜群のようだなぁ」

ズボズボッッッ！　ズチュッッドジュンッッ‼

男の高笑いを肯定するかのように、ヒトデ型の淫玩具の責めは、さらにその勢いを増してきた。

突き込みの質自体は、人間のそれと大きく変わるものではない。しかし人ではありえない、無数のイボ突起にゴジュルルッッ！　と容赦なく膣ヒダを刺激されると、頭の中が非道な陵辱快感以外、なにも考えられなくなるほど真っ白になり、抱き続けてきた生徒会長の尊厳や、騎士の矜持が下品な変態快楽に呑み込まれていってしまう。

「おおぉっ、くふぅっ……オ、オマンコ擦れてるっ。こんな触手チンポが……あぁっ、んひぃいいっっ！」

しかも快感が爆発しているのは、下半身だけではない。擬似肉棒が膣を犯すのに続いて、ブルンッと実った二つの巨乳でも、アイラの脳髄を焼き切らせるほどの快感奔流が吹き荒れていた。

「こ、今度はこっちも……ひぃいぐぅぅぅっ！　くほぉ、ぉおおっっ！」

ブレーキを外した触手淫具は、中央部分がイカの口のようにぱくりと開き、その口をもって、尖りきった二つの乳首へ、ギュポギュポッッ！　と淫らな音を立てながら、激しい吸引責めを仕掛けてくる。

（は、激しいっっ！　乳首が両方取れそうなのに……すごい快感が、あひぅっ！　おっぱい灼けるぅっ！）

まるで電流がバチバチと流れるクリップを乳首につけられたまま、前後左右に引っ張られているかのように思える。しかし、今発しているのは痛みではなく、間違えようもなく強烈な性的快楽だった。

「んはぁっ、んんっ……きっひぃいっっ！」

快感だけを発する雷に、全身が打たれたかのように、首筋がビクンッッ！　と跳ね上がり、可憐な相貌が頬を真っ赤に染め、悦楽の痺れに瞳を大きく見開かせる。

アイラの美貌を形成する、ふっくらとした官能的な唇は、牝の心地よさに敗北したかのように半開きになり、無様に舌を垂れさせている。

「イイ様だなぁ？　ほれ、なんとか言ってみろよ？俺たちを捕まえるんじゃなかったのかぁ？」

「はぁ、はぁ〜っ。ま、待ってなさい……っ。すぐにあなたたちを捕えて……くひぃんっっ！　おっっ、おおおっ……やめ、オマンコ、おっぱい、くふぅうんっっっ！」

騎士の本懐を告げる言葉も、人間と違い、一切の驕りも容赦もない生体ディルドーがもたらす淫撃によって、哀れな牝犬の遠吠えへと成り果ててしまう。

まるでアイラ自身が男たちの玩具になってしまったかのようだった。触手がジュルジュル、ドジュドジュゥゥゥッッ！　と痛烈な吸引と突き込みを加えるたびに、拘束された女体がビクンビクンッッ！　と面白いくらいの快楽痙攣に襲われ跳ね上がる。

銃器をもった男たちを圧倒した魔法剣技も、股間と両胸に張りつく魔生物たちには通用しない。

両腕を高々と縛られたまま、アイラはただただ一方的に嬲られ、内に秘める女の淫らな性を掘り起こされていく。

ズゴズチュッッ！　ジュブリュゥゥッッ！

「あぁっっ、はぁぅぅっ……おぉんっ、くひぃいいっっ！」

まるで自分の牝という本能に、揺るぎない牡棒の杭を深々と打ち込まれているかのようだった。

どれだけ歯を食いしばっても、この魔性の玩具たちに、性感帯を一突き、一噛みされると、たちまち甘く太い劣情の声を、無意識のうちに吐き出してしまう。

（わ、私はなにをやっているの⁉　こんな玩具なんかに感じさせられていいわけ……ぇっ）

たまらない快感の渦に理性が呑み込まれそうになるのを、なんとか食い止めようと、お尻をブンブンと大きく振り、張りついた異形の生体ディルドーを引き離そうとする。

「ははっ、そんなもので取れるわけがないだろう？

踊るならもっと色っぽくケツを振ったらどうだ？
ええ、この牝豚変態騎士がよぉっ！」
「んぁぁぅっ、くふぅっ……おぉおっっ、深いぃっ、だんだん激しく、おっほぉおおっっ!!」
男の言ったとおり、ガニ股姿勢になるまで、お尻を上下左右に振りたくっても、一度股間に張りついた淫具は、決して女陰から離れようとはしなかった。
胸もまた淫具を離そうと、恥を承知で上半身を前後に揺らし、立派な双乳をブルンブルンッッ！ と激しく揺さぶってみせる。
けれどヒトデ型の玩具は、逆に五本の脚をぐぱぁっと大きく広げ、アイラの美巨乳に、そのぬめった身体を、ジュパァアアンッッ！ ときつく食いつかせてきた。
「あっ、ふぁぁぁあっっ！ だ……めぇえっっ！ おぉおっっ、おっぱい潰れるっっ！ 乳首すごいのきてるぅううっっ!!」
重力にも負けずツンと張りを維持した、見事なロケットおっぱいが、複数の触手脚によって、ギチギチと激しく締めつけられていく。
押しつぶされた媚肉が、むぎゅぅぅっ！ と触手たちの間から、淫らにはみ出ててくる。
まるでつきたての餅を、無慈悲にこねくり回すような責めは、乳房の内側にびっしりと詰まった快感神経を刺激する。
たぷんたぷんっ！ と前後左右、量感たっぷり、エロティックに揺れるおっぱいは、噴火寸前の淫マグマのような、激しい被虐快楽が渦巻いている。
もういつ、どこの性感帯でイってもおかしくはない。騎士の矜持と抵抗を上回る、グロテスクな玩具たちの性戯に、アイラの色っぽく成長した女体が、ビクビクッッ！ と切なげな痙攣を起こしっぱなしになる。
（ダ、ダメェ……っ。このままじゃ本当にイクッッ！ あ、あぁ……よ、ようやくイケる……ぅっ）
これまでギリギリのところで、牝の欲望の氾濫を食い止めてきた、アイラの鉄の意志が、異形の魔淫具によって、メリメリと剥がされ、少女の想いが熱い肉欲に浸食されていく。
思えば、これまでの三ヵ月間、たとえ相手がどれだけ憎むべき男であろうとも、犯されれば、抵抗することを許されず、ただ相手の命じるままに乱れることが常だった。
快楽だけを求める牝奴隷に堕ちないように、気を張ってはいたが、エクスタシーそのものを我慢した経験はない。
焦らしから挿入、そして中出し絶頂は、まるで洗脳のようにアイラの奥底に植えつけられた牝のルーティンとなっている。
ズボズボォォッ！ ドブチュチュッッ！ ズチュンンッッ！
（気持ち、イイッッ！ 触手ディルドー気持ちいいわっっ！ イケナイことなのに、感じるなんて、生徒会長失格よ……っ。でもオマンコ、キュンキュンして治まらないぃっ！）
敵から与えられる快楽は拒むもの、屈してはいけないものという気高い倫理観が、仁三たちによる、度重なる調教の末に、受け入れてもいいものとして、知らぬ間にアイラの心に刷り込まれていた。
（くぅぅ、身体が勝手に反応しちゃぅ……っ。おチンポをハメられると、気持ちいいことで、頭がいっぱいになって……っ。あぁ、私、オマンコ、もっとほしいの止められないわっ！）
もっと気持ちよくなりたいという思いが、捕えるべき男たちの前で、無様な合腰を打たせてしまう。
人間相手ではないから、滑稽極まりない姿だが、その羞恥すらゾクゾクしてしまう変態快感だ。
刷り込まれた劣情が、もっともっとと無意識のうちに、身体を動かし、ねだってしまう。
「ははっ、騎士様は、激しいのがお望みのようだな。いいだろう、要望通り、最大モードで感じさせてやる！」
リーダーの声にあわせ、淫具たちの責めが一気にスパートをかけていく。
ズチョズチョズチョッッッ！ ギチュゥウッッ、グチュグチュッ！
「んほぉおおっっ！ のっ、おおおおっっ!!」
膣内の触手ペニスは、そのギンギンに硬化しきった擬似亀頭で、子宮口を容赦なく叩いてくる。
玩具とは思えない、ゴリラにでも犯されているかのような、ペニスのあまりの速さと圧力が、アイラの女穴に一本の女の芯を通す。
「んはぁぁっ、っっっ！ チンポ、子宮口ズコズコって……き、気持ちイイッッ！ ダメなのに、気持ち……よすぎるっ!!」
美しいブロンドのサイドテールが、大きく淫らにはためき、ムチムチさを増した女体が、ビクンビクンッッ！ と陸に打ち上げられた魚のように跳ね動く。
ぷっくりと怒張した肉根の周囲に生えそろったイボが、焦らされきって過敏になった、アイラの膣壁を、一切の容赦なくこそぎあげ、脳裏にバチバチと快感の火花が、何発も爆ぜ続ける。
「んふぉおっっっ！ おっぱいジュブジュブ吸われるの、気持ちイイわっ！ こんなの我慢できないっ！ 調教された身体じゃ……ム、リよぉっっ！」
皆の規範となる生徒会長である自分は、こんなにも弱かったのかと思い知る。どんなに危機的状況にあっても、泣き言を漏らすことなく、最後まで諦めずに、苦難を乗り越えてきた。
だからこそ、この若さでS級騎士という名誉を預かっていられるし、学園のみんなからも——巧も、そんな凛々しいアイラに好意と尊敬を抱いてくれて

いる。なのに……っ。
「そら、エロい尻がビクビクし始めたぞ。もう限界だぜ、この女ぁっ」
「イケよ、敵である俺たちの前で、思いっきり、てめえの牝顔を晒してなぁっ！」
「イク……っっ。もうイク……っ。本当にイィィッッ！　おほぉおおっっっ!!」
もう男たちに強がりを言う余裕もない。
触手ペニスの突き込みで、肉厚の太ももはブルブルと震え、スラリとした両脚は、指先まで完全に快楽で痺れてしまっている。
もし両手を拘束されていなければ、本気汁だらけのネットリとした床に、伝統ある学園の制服を濡らし、自らの指で胸をまさぐり、絶頂へ昇り詰めようとしていただろう。
すべては、あの男……小寺仁三による肉体、そして精神の奥にまで刷り込まれた調教の結果だ。
従わなくてはいけない理由はあった。けれどそのせいでアイラの身体は、ペニスを見れば浅ましく興奮し、焦らされれば、相手が悪党だろうと、尻を振って媚びてしまう。
あげく、勃起した牡棒の硬さと熱に膣を貫かれた瞬間、使命も誇りも忘れた、一匹の牝犬へと堕落してしまう。
（悔しい、悔しい悔しいっっっ！　な、なのに気持ちイイのがほしいのっっ。今犯されるのを止められたら、頭がおかしくなっちゃうわっっ！）
宝石のように美しい碧眼の奥は、もう色欲のピンクに染まりきってしまっていた。ハッハッと舌を出し続け、哀れな虜囚姿のまま、来るべき昇天に向けて、若く悩ましい身体をクネクネと躍らせる。
瞬間、ブクンッ！　と膣内の触手ペニスが、一回り大きく膨らんだのを、敏感な無数の肉ヒダで感じた。
どうやらこの玩具には、擬似的な射精機能まであり、その中身は間違いなく濃厚な媚薬だ。
「ぉおっっっ、チンポ出すのっっ!?　射精するのっっ!?　あぁっ、やめなさ……ううん、ちがうわっ、きてぇっっ！　もうイクの、私……もうイクからぁっっっ！」
男たちの夜の相手をするときに、仁三からきつく教えられたことがある。
『とにかく媚びろ。お前は牝だ。金がほしければ、騎士の誇りは捨てて、一匹の牝豚になれ！』
それはたとえ相手が、魔法で作られた違法生物玩具でも変わらない。アイラに女の天国を感じさせてくれるなら、親の仇にだって媚びるよう、散々訓練されたのだ。
年齢の割に大人びた魅力と、いまだ純粋な乙女の雰囲気を併せ持つアイラの女体が、吊るされたままガクガクと震え始める。
眉間にきつい皺が寄り、声が感極まった牝独特の、今にも死んでしまうかのような嬌声へと変わっていく。
「おおっっっ！　イクイクイクっっっ！　私、イクッッ！　精液、子宮に出してぇぇっ!!　おっぱい思いきりつねってっっ！」
感極まったようにアイラの背筋がビクンッッ！と大きくわなないたと同時、少女の言葉を受けたかのように、胸の淫具は、媚肉のたっぷり詰まった巨乳を四方からギチュゥウウッッ！　と限界まで締めつけ、中央の口の細かい菌を、真っ赤に勃った二つの乳首に立てて扱く。
そして股間の魔性玩具は、まるで弓矢のように、擬似肉棒を引き絞ると、すさまじい勢いで熟れ熟れの騎士壺に突入する。
ズボッ、ズチュゥウウッッ！
全身に並んだイボイボが、濃い愛蜜でグチュグチュの膣壁を入り口から抉りぬき、そのまま女芯の奥底、致命的な快楽神経の集合体である子宮口へ、弾丸のようにぶち当たる。
瞬間、アイラの身体は、尊い理想から引き離され、魂にまで教え込まれた屈服の牝淫語を口にする。
「イグゥッッ、変態騎士の蘇芳アイラは――っっ！」
ドブォオオッッ！　ドブゥウウウッッ！
アイラの心が快楽に染まり、それに同期した触手肉棒が、不気味な亀頭の先端から、特濃かつ大量の媚薬精液を、姫騎士会長の子宮へとぶちまける。
「――――イッグゥウウウウッッッッッッ!!」
あまりにも圧倒的な快楽と媚毒の波に、女の中心部が完全に牝の本能に支配される。
拘束されたままのアイラの女体が、ビビクンッッ！　と狂ったようにひくつき、見るもエロティックな、中出し絶頂を見せつけてしまう。
「おおっっ、ようやくイキやがったぜ、この牝豚がよぉっ！」
「自分で変態騎士って認めてやがる。ははは っ、わかってるじゃねえか。似合いのアヘ顔だぜ」
「ふぉぉおっっ、イっでるぅぅっっ！　媚薬ザーメンすごいわっっ！　子宮燃えるっっ！　すんごい遠くまでイグゥウウッッ!!」
昇天と同時に勢いよく秘唇から噴出された絶頂潮は、張りついた触手淫具に当たると、ビクつく太ももをボタボタと伝い、牝の臭いが充満する水たまりを作り上げる。
いつもクールで、物静かな生徒会長とはかけ離れた、獣のように太いヨガリ声とともに、惨めすぎるガニ股スタイルをとった両脚が、折れそうなほどの激しい痙攣を何度も繰り返す。
可憐な瞳はアクメを決めたと同時に、グルンと白目を剥いてしまった。絶叫の形で固まった唇は、涎と舌を同時に曝け出し、学園での理知的な面影は欠

思春期なアダム 第18話

EVIL EYES

天海雪乃

原作：さかき傘

エンジュのイラスト入りiPhoneケースの応募者全員サービス開始！

［くわしくは5ページへ!!］

――創世記第一章――

神より作られたアダムとその肋骨から作られた妻・イブは
楽園で幸せに暮らしていました。

あるときイブは蛇に誘惑されて
生命の実と対になる禁断の果実「知恵の実」を
アダムとともに食べてしまいます。

神の言いつけをやぶった二人は楽園を追放され
人の住まうこの世界へやって来ます。

そこで彼らの育んだ子らが全ての人類の祖であり
このため人は生まれながらにして二人の犯した原罪を
背負っているのでした。

ヴァルキリー
コミックス第2巻
あとみっく文庫7巻
好評発売中!!
web版コミックヴァルキリー
でも連載中！
http://www.comic-valkyrie.com/

前号までのあらすじ

黒猫に敗北し、睦月に嬲られた感覚に悩まされるエンジュ。一方睦月は、ミカから天使少女エンジュの過去を聞かされるのだった。

……藤田くんの生徒手帳

藤田睦月の身に何かあった時のために

監視用のバネイリを仕掛けておけ

ポウ

ミカ

恵風学園 生徒手帳

ウ

ぱふっ
……
任務完了――
チク。
…息苦しい…
いやな気持ち…
どうして…？
体操服……
藤田くんの……

くんっ

藤田くんの……
におい……

お腹の中が
むずむずする…

ムジ

ムニュ

この気持ちは
なに……？

……っ

ん…ん……

藤田くんのニオイで
包まれている
なんだか……

ギュッ

ギッ

んんっ…
んああっ…!!
ハァ
ハァ
ハァ
トロォ
……私は
なにを……
しているの

あ…あ…
チュン
チュン
結局昨日の夜はミカさんと最後までしちゃって寝不足だ……

あれ
机が新品に
なってる…？

ごめんなさい

え……
なんのこと？

理由は
聞かないで
ほしい

けれど……
ごめんなさい

なんだろ…

エンジュは
知ってる
のかな…？

ちら

こっち
見ないで！

昨日の夜のこと
思い出しちゃう
じゃない！

よくわからないけど
おこられた……

ぐすん

……おはよう
睦月クン

高貴なる魔女クラウゼア

淫堕の異端審問

小説 NOVEL／大熊狸喜（おおくまたぬき）
挿絵 ILLUSTRATION／しゅんぞう

最終話 カライルーズ王国に涙はいらない

度重なる強姦で
肉体を調教された魔女は
知性を失い、
淫堕魔女へ堕ちてしまうのか――

著者近刊
「淫獄のバトルアリーナ
狙われた正統後継者姉妹」

好評発売中！

翌日、クラウゼアに対する悪魔審問が再開される。
魔力を奪われ、女体を精液漬けにされゆく魔女。
一晩の間、ヤン隊長を頭とする騎士隊の男たちに犯され続け、連続絶頂と子宮内射精で、肉体も精神も責められ続けた。
明け方まで輪姦されて男たちから解放されると、そのまま気絶するように眠った。
重たい眠気のまま目が覚めると、既に日が暮れていて、また偽の審問が始まるのだ。
二日間の淫らな審問と夜通しの強姦と輪姦で、もはや肢体は、常に子宮からの飢餓感で上気し、震えている。
望まぬ不特定多数の男たちとの性交で、確実に淫堕魔女への坂道を、転げ堕とされていた。
広場の壇上への階段を上らされる一歩一歩が、重たい。気をつけて静かに歩いているのに、その振動だけで、子宮が性熱を燃やされてゆく。
「はあぁ……ぁあぁ……」
背後に両手を拘束されたという惨めな現実も、理性では屈辱しか感じていないのに、肉体は被虐的な戒めとして性感を高めてしまっていた。
（このまま、淫堕魔女へと堕とされてしまったら…）
男性に犯される性快楽に身体も脳も支配され、女体に呑み込んだ精液からしか魔力を得られず、いずれは快楽に呑まれ、魔法そのものを忘れてしまう。
（お母様から受け継いだ力を、失うわけにはゆきません…っ！）
壇上に上がらされた魔女は、首輪に繋がれたチェーンをギー司祭に掴まれている。
夕闇の広場に集まった人々は、この二日間に行われた異端審問を、完全に信じきっていた。
「魔女だっ！　クラウゼアだっ！」
「悪魔信者めっ！」
このカライルーズ王国を孤独に護ってきた護国の魔女は、国を破滅させる悪魔信者として、憎しみを一身に受け続ける。
人々の好奇と憎悪と劣情の視線に晒されながら、全身をマントに覆われたまま、広場の向こうの山々の、更に遠くを見つめていた。
騎士たちに護られた壇上にはやはり、クラウゼアの肉体に執着して処女を奪ったグルーク王子と、罠を仕掛けた張本人、宰相ガギロギアの姿もある。
（……ガギロギア…っ！）
疲弊しきった目で、しかし強い意志を込めた視線を向けると、宰相はギラついた邪眼を更に嬉しそうにギラつかせていた。
カライルーズを取り込もうと暗躍する、軍事大国ドラケニア。
その侵略を阻止し続けた魔女クラウゼアを貶めたガギロギアは、ドラケニアの密使だった。
ただその事実に、ガギロギアに育てられたに均しいグルーク王子は、全く気づいていない。
（このままでは、カライルーズ王国はガギロギアに呑まれてしまう…）
そんな一国の危機に対し、魔女の脳裏には自分を敗北せしめた、忍者イヌワシの言葉が過ぎる。
『カライルーズが、愚かにも自ら国家国民を売り渡し、世界はそれを認めた』
貧しい小国のカライルーズは、戦乱の世界から見捨てられたのだ。先代の王と、亡き母が護ってきたこの国が、今の王たちによって消滅してゆく。
偽りの審問がなければ、クラウゼアを憎む事なんてなかった人々も、当然巻き込まれるだろう。
そんな中で。
（私は……）
一人の魔女には重すぎる現状に胸を痛めても、クラウゼアにはどうして良いのか解らない。
ただ真面目な使命感だけが、心のどこかで焦りとなって、重くのし掛かってもいた。
いつも通りの落ち着いた仮面で狂気を隠すギー司祭が、審問の再開を宣言する。
「それではこれより、悪魔信者クラウゼアに対する、悪魔払いの審問を再開します」
悪魔払いは、少なくともう「審問」ではない。
そんな矛盾すら気づかない程、貧しさに耐える人々も、精神的に追い詰められているのだろう。
「悪魔の女めっ！　とっとと悪魔と手を切れ！」
「私たちの生活を返して！」
「この国の富を独占しやがって！」
人々の罵りも、もはやクラウゼアの関しない事実にまで及んでいた。
「では、審問を開始します」
言葉と同時に、魔女のマントが剥がされる。
「あぁっ――っ！」
マントの下から現れたのは、裸の上半身に縄だけを打たれた、美しくも妖しい白い肌。
両腕は背後で拘束されて、爆乳は根元で縛り上げられて、より大きく強調されている。
足下は歩くにも適さないほど高いピンヒールで、立っているのがやっと。
それ以外は、一糸纏わぬ全裸だった。
人々から、特に男性たちからは、劣情が混じった感嘆が「おおお……」と漏れる。
二日間の審問で特に男たちは、麗しい魔女の女体に対して、強い欲情を覚えているのだ。
「あぁ……みなさんの、視線がぁ…っ！」
男たちの視姦を受ける桃色の乳首が、それだけでキュ…と硬化を魅せる。
括れたウエストが羞恥にくねり、無毛の恥丘から割れ目までの秘処が、牡の強烈な欲情を容赦無く向けられていた。
「か、身体が……あぁあ…っ！」

あらすじ　悪魔と通じ、護国の任務を放棄した疑いで悪魔審問にかけられた美しき魔女クラウゼア。冤罪を訴えるクラウゼアだが、護ってきた国民や共に戦った王国兵士から『浄化』と称した輪姦陵辱を受け、魔力を失う危機に陥ってしまう……。

牡の性欲を視線として向けられただけで、女体は教えられたばかりの性絶頂を、思い返す。
心臓はトクトクと期待に鼓動を速めて、全身の肌がシットリと汗ばむ。
胎内では、男性器の熱と堅さと重さと存在感が思い起こされ、強い飢餓感に蜜が溢れ始めてもいた。
裸を見られただけで、子宮が自ら犯される準備をしてしまう。
（わ、私の身体は…っ！）
こんなにも性感を開発され、淫堕魔女へと近づけられてしまっているのだ。
このまま更に犯されてしまったら、もう淫堕魔女への転落を回避する事なんて、絶対に叶わない。
クラウゼアは心底から、自身の現状に恐怖する。
そんな魔女に対して、勝利を確信しているギー司祭が、あらためて問う。
「悪魔信者クラウゼアよ。悪魔と決別すると、我らが神テリィボルに誓うか？」
広場の人々に聞こえるような、よく通る声で問われる。
「わ、私は……」
今、嘘の自白をしてしまえば、審問は許されるのだろうか。
そうすれば、グルーク王子の肉遊具にされたとしても、例えば神教の秘術とかで、淫堕魔女に堕ちる事だけは、回避させてもらえるだろうか。そんな逃げ道も、想像してしまう。
母から受け継いだ、魔女の血も――。
美顔を伏せて疲弊していたクラウゼアは、しかし強い意志を輝かせる視線を人々に向け、美しい声でハッキリと宣言をする。
「先代の王ニューフオウの名誉にかけ、我が母の名誉にかけ、私は悪魔と通じてなどおりません！」
はっきりと宣言をした瞬間、会場を覆う怒りの感情が、まるで涼風に流されたかのように、サァっと晴れた。
「……おおぉ……」
その凛々しく堂々としたクラウゼアの存在そのものに、人々は一瞬、憎悪を忘れて見惚れてしまう。
ヒノモトの王の血を引くと言われる、魔女クラウゼアの高貴な血が、見る者全てを畏怖させたのだ。
肉体だけを目的としていたグルーク王子でさえ、淫邪な目的を忘れて見惚れてしまう。
「ク、クラウゼアよ……お前は…」
しかしその程度の事態は、ガギロギアもギー司祭も当然、予測していた事でしかない。
司祭は、冷静な瞳に狂気の喜びを光らせながら、壇の後ろに控える若い修行者たちに指示を出した。
「皆にあれを」
純白の貫頭衣に身を固めた数人の年若い少年たちが、手にトレイを持ち、壇上を見上げる男性たちに小さなカップを配ってまわる。
「なんだこりゃ？」
「聖水じゃねーか？」
一口サイズのカップには、透明な液体。
特に匂いもなく、また教会が配った液体という事もあって、人々は当たり前に聖水と思ったらしい。
しかしクラウゼアは、慄然としていた。
この二日間、ギー司祭やグルーク王子がクラウゼアに使用した液体は、全て性的な責めを味わわせる為の物だった。
なのに、ここで人々に聖水を配る意味なんてない。
魔女の頭を過ぎったのは、一晩中クラウゼアを犯し続けた夜に呑まされ、また王子自身も服用した、妊娠用の淫薬。
「ま、まさか……っ！」
見上げた魔女の焦燥に、ギー司祭の冷静な瞳が、狂気の性興奮に輝いた。
司祭はよく通る大きな声で、人々に告げる。
「聖杯を受け取った皆様。テリィボルに祝福されしその聖水を、その身に収めてください」
言われるままに、男たちが液体を呑む。と。
「うおおっ、身体が熱くなってきたぞおおっ！」
「オレもぉっ！　力がグングン湧いてくるぅっ！」
間違いない。薄めてあるとはいえ、強力な妊娠ポーションだ。全裸のクラウゼアを前に、複数の人々へポーションを与えた。
その意味は、容易に推測できてしまう。
「ギっ、ギー司祭さまっ――っ！」
これから行われるであろう陵辱劇に、魔女は必死に、許しを請おうと哀願する。
そんな追い詰められた表情も、司祭は涼しい顔で楽しんだ。
「クラウゼアを悪魔と決別させるには、もはや皆様のお力をお借りするしかありません。聖水を戴いた選ばれし方たちよ、神に祝福されたあなたの肉体を以て、魔女の身体から悪魔を追放してください」
「なっ――っ⁉」
淡々と、しかし力強くされた宣言は、不特定多数の人々による、魔女の輪姦。
そんな事をされてしまったら、肉体は強姦に晒され続け、連続絶頂から降りられなくされてしまう。
それどころか、確実に淫堕魔女へと堕とされてしまう。更に、誰の子供か解らない赤ちゃんを、きっと妊娠させられてしまうだろう。
「いっ、いやです、司祭様っ――あぁぁ…っ！」
許しを請う魔女が、強大な劣情の気に気づいて視線を向ける。と、広場の男たちがみな、原初的な熱と支配欲の色で、目を輝かせていた。
「ク、クラウゼアを犯っ――浄化できるぞっ！」
「じょじょ浄化するんだ！　ぁあの身体をっ、タップリと犯るんだっ！」

著者近況　クラウゼアの戦いを最後まで応援してくださった読者の皆様、ありがとうございました。暗黒の魔女の冒険は、単行本の書き下ろしでもうちょっとだけ続きます。

「ハ――――っ、ハ――――っ、ハ――――っ！」
「みっ、皆さんっ――ぁはぅ…っ！」
人々の眼光に、裸の魔女は恐怖さえ感じる。
なのに女体は、牡たちの性欲求を一身に受けて、過敏に拾い、より性感の熱を高めていた。
白い肌だけでなく胎内までが、官能的に濡れてゆく。子宮は飢餓感で更に強く炙られ、肉色のクリトリスは自ら濡れた頭を覗かせて、肉交に十分な反応を示してしまう。
本能的に腰が引けて、やや下向きになった緊縛の爆乳が質量を増し、タプンと揺れて牡たちを誘う。
「こ、このままでは……はぅ…っ！」
魔力も奪われ肉体も性感で脱力をさせられて、裸のまま性欲たぎる男たちの中に放り込まれる。
そうなったら、もうお終い――。
なんとか逃れる手はないかと、飢餓感にトロけそうな脳で、ある筈のない脱出法を必死に模索した。
高すぎるピンヒールで足下もおぼつかないまま、壇上で後ずさりをしたら、ギー司祭に首輪のチェーンを引かれて前進。
そんな裸身魔女の汗浮くヒップに、グルーク王子も興奮を隠せない。
「ああっ――ぉ許しください、ギー司祭さっ――」
許しを請う言葉を遮って、司祭は護国の魔女を淫堕魔女へと完全姦落させる、強姦陵辱を命じた。
「皆様、悪魔と通じる魔女を浄化し、我々の平和と繁栄を取り戻しましょう！」
宣言と同時に、両腕の拘束が解かれる。
「いっ、いやですぅっ――ああっ！」
両手が自由となったクラウゼアは、美しい裸身を人々の中へと、投げ出されてしまった。
爆乳を縛り上げる縄と首輪のみで裸の魔女が、淫欲に狂った民衆の中へと放り込まれる。人々が避けて丸く開いた路面へと、裸体が転げ落とされた。
「あぅっ！」
両手が自由となったクラウゼアだが、高すぎるピンヒールでの壇上からの落下で、路面に足をつきながらも転倒。
尻餅をついたら、丸くて大きなヒップがプルンっと揺れた。転げたら、縄で強調された爆乳が左右で大きく揺れている。
そんな女体に、媚薬で劣情に狂わされた男たちは視線を奪われ、より強く魔女の肉体を求めて、股間を隆起させていた。
「早く浄化をおおっ！」
「犯って犯って、中出しさせろぉ！」
裸の魔女を取り囲む男たちの目は、もう完全に理性を失っている。
性欲で目が赤く光って見えるのも、呑み込んだポーションの魔力の影響だろう。
「み、みなさん…！」
このままでは、みなさんに――。
絶対の危機から脱出しようと、魔女は気を乱されたままの肉体で、右腕を突き出して魔法を試みた。
「どっ、どうか下がってください！　エン・トルーシ・ド・マルーン……」
魔法の詠唱を始めると、開いた掌がホワリ…と発光する。
その輝きに、劣情に狂う男たちも、流石に怖じけて一歩引いた。
「まっ、魔法だぞぉっ！」
「この魔女めっ、やっぱり俺たちを殺す気だっ！」
炎の魔法を唱えたのは、身を守る意味での威嚇の為だ。しかし今の人々には、クラウゼアのそんな自己防衛さえ、当たり前に通じない。
（とにかく、今は逃げなければっ！）
もしかしたらこの魔力は、淫堕魔女としての魔力なのかもしれない。それでも今は、強姦魔と化した民衆たちから身を守る事が絶対だ。
輝く右手を人々に向けたまま、クラウゼアはジリジリと歩を進める。
「はあ……はあぁ…っ！」
子宮からの強い飢餓感に責められる女体で、素早く周囲を見回して、人の包囲が一番手薄な箇所を見つけてダッシュ。
「どっ、どいてください！」
不自由な高すぎるピンヒールで、拘束された美脚の力を必死に振り絞りながら、裸の魔女が走り出す。
劣情に狂った男たちの間を走り抜けるクラウゼアの、白い爆乳がタプタプと弾む。細いウエストは左右にくねり、豊かに実った裸尻がプルプルっと振られて、魅せてしまう。
男たちは魔法の輝きに戦きながらも、全裸の魔女の揺れる双乳や柔らかいヒップ、閉じられた無毛の秘処を、欲深く見送っていた。
クラウゼアが遠ざかった場所の男たちは、恐怖心が静まると再び、強姦の劣情に支配される。
「まっ、魔女が逃げるぞぉっ！」
「追ええぇっ！　捕まえろっ！」
「捕らえて犯してっ、浄化するんだぁっ！」
恥ずかしい裸での逃走劇に、グルーク王子もまた強く興奮をして、ガギロギアは胸のすくような満面の笑顔だ。
裸身に首輪と縄を打たれ、乳房も割れ目も隠せないまま、惨めな姿で逃走を図るクラウゼア。
「どっ、どいてっ――どいてくださいぃっ！」
魔法の右手が恐ろしくて、人々が道を空ける。
しかし背後からは、むしろ怒りを増す強姦者と成り果てた男たちが、大挙して迫っていた。
更に、光を見せる魔力も、光を持続させればさせる程、子宮の飢餓感が強められてゆくのが、解ってしまう。

著者近刊
『淫獄のバトルアリーナ 狙われた正統後継者姉妹』『星騎士少女キラジェム・ナイツ 悪夢の十三日姦』『猟辱島 スレイブハンティング』『わたしがゼッタイ妊娠するもんっ！ 幼なじみの正妻戦争』『道場破りガールズ!! 負けたら子作りいたしますっ!』ほか
好評発売中！

気を乱されているから力は安定しないものの。
（こ、この魔力は…っ！）
間違いない。
男性の精液を源とする、淫堕の魔力。それは使うほどに射精液を求めるようになり、やがては胎内放出の快感に呑まれ、魔法も知性も、全てを失ってしまう。
――トクントクントクントクン――。
逃走で鼓動が高まっているだけではない。息が上がっているのも、原因は別にある。
このまま魔力の光を使い続けていたら、自ら肉体を淫堕魔女へと追い詰める事にしかならない。
フと気がつくと、剥き出しな無毛の割れ目のすぐ上、ツルツルの会陰が熱い。
「これは…っ！」
眠っている間に消えていた淫堕の紋章が、いつの間にか力を帯びて、再び赤く、より強く輝き始めていた。
早く、逃れなければ――。
人壁の向こうに広場の終わりが見えてくると、クラウゼアの心にも、縋るような希望が見えてくる。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ！」
（もうすぐ、この地獄から逃げられる！）
「どっ、どいてええぇぇぇっ！」
最後の人壁を突破。
クラウゼアは、強姦魔の群れから遂に脱出。
した、その瞬間。
「待ちやがれっ、この魔女があぁっ！」
首輪に繋がれたままだったチェーンを掴まれて、力任せに強く引かれた。
「ぁぐふっ――かはっ！」
細い首がガクっと揺れて、裸の女体が背中を引かれて路面に転倒。
仰向けで転がった裸の爆乳がプルルっと弾んで、そのまま強姦魔たちのもとへと、引き摺られ始めた。
「捕まえたぞぉっ、この悪魔魔女がぁっ！」
「かはっ、こほっ――み、みなさん…っ！」
魔女を捕らえた男たちの目は、怒りと情欲に燃えて光っている。その姿は、まさしく悪魔だ。
「どっ、どうか私の話をっ――あぁぁっ！」
弁解の余地もなく、劣情溢れる男たちの中へと、裸身を引き戻されてゆく。
このままでは、男たちに犯され続けて、淫堕魔女へと確実な転落をさせられてしまう。
（こ、こうなったら…っ！）
もう余地などない。全裸の魔女は、飢餓感に脱力する女体に渾身の力を込めて、仁王立ちになる。
右掌を掲げた恰好で、爆乳が人々の視線を受け、閉じられた桃色の割れ目が視姦に晒される。
人々への謝罪の意志を見せながら、強い決意を宿した瞳が、悲しく複雑に輝く。
「ご、ごめんなさい…！」
クラウゼアは、自分が護ってきた筈の、今や狂気の人々に向かって、攻撃魔法を発動させた。
続けた詠唱に従って、右手の光が強さを増す。
炎の魔法が人々を襲うと思われた次の瞬間、乱された魔法は術者自身への攻撃となって、暴発した。
「マルン・テンジ・オ――――――――っきゃあぁぁぁっ！」
掌から発した光が、炎ではなく雷となって、魔女の身体が貫かれる。
――ピシャ――――――ンンッ！
雷は、熱を伴った電気の力ではなく、生物の肉体を麻痺させる神経系への力となって発動。
クラウゼアの全身が、脳の天辺から心臓や子宮、つま先までを、強いダメージで貫かれてしまった。
雷に打たれた裸身が硬直をして、背筋を伸ばす。
人々の前で突き出された爆乳が、筋肉の痙攣で細かく揺れる。
反射的に力んで窄まる肛門に合わせて、膣孔がキュウ…と収縮をして、柔らかい閉じ目が奥まるように、更に強く閉じられる。
丸い裸尻も引き締まった無毛の下腹部も、プルルっと震えていた。
魔女クラウゼアは、自らの魔法の暴発で裸身を痛めつけるという、魔女としてこれ以上にない恥を、自ら晒してしまっていた。
「あああああああああああっ……あぅっ！」
数秒の雷攻撃が終了すると、脱力しきった全身がクタりと地に伏せる。
「はああ…はぁぁ…はぁぁ…っ！」
崩し正座で両手までついてしまった裸の魔女は、激しい息を吐いて、必死に肉体を起こそうとした。
白い肌は性感と逃走で上気していて、シットリと霧状の汗を纏っている。
なだらかで柔らかい曲線の肩が上下して、取り囲み始めた男たちの劣情を、更に強く刺激していた。
逃がさないように囲む男たちは、魔法の失敗で、魔女に対する恐れを無くしている。
「この能なし魔女がっ！　魔法の力も、今まで悪魔に縋ってやがったんだなっ！」
「オレたちを殺そうとしゃあがってっ！　この悪魔めぇぇっ！」
「わ、私はっ――あくぅぅっ！」
怒れる陵辱魔たちの手で首輪のチェーンが引かれると、裸の魔女は再び、広場の中央へと引き摺り戻されてしまった。
「早く、魔女をこっちに繋いでっ！」
「あ、あれは…っ⁉」
陽が落ちて松明に照らされた広場の中央には、成人男性の身長よりも高い、小山のような盛り上がりができている。

見ると、壊れた椅子や廃棄された農具、古い衣服や生ゴミなどが集められた、廃物の山だ。
歪な形のゴミ山はキツいカーブで盛り上がり、アチコチから椅子の脚や鋤などの棒が突き出ている。
星空をバックに松明の炎で下から照らされるその光景は、まるで悪魔信者の屠所の山そのものだった。
どうやら、輪姦に参加できない女たちが作り上げた、陵辱の場らしい。
首輪を引かれる裸のクラウゼアは、そのままゴミ山の頂上まで引き上げられると、突き出した棒にチェーンを括り付けられる。
「やっ、やめてくださいぃっ――あくぅっ！」
「黙れ、この悪魔がっ！」
「魔女を繋げ！　逃げられないようにっ！」
全裸に縄を打たれたまま、ゴミ山の頂上で壊れた椅子の上に、仰向けで乗せられるクラウゼア。
首輪のチェーンで逃げられないように繋がれると、男たちの手でパッパッの美脚を限界まで開かれて、閉じられないようにと、突き出した棒に汚れたの縄で縛られた。
「どうだ、悪魔めっ、フヒヒヒヒッ！」
「マンコが丸見えだぜっ！　ゲハハハッ！」
「みっ、見ないでくださっ――あああっ！」
限界まで開かれた腿の間に、欲情たぎる男たちの視線が集中される。
原初的な欲求が突きつけられると、過敏な秘処はそれだけで、性感として拾ってしまう。
「み、ないでへぇぇっ――っ！」
自由な両手で隠したいのに、椅子の上に背中だけ乗せられた仰向け状態だから、背中が反れて両手が秘処に届かない。
牡たちの視姦で、子宮が強い飢餓感を暴走させられてゆく。
閉じられた割れ目が震えながら、自らの欲求に屈服して開いて、濡れた粘膜をクチュリと公開。
小さな肉芽は薄い包皮から濡れた半身を晒し、極薄い襞は綺麗に整って開く。
濃い桃色に上気した粘膜は、教えられたばかりの強姦と輪姦を期待して自ら蜜を溢れさせてアピール。
未だ処女色で小さい膣孔と、薄いカフェオレ色の後孔が、男たちの視線を感じてキュウ…と窄まっていた。
（み、みなさまに…みられてへ…っ！）
牡たちの性欲視姦が容赦無く注がれて、女体が早くくださいと、脱力をしてゆく。
「はああ……ぁはあぁっ――っ！」
思考がドロりと蕩かされてゆき、息が乱れ、逃げるという考えすら、意識から消失させられてゆく。
恥丘で輝く淫堕魔女の紋章は、女体の興奮を糧にして更に輝きを増す。そして牡たちの理性を狂わせながら、獣の欲情をより強く刺激していた。
「見ろっ、魔女のマンコが開いてやがるぜっ！」
「オレたちに浄化して欲しいってよおおおっ！」
そんな言葉がきっかけとなって、浄化の名を借りた、男たちによる集団陵辱が開始された。
筋肉質な農夫に開かれた股間に陣取られると、取り出した黒い勃起を肉孔に充てられる。
――ピトリ。
その瞬間、クラウゼアは強姦による淫堕魔女への確実な転落に恐怖して、絶叫をした。
「ひぃいっ――いやっ――いやですううううぅぅぅぅぅぅっ！」
ゴミの山に捨てられた美女のそんな叫びは、しかし男たちの情欲を更に湧き起こす材料にしか、ならなかった。
「うるせぇっ、爺さんから受け継いだ畑を枯らしやがってぇっ！」
抵抗の言葉を難癖で拒絶されながら、魔女は見知らぬ男に強姦をされる。
――っヅチュっ！
「っぃいやあああああぁぁぁぁぁぁぁっ――やめてへっ――いやですふうううぅぅぅぅぁぁぁぁあああああああっ！」
子宮孔が突かれる程の奥まで、一気に姦通をされてしまった。
魔女として絶体絶命の淫堕レイプ。焦燥で追い詰められた意志と理性が、悲鳴を上げる。
なのに膣壁と本能を満たされてしまった女体は、奥深くまで犯して戴いた感謝を表すように、強姦魔を締め付けて蜜を溢れさせてしまう。
子宮から広がる官能の痺れで、全身の力が蕩かされてゆく。
閉じようと抗う美脚が、男の腰に押されただけで、自ら容易く開かれてしまう。
微細に粒立つ膣壁が、更に粒を立たせて、勃起の肌をヌリュルリュと愛撫。
「ぐおおっ――ヌリュヌリュでキュウキュウ締め付けてきやがるっ！　なんてイヤらしいマンコなんだあぁっ！」
クラウゼアの肉蜜壺を味わう強姦農夫は、一瞬でも早く射精がしたくて、イキナリ強く腰打ちを開始した。
――ッヅぷヅちュりュちュっ、ヅぷヅぷヅちュるヅちュづぷづプゅッ！
深く浅く、強く強く。
ポーションの影響で欲情に狂わされた男が、魔女への強姦に全力で突っ込んでくる。
奥さんで慣れた腰突きなのだろう。
ただ子宮の入り口を突くだけでなく、亀頭の鈴口の割れ目を巧みに利用して、子宮入り口の縁をグリグリと抉り廻される。
過敏な性感帯にまで躾けられた入り口を捻り突か

れると、子宮から背筋、そして脳までの神経全体が、強すぎる甘電で痺れさせられてしまう。
農夫の強姦性悦で女体の中心が灼かれてしまうと、クラウゼアの脳神経は、アっという間に思考力を奪われてしまった。
「っあああああああああああああっ——シキュウぅッ——ヒキュウぐりぐりいいいいっ——コヒが壊れっ——感じすぎてへ——こわれへっ、ますふうううううううううっ！」
高貴な美顔が官能にトロけ、艶めく唇からは犯される喜びを自ら恥告白。
濡れた眼差しを強姦魔に差し向けて、まるで愛しい恋人を見つめるような、完全服従の官能美顔。
突き上げられる女腰が淫猥にクネり、男の全力を柔らかく受け止める。
細いウエストも複雑に泳ぎ、肉抽送の力と振動と存在感を、全身の性官能として、肌の隅々にまで伝搬してしまう。
子宮への肉厚責めで灼かれる背筋が、弱々しくもクンっと反れて、豊かな爆乳が突き出される。
男の下で剥き出しにされる双乳は、強姦の振動で素直に揺れて、左右揃って上下に大きな楕円を描きながら、男たちの興奮を誘っていた。
犯されるクラウゼアの女体も、もう強姦どころか異性の存在そのものに、魂から屈服を始めている。
清潔な意識は女体の性感に押し潰されて、自尊心の柱は完全に倒壊。
むしろ両者は邪魔者でしかないと、官能に支配された脳神経に踏み砕かれて粉みじんにされて、消失させられてゆくのが、止められない。
無毛の恥丘に浮かんだ淫堕魔女の刻淫が、命を得るかのように、更に妖しく強く輝く。
胎内を犯して肉詰めしてくれる男性には、全てを差し上げて当然——。
淫堕魔女のそんな意識が、肉欲の底から聞こえてきていた。
「おなかズンズンんんんっ——ぁあああっ、こわれるふぅぅっ——おとこのひとにっ、おかされておなかっ——こわれてしまふうううぅぅっ——おとこのひとっ——ごぅかんんっ——すてきひいいいいいいいっ！」
「浄化してやってるオレのチンポで、こんなに喜んでやがるぜっ！ この淫乱魔女があぁっ！」
魔女強姦で更に興奮する、農夫の男。
性感で震える両手が、畑仕事で鍛えられた強姦者の首に絡みつこうと、しなやかに伸びる。
首輪で繋がれて仰向け陵辱されるクラウゼアの両手は、左右から別の男たちに捕らえられた。
「手が空いてるなら、オイラのチンコも握れ！」
「こっちもだ、手でしごいて犯す準備させとけ！」
細くてしなやかな指を男たちに掴まれて、ギッチギチに硬化した勃起を握らされる。
熱い興奮に高ぶった男性器の本体を包まされると、掌から脳と子宮へと直接、男性特有の、原初的な性欲求の熱と意識が伝えられた。
ペニスを握らされるなんて、生まれて初めてのクラウゼア。
押し潰されてゆく理性が、嫌悪の抵抗を示す。
なのに女体は、肉棒の要求する愛撫奉仕を教えられると、素直に従い、覚えてゆく。
「はいいっ——はひいぃぃっ——っあああああっ——手がトクトクぅっ——いやですぅぅっ——ぁ熱いぃっ——あついですうううううっ！」
掌で脈動する勃起は、太くて堅くて長くて、表面を幾筋もの血管が熱く脈打っている。
男に教えられるまま、魔女の白い掌が黒い肉角を上下に愛撫。
——すリスり…スりスりシゅリしュりしュシゅしュシゅリりっ！
手淫奉仕の方法なんて知らなかったのに、身体はまるで、それが女の当然の義務ですと、勝手に納得。
左右それぞれの柔らかい掌で、触れるか触れないかの優しい触れ方で勃起を包む。
根元から先端に向かっては少し遅めにしごき上げて、先端の鈴口から根元までの起伏を素早くなぞるような愛撫を教えられて、何度も何度も繰り返す。
拙いながらも真面目な性格が表れている魔女の手淫に、男たちの支配欲が満たされてゆく。
「んんっ——なかなか上手いぞ、魔女のクセに！」
「悪魔も、掌マンコまではっ——んぐぐっ、教えてくれなかったってかぁっ⁉」
左右で奉仕をさせる男たちの興奮は、すぐに高まってきているらしい。
二人ともクラウゼアの美顔に放出したくて、仰向けの魔女に向かって、左右から黒い勃起を突きつけてきた。
途端に男性特有な強い我慢汁の汚臭が漂ってくる。
「ひはあああああっ——だんせいのっ、においひいいいいいいっ——ヒキュウがまたはっ、ひあああああああっ——もえますふうううううっ！」
牡の性臭を嗅がされた途端、子宮の飢餓感がより強く熱く、膨張させられてしまった。
心臓の鼓動がドクンっと速まって、全身の性熱が一段と高まる。
手足の先まで痺れが広がり、全ての音が遠退いてゆく。脳内には、交わる濡れ肉と自分の艶声と、男たちの声だけが響き渡った。
もうすぐ、イく——。
そう無意識が理解をしてしまうと、蜜膣は更に強姦魔を粒だって抱き締めて、愛撫を捧げる両手は摩擦の速度を上げてご奉仕。
——っヅぷちュつプッ、ヅぷヅぷリゅッ、しュり

ュしュるシゅりュりュリュッ！

「くおぉっ――この魔女めがっ！　マンコの締め付けが更に良くなりやがった！」

「掌もなかなかだぜっ！　おい魔女っ、舌も使って舐めるんだっ！」

暴行魔たちのイヤらしい命令に対して、絶頂寸前の女体はなんの躊躇いもなく、逆に自ら従順に性奉仕をしてしまう。

艶やかなリップを割って差し出された濡れる赤い舌が、我慢汁を垂らす男たちの亀頭部分を、恐る恐るレロりと舐め上げる。

「はぃぃぃぃっ――れ、レロっ――んちゅ、レロレロっ――ぉおっ、ぉいしひぃぃぃぃぃっ！」

苦くて臭くてエグい男汁なのに、淫堕魔女と化してゆく女体には、この上なく甘美なご褒美。

豚人間にさせられたフェラチオのように、喉の奥まで詰められる苦しさがない。

それだけに、勃起の熱と汁の味を純粋な美味しさだと、脳の芯にまで認識させられてしまう。

サラサラの濡れ舌で亀頭の鈴割れをペロりと舐め上げると、男たちの腰が敏感に反応。

男性器全体の熱がグンっと上がり、力んで上気して歓喜を示した。

「んぐっ、そうだっ、もっとしつこく舐めろっ！」

熱い亀頭のツルツル部分を、命令されるままに、舌舐め上げで繰り返しご奉仕を施す。

愛撫するクラウゼアも、舌に溢れるカウパーの苦味に、口内から脳の中心までもが、性感でトロけさせられてしまう。

「ンレろ、るチゅぅっ――ぁあっ、ぉいしぃっ♥」

舌奉仕のご褒美を授けられてしまうと、魔女はもう舐め愛撫を止める事なんて、できなかった。

鼓動と肉音だけで全身が支配されて、口内から脳から子宮から、絶頂への飛翔がもう目前だと、女体の隅々にまで教えられる。

「レろれロちュれロんンんっ――ぁぁぁぁぁぁああああああっ――くちびるもっ、てのひらもおぉっ――んレろぉふうぅぅぅぅううっ――またイきひっ――おかされてっ――またイきますうううううううううっ！」

無意識までが頂点を欲して、白い肌がサァっと上気する。

クラウゼアは自らも意識せず、飢餓感で濡れたトロける眼差しを、強姦魔たちに差し向けてしまう。

その途端、男たちも射精の頂点に達した。

「エっ、エロい目しやがってぇっ！」

裸腰を抱く農夫の男が、腰を引いた次の瞬間、全力で肉を突き込んでくる。

――っっヅゅチゅぷッッ！

力溢れる突き込みで、魔女の子宮口が男の亀頭部分によって、グリっと突破されてしまう。

「っ――っんひはあああああああああぁぁぁぁぁぁああああああああっ!!」

子宮内まで制圧される圧迫感に、クラウゼアの脳神経は強すぎる絶頂で、また確実に灼かれてしまっていた。

「ィイイっ――またっ、わたくひぃぃいいいいいぃぃいっ――またっ、ぉかされてへっ――ぉかされてイきますううううっ――あんんっ、あああんんんっ――おかされるのすてきですうううううぅぅぅぅぅぁ――おかされてイくまっ、すてきですうううううぅぅぅぅぁぁぁああああああああああっ!!」

絶頂に上気する裸身が、ヒクンっと背筋を反らして、双つの爆乳が突き出されて跳ねる。

松明に照らされて汗を散らす全身が、細かい痙攣を魅せながら、取り囲む人々の情欲を更にかき立ててしまう。

子宮を犯す強姦魔の勃起で聖宮の壁を押されながら、クラウゼアの胎内へと、性粘液が放出された。

「浄化だああっ！」

――っブびユビゅブゅブゅぶュぶュブゅブゅブゅルゅるュるュるュりュりゅりゅりュりゅッ！

スリ下ろした山芋のように粘性の強い射精液が、クラウゼアの子宮に強く強く吐き出される。

強姦魔の精液を胎内の隅々にまでへばり付けられると、女体の本能は歪んで満たされて、心の芯までが幸福感で染め堕とされてゆく。

「ぁああ……なか、だしぃ……わたくしの、しきゅうぅ……もっと、いっぱぃおかして…らしてへ、くださいぃ……♥」

絶頂を告白しながらトロける魔女の美顔に向けて、手淫と舌愛撫を受ける男たちも爆ぜた。

「おいらのもっ、呑めよっ！」

――ッぴユ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ルゅるユルゅるユルゅるルっ！

仰向け状態な妖しい絶頂フェイスに向かって、左右から白濁の樹液が吐き付けられる。

丸くて細い顎に、唾液と我慢汁で糸を引く艶めく唇に、細い鼻に、白い頬に、濃い牡液が吐きかけられて、ドロりと穢される。

「んぱうぅっ――んちゅっ…んはぁあ……だんせいの、せいえきぃぃ……ぉいしい、ですうぅ…♥」

顎や鼻や頬から垂れる精液が、サラサラの黒い長髪にも、垂れ伸びて纏わり付いていた。

「まだだっ、おいらもお前のマンコを犯すぜっ！」

そんな恐ろしい強姦宣言をされても、もうクラウゼアの脳裏には、また犯していただけるという喜びでしか、届いていない。

「ぁい……もっと、ぉかしてへ…くださひぃ…♥」

掌の中で感じる牡の脈動と、美顔を覆う大量の汚臭と、粘液のネバりとその重さ。

男性特有な現象だけで、魔女の脳神経がより深く

確実に、精液へと自ら服従させられていった。
胎内射精をした男に勃起を抜かれると、女体は達したばかりなのに、より強い飢餓感を膨張させられてしまう。
魔女の震える裸腰は、港から来たらしい漁師の男にガッシリと捕らえられて、全身を無理矢理に引き起こされて、犯される。
男の首には、テリィボル神教の信者らしいシンボルのネックレスが輝く。
「ワシのチンポだぁぁっ！　そうらよっ！」
首輪と棒を繋ぐチェーンを限界まで引かれながら、全裸に縄のクラウゼアが、M字開脚で持ち上げられて、仰向け漁師に着席させられた。
――つづチゅルっ！
「っっっぁあはあああああああああああああああああっ――なかがはあああっ――いきなりっ、おくまでズンってへえええええええっ！」
自身の体重を乗せられて、M字開脚のまま子宮壁を突き上げられるほど深く、騎乗位レイプ。
漁師の野太い堅肉で占領された途端、子宮は満たされる歓喜と、それ以上の飢餓感で、また燃焼させられてしまった。
胎内から背筋を抜けて、脳神経の中心から脳天の向こうまでを、勃起の肉厚と性感で、完全に姦通された感覚。
無条件に満たされてしまった魔女は、強姦者の言葉を無意識に、素直な歓喜として復唱してしまう。
「チっ――おチンポおおおおおっ――おちんぽさまはぁっ――とのがたのっ、おチンポさまがおくまでえええっ――すてきっすぎますうううううっ！」
透き通るような艶声が、広場の全てに響き渡ってゆく。
真下から犯す男に向かって、トロけて濡れた眼差しで強姦の感謝を伝えてしまう。
自ら発した恥知らずな言葉に、砕かれて粉にされて消えゆく僅かな理性が、更に踏みにじられて、消失へと追い込まれてしまう。
なのに、レイプ男とその牡肉を恋人のように受け入れて抱き締める膣壁は、もっと犯してくださいと、蜜を溢れさせて媚びを売っていた。
「おおおっ、なんて絶品のマンコなんだっ！　ふんっ、ふんんっ！」
粒立つ濡れ膣を犯す漁師が、やはり射精だけを目指して抽送を開始。
ヅゅプづゅプと激しい突き上げが始められると、クラウゼアの女体はそれだけで簡単に、絶頂へと持ち上げられてしまう。
「っひゃあああっ――またィイいいいっ――わたくひっ――おかされてまたイきひっ――とのがたのっ、おちんぽさまにひっ――おかされてまたイきますううううううううううっ！」
強い絶頂感で陵辱女体がクっと反れて、汗光る爆乳がタプンっと弾む。
上気する肌が紅葉色に染まり、蜜溢れる膣孔は更に微細な粒を起こして、男性器を抱き締めて愛撫を施す。
「ワシの勃起で、簡単にイきおったかっ！　もっとやるぞっ、そぅらぁっ！」
犯す女の絶頂姿に、強姦漁師の征服欲が満たされてゆき、更に激しい抽送をくれる。
――ッヅゅチゅヅぷチゅヅちュづプづチゅプッ！
「あんあんあんあんんっ――おちんぽさまがなかれへぇっ――くらうぜあぁっ、もふうっ――おちんぽさまのっ、ものれすううううううっ！」
強すぎる性快感で脳神経が灼き上げられて、もう思考力なんてないに均しい。
素直な喜びが感情から溢れ出て、言葉が幼児退行までして、クラウゼアの肉体と魂の全てが、強姦者に捧げられてしまう。
ズンズンと突き上げられる裸尻がタプタプと柔らかく弾み、牡の力を受け止め続ける。
細いウエストは前後に抽くしなって、激しい上下動をなんとか乗りこなしていた。
男の腰突きで上下する白い爆乳は、濃い桃色に硬化した先端の媚突に汗を散らして、柔らかさを男たちにアピール。
精液を纏ったままの美顔は快感にトロけ、無邪気で純粋に喜ぶ幼女のような、しかし性を教えられた大人の女のような、複雑な官能の美に輝いていた。
一突きごとにより深い絶頂をさせられ、子宮がより強い飢餓感を覚えさせられてしまう。
「ぁはやあああああああっ――ィくのがはっ――またイひぃっ――またわたくひっ、イくふうううっ――あああああっ――くらうぜあああっ、イくのっ、イってるのがはっ――とまりっ、ませんんんんんんんんんんんっ！」
魔女の女体は遂に、性感の頂点から降りられない絶頂常態へと、突き上げられてしまった。
人々の前で自らイき状態を告白してしまうと、破滅的なほどの被虐の羞恥で、女の脳が更なる悦楽絶頂へと導かれてしまう。
全身の肌は小刻みに震えっぱなしで、瞳は焦点が定まらない。
恥丘に浮かぶ淫堕の紋章は、更に燃えるような赤色で活性化して、女体は飢餓感だけで操られている状態だ。
このままでは淫堕魔女へと、完全に堕とされてしまうだろう。
クラウゼアの思考力など完全崩壊も寸前で、粉と消されてゆく最後の理性が、悲鳴を上げていた。
廃棄物の小山の頂上で、犯され続けてイかされ続ける魔女の傍らに、冷静な狂気のギー司祭が立つ。

イセリア英雄戦記
the Legend of the Icerya war
第39話 陵辱の魔王と運命の果て
フィオナたちの前に現れた魔王！
その圧倒的な力の前に、
姫と騎士は性奴隷に堕ちる！
小説 NOVEL 筆祭競介（ふでまつりけいすけ）
挿絵 ILLUSTRATION 牡丹（ぼたん）

「そんなっ……!? ああ、メイベルローゼっ……! どうしてっ」
フィオナの口から悲痛の色濃く滲む声が漏れると 同時に——その口も含め、身体がまったく動かなくなってしまう。
「ッッ」「……っく」
セリーヌとウォルガードも同様のようで、広い湯浴み場の床の上で、彫刻にでもなったように微動だにしない。
(……なんで……こんなこと……)
フィオナの視線の先には、翡翠の髪も艶やかな美少女、メイベルローゼ。
そのアメジスト色の瞳から放たれた魔の力——イービルアイが自分たちの身体から自由を奪ったのだ。
「ふ、ふん。私は常に勝つほうにつくの。貴女たちとはココが違うからね」
彼女は自らの頭を指さしながら、勝ち誇ったように顎を反らしてくる。
しかしその言動とは裏腹に、口元が歪み眉間に深い皺が刻まれていた。
心の底から望んでした行為ではないことが、その表情から察せられる。
「どけ」
そんなメイベルローゼを片手で軽く押し退けて、巨躯の男がフィオナたち三人の前に立つ。
「……ッッ!?」
なんという威圧感だろうか。
男の全身から溢れ出るオーラが、過去に経験したことのない高密度な魔で満ちている。
ガクガクガクガクッ。
今イービルアイで指一本動かせないはずなのに、信じ難いことに、両膝が本能的な恐怖で無様に震え出していた。
「セリーヌよ。我に対し、あれほどの大口を叩いておきながらこの様か」
その男の口から吐き出された声は、まるで地獄の底から響くように低く、聞く者の魂を根源的なレベルから震わせる力を持ちあわせていた。
「……」
イービルアイに掛かっているセリーヌは何も言い返せない。
しかしその横顔に流れる大筋の脂汗から、彼女が心の底から恐縮していることが嫌でも伝わってくる。
(……まさか……この男が……)
魔王の后となった彼女がここまで怯える者は、この世にひとりしかいないだろう。
夫であり、絶対の忠誠を誓う相手。
——魔王。
幼い容姿をしていると聞いていたが、目の前の男はウォルガード以上の巨躯だった。
精悍な浅黒い顔に巌のような肉体の持ち主で、一見すれば人である。
しかしその瞳が違う。
人なら白目の部分が漆黒で、瞳孔も猫の目を思わせる縦割れの真紅。
そのまさに悪魔の瞳が、セリーヌに続いてウォルガードに向けられる。
「人の分際で、我が后を穢すとは、な」
「……ッッ」
ウォルガードほどの男ですら、魔王を前にして、その額に脂汗を浮かべていた。
「すぐには殺さぬ。この世に生を受けたことを、心の底から呪うまでの痛みと恥辱を、お前の寿命が尽きるまで与え続けてくれる」
魔王は片手を振り上げると、握った拳を男の右肩に振り下ろした。
ゴきグシャッ!
と骨が砕ける乾いた音が、筋肉の潰される湿った音とともに響く。
「……ぐがっ!」
ウォルガードの口から、短いながらもはっきりと呻き声が漏れた。
たとえイービルアイで動きが封じられていようとも、肺から溢れ出る空気の塊が、口の形に合わせて音を漏らすことまでは止められないようだ。
バランスを崩したウォルガードが床に倒れた。
魔王はなんの感情も窺えない醒めた表情で、その相手を見下ろしながら右足の腿を上げ——ドガッ!
勢いよく踵を男に振り下ろす。
何度も。
何度も。
「がっ! つぐぁ! がぁっ!」
肩。膝。手首。足首。
ウォルガードの全身の関節が次々に砕かれていき、両手の指もバラバラの方向にひしゃげていく。
(ひ、酷い……。酷すぎる……)
あれほど武を極めんとしていた男の身体が、もう二度と剣を持てない肉塊へと変えられていく。
そして——今まで腿を上げる動きに終始していた魔王の右足が、後ろに大きく振りかぶられた。
「お前の残りの生より、まずは食らう喜びを奪ってやろう」
すでに激痛で気を失っている男にそう宣言し、一気に振り抜かれた魔王の爪先は——。
「……グガッッ!!」
正確に男の口腔を捉え、折れた歯のいくつかが、周りに飛び散った。
魔王はウォルガードの口に爪先を捻じ込んだまま、さらにその足を下に強く落とし——ゴシャッ!
と顎の砕ける音を響かせる。
「……ッッ」
あまりに凄惨な光景と気分の悪くなる音の連続に、目も耳も塞ぎたいのだが、イービルアイのためにどうすることもできない。
「まずはこの程度にしておくか」
最後に魔王は、己の足先に深く口を食い込ませたウォルガードを、ゴミを蹴り払うようにして湯浴み場の脇へと吹き飛ばした。
魔王はそうして己の后を犯した男への制裁を終えると、今度はメイベルローゼへと視線を向ける。
「お前は、あやつの血族だったな」
「……えっ?」
魔王が漂わす不穏な空気に、彼女の美貌が恐怖に引き攣る。
「ま、まさかそんな理由で私を……ここまでちゃんと協力したのに……」

「聞く耳持たぬ」
魔王はまるで羽虫でも追い払うように女の横顔を手の甲で払った。
しかしその力は凄まじく、ツインテールをなびかせてメイベルローゼが吹っ飛んでいく。
「がっ……ぐがぁ……」
そして丁度、ウォルガードと並ぶ位置にぐったりと横たわり、生死不明の状態となってしまう。
「――っはあぁぁ」
それと同時に、フィオナの全身がイービルアイの呪縛から解かれた。
「ま、魔王様！」
すると自分と同じように身体が動くようになったセリーヌが、すぐさま魔王の前に片膝を着き深く頭を垂れる。
「申し訳ございません。このセリーヌ……不覚を取りました。どのような罰でも、謹んでお受けいたします」
彼女ももちろん、ウォルガードとメイベルローゼが受けた制裁の一部始終を見ている。
その女騎士を見下ろす魔王の顔には、なんの感情も窺えない。
「我が后となる前の戯れは問わぬ。しかしその後に穢れた女を、そのまま我が妻とすることはできぬ」
「……ッッ」
「キサマはこれより、我が性奴隷として飼ってやろう」
魔王の言葉に深く垂れていたセリーヌの頭がパッと上がった。
后の座から奴隷へと堕ちたというのに、その表情は歓喜一色。
（セリーヌ……貴女そこまで……）
魔王に仕えられるのが嬉しいのか。
先ほど僅かに青に戻りかけていた髪色が今は再び闇色に戻り、大きく乱した黒い堕天装甲も元のままだ。
ウォルガードとふたりがかりで正気に戻しかけた行為が、魔王の出現により一瞬で水の泡である。そして――。
「お前がアリオナの娘か」
魔王の顔がこちらを向き、声を掛けられただけで全身が震えた。
（なんて……魔の力なの……）
イービルアイに掛かっている時ですらどうしようもなかった膝の震えが、今は全身に波及している。
しかしこのまま一方的に、ただ怯えているわけにはいかない。
せめて一矢でも報いようと、攻撃魔法を唱えようとする。
「我の前に跪け」
しかし魔王の言葉を聞いた瞬間、抗い難い力でその場に跪いてしまう。
「なッ⁉」
この強制力には身に覚えがあった。
処女を奪われたギュスターヴの命令に逆らえなかった時と同じ感覚だ。
「ほう。これがバーンドベルグの豚から得た力か」
「え？」
丁度その弛んだ顔を思い浮かべていた時なだけに、疑問の声が突いて出た。
「驚いた顔をしているな。そうよ。あの豚を、破邪の力とともに我の中に取り込んだのだ。そのついでに、お前を操る力も得たようだな」
息が止まる。
それではもう……英雄王の血を引く自分ですら魔王の言いなりで、コイツを倒すことが不可能ではないか……。
「奉仕せよ」
「……くっ」
その命令にいくら心が反発しようとも、身体が勝手に前に出てしまう。
「はい！　魔王様！」
対して隣のセリーヌは嬉々として膝で歩き、魔王に近寄っていく。
その姿は、大好きなご主人様を出迎える牝犬そのものだ。
「奴隷の分際で、我が陰根に触れようとするか」
しかし魔王がそれを許さない。
「はぐっ⁉　も、申し訳ございません」
セリーヌの前髪を掴んでそれを押しとどめ、そのまま横へ振り払う。
「我を見よ。フィオナ」
魔王の言葉に従って、背けていた顔が上を向く。
相変わらずまったく感情の窺えない、精悍な顔と向きあった。
魔王の瞳は、黒目に真紅の瞳孔。
闇の深淵から覗くその血色の輝きに、己のすべてが見透かされているようだ。
「ほう。セリーヌに負けぬ力を秘めているな。ふふ。面白い。お前こそ、我が后に相応しいのかもしれぬ。どれ、その資質を測ってやろう」
魔王は仁王立ちしたままそれだけ言うと、悠然と腰を突き出してきた。
「しゃぶれ」
嫌、と口にしようにも、処女を捧げた相手には逆らえない、というイセリアの血がそれを許さない。
手が勝手に持ち上がり、魔王の着ている服をほどき、下半身を自ら剥き出しにしてしまう。
「……ッッ」
その巨躯に相応しいサイズのペニスが目の前に現れて、フィオナは思わず息を飲んだ。
長さは両手で握ってもまだ余り、太さも指が周りきらないほどだ。
それがまだ勃起することなく、重々しく目の前に垂れている。
「……私もまだ……ご奉仕して……いないのに……」
隣であのセリーヌが、あからさまずぎる女の嫉妬顔を晒していた。
「続けろ」
魔王の言葉に、フィオナの指がその項垂れた肉棒に向かう。
「手は使うな。口だけでしろ」
言われるがままその手が横に逸れ、自然と相手の腰に添えられた。
そして顔が己の意志に反して、魔王の巨根に向かっていく。
嫌だ。
今まで散々、男たちのモノを口にしてきたが、この嫌悪感は拭えない。
しかも今、この胸の内に広がっている漠然とした不安感は何だろう。
女としての本能的な直感か？

著者近況　現在の担当さんと初めて組んだのが「イセリア英雄戦記」でした。大げさでなく、それ以降の私のキャリアはこの出会いがなければ存在していません。とても思い出深い作品です。

目の前に迫る禍々しい肉の塊に、己の心身が屈服してしまいそうで怖いのだろうか……。

「んんっ」

唇が魔王の先端を捉える。

まだ剛直していないだけに肉の柔らかさはそのままで、感触も他の男のモノと同じだった。

「舌も使え」

魔王がそう命じる声は低く、愉悦による乱れは窺えない。

（ああ……なんて重さなの……）

言われるがまま垂れた牡肉の先を舌に乗せると、密度の濃い重みをズシッと感じた。

この肉塊が淫熱によって鋼の硬度に達し、己を貫く感触を想像すると——。

「っくぅんん……」

それだけで腰の奥が疼いてしまう。

頬が熱く火照り出す。

数多の陵辱に開発されきってしまった若い女体が、相手の善悪にかかわらず牝の反応をしてしまう。

「フィオナが……あんな顔で……」

横で眺めているセリーヌが悔しさと切なさの混じった吐息を漏らした。

今、自分はどんな顔をしているのだろうか。

以前の自分なら、間違いなく嫌悪一色だったはずだ。

でも今は……。

恥辱の涙とは種類の違う色合いで、瞳が潤んでしまっているに違いない。

ぴちゃ、レロ、んちゅン。

そのまま幾多の男たちを喜ばせてきた動きを口が繰り出す。

竿肌から肉傘の裏側までねっとりと舌を這わせ、先端の小穴は先舌で強めになぞり舐める。

これは命令されているからなのだ、と自分の心に言い聞かせながら、唇まで使ってペニス全面をねぶり上げる。

「随分と慣れているな」

今まで感情の籠らなかった魔王の声に、僅かにあざけりの響きが混じる。

「その口使いは、バーンドベルグの豚に教え込まれたものか？　お前を慰みものにした、名も知らぬ下民どもの好みか？」

どうやら魔王は、フィオナがこれまでどんな辱めを受けてきたのか、多少なりとも知っているらしい。

見上げると、再び漆黒の闇から覗く真紅の瞳孔に射抜かれる。

底の見えないその血色の輝きが、己の身体に振りかかった陵辱の記憶を鮮明に蘇らせる。

暑いクレオラで、自国の地下メイズで、クアールの小島パイラバイラで、そして敵国のバーンドベルグで——。

相手も人間の男だけではない。

触手やオーク、タコの怪物。

その犯され方も多岐に渡り、住民視姦に乳奉仕、アナルセックス。そして絵描きに囲まれる中での、敵国皇帝による処女喪失……。

一瞬で脳裏を通り過ぎた陵辱の記憶が——己の瞳から涙を一筋零させた。

「くくっ。良い顔だ」

舌を這わせていた男根がその直後に剛直し、フィオナが漏らした涙を拭うように一気に反り返る。

（す、すごい……）

純粋なサイズならばモンスターや触手の類いのほうが大きい。

形状についても、先ほどのウォルガードのように奇抜な形をしているわけではない。

しかしその黒く艶光りした肌色や、竿肌に浮かび上がる赤と青の血管の力強さは傑出している。

そしてなにより、肉棒の内側に凝縮されている獣欲の質量が凄まじい。

今まで様々な男や牡の生殖器官を目にしてきたが、これほど牝を犯す気に満ちたモノは初めてだ。

「ああ。なんとご立派な……」

その勃起ペニスを目の当たりにして、隣の女騎士がこちらの耳にまで届くほどの大きさで、ゴクリと生唾を飲み込んだ。

「咥えろ」

そんな凶悪すぎる肉槍を、口元に突きつけられた。

（熱ッ。……それにすごく硬い）

唇から伝わってくる淫熱が凄まじく、硬度もまるで鋼のようだ。

その内側を流れる牡の激流で、竿肌がピチピチに張り詰めきっている。

「はむんっ。んんっ……んんン」

フィオナはその肉先で喉を突かないように注意しながら、亀頭を中心にねぶり始めた。

くちゅン。レロレロ、んちゅ。

唇でしっかりと竿肌を締めつけながら、薄皮がピチピチに張り詰めきっている先端部分に舌を這わせる。

しかし魔王は悠然と仁王立ちしたまま、喘ぎ声のひとつも漏らさない。

ただ己の唇がしっかりと肉先をしごく度に、これ以上ないと思われた男根の硬度がさらに増していく。

（感じてるんだわ……）

憎い相手である。

なのに胸の内がキュンとした。

何事にも動じない圧倒的な力を有する者が、己の行為によって感じていると思うと——これが女の性なのか、それだけで喜びを感じてしまう。

「ま、魔王様！　どうかこの奴隷めにも、魔王様にご奉仕する機会をお与えください！」

横から発せられた哀願に、魔王の視線がそちらを向く。

真紅の瞳孔が向けられた瞬間、セリーヌは片膝を着いた姿勢のまま、さらに上半身を低くした。

しかし顔だけは真っ直ぐに魔王に向けられている。

彼に奉仕したくて堪らない、という切羽詰まった感情が、その姿勢となって表れていた。

魔王の片頬に薄い笑みが浮かぶ。

（……嫌な……笑い方……）

それは己に対するセリーヌの愛情や忠誠心に満足しての笑みではない。

著者近刊　『とある王子の大国喰い　W美少女姫とHな女王様で母娘丼』『ハーレム王に俺はなる!　トリプル美少女をエロ籠絡』『ベタエロ美少女四人のベタでエッチな物語』『ダブル美少女の心を読んでラブ奴隷に落とした件』『修羅場だと思っていたら姉妹丼だった件』好評発売中！

そんな相手をさらにいたぶるアイデアを思いついた、という底意地の悪さを感じさせる笑みである。
「セリーヌよ」
「はっ！」
「そこまで我に仕えたいか？」
「もちろんです！」
「ならば、こやつの隣に並べ」
「ははっ！　ありがたき幸せ！」
女騎士は立つのももどかしいのか、それとも奴隷と位置づけられた己を弁えてか、四つん這いで移動しフィオナの隣に並んだ。
そして早速、フィオナが咥えてまだ余りある特大ペニスに手を伸ばそうとしてくる。
「気安く触れようとするな」
「ッッ⁉　も、申し訳ありません！」
斬って捨てるような魔王の言葉に、セリーヌが慌てて手を引っ込める。
「お前が我に触れることは許さぬ。我に奉仕をしたければ、その女を通してするがよい」
「えっ？」
セリーヌが何を言われているのかわからない、という表情になる。と。
「ふぐんッ⁉」
魔王がいきなりフィオナの頭を掴み、横に傾けた。
ただでさえ口に収まりきらない剛直が、頬の内側を盛り上げる。と。
「これをしゃぶれ」
フィオナは最初、魔王がセリーヌに何を命じているのか理解できなかった。
しかしそのセリフの数瞬後、親友に頬にむしゃぶりつかれ――遅ればせながらその真意に気づく。
「魔王さまっ♥　んちゅンン♥　まおうしゃまぁ♥」
獣欲の結晶のような肉棒を、セリーヌがフィオナの頬越しにむしゃぶりまくる。
唇で強く吸いつき、がむしゃらに舌を躍らせている。
そうしてほんの少しでも、中のペニスに愉悦を与えようと奮闘し始めた。
魔王に対するその健気なまでの一途さを、まさに身をもって実感させられて胸の奥が切なくなる。
（セリーヌ……もう、以前の貴女には……戻れないの……）
魔に堕ちたため、と割り切るには、その舌使いはあまりに情熱的だった。
そもそも彼女の中には、こうなる因子が備わっていたのだ。
地下メイズであの壁画を見た時に芽生えた疑問が今、こうして最悪の結果となって現実になっている。
実はお菓子作りが大好きな優しい女の子、ではなく、魔に堕ちきったこのセリーヌこそが彼女本来の姿なのだ。
「フィオナよ。我に直接奉仕をできる僥倖に浴しているというのに、何を呆けている。もっと心を込めて奉仕せよ」
頭の上から降ってきた命令に、我に返った。
そしてイセリア王家の血の力に縛られているため、舌が勝手にペニスの裏側を這い始める。
「良いぞフィオナ。奴隷の奉仕よりも、ずっと良い」
「っくッッ」
間接的な奉仕しか許されていない女騎士が、悔しげに眉間に皺を寄せる。
しかし、こんな扱いを受けてもなお、彼女の魔王に対する忠誠の気持ちは揺らがない。
「すごいです。フィオナの頬越しでも、こんなにはっきり形がわかるほど硬くなってて……レロレロんちゅんン」
少しでも中のペニスに気持ちよくなってもらおうと、ますます熱心にフィオナの頬に吸いついてくる。
「ふん。淫乱な牝犬どもめが」
魔王は見下しきった声でそう呟き、口元には満足げな笑みを浮かべている。
堕ちきっている親友を目の当たりにして絶望しているフィオナの心情や、セリーヌの強い嫉妬や焦り――つまり人の負の感情が、彼にとってはこの上ない愉悦の源泉なのだろう。
「ま、魔王様。せ、せめて……フィオナが触れてない場所だけでも……直接奉仕を許していただけないでしょうか」
ハアハアと息を乱しながら、セリーヌが魔王に哀願する。
その姿はまるで、クスリの禁断症状を訴えかけるジャンキーのように切羽詰まっていた。
対して漆黒の瞳からはなんの感情も窺えない。
（それだけに……恐ろしいわ……）
先ほど自分も身をもって体験したが、魔王のあの瞳と対峙すると、本人の弱い気持ちやトラウマが、そのまま自分に跳ね返ってくる。
彼女が抱いている悔しさや羞恥が、そのまま心に返ってこなければいいのだが……。
「……ま、魔王……さまッ」
セリーヌがそれまで必死にむしゃぶりついていたフィオナの頬から離れた。
そして無言の魔王と見詰めあっているだけなのに、涙目になって震え出す。
おそらく彼女も、先ほどの自分のように、過去の陵辱を鮮烈に思い出しているのだろう。
彼女の場合、相手に強烈な好意があるだけに、己が汚された記憶は一際辛いに違いない。
「良かろう」
そうして絶望に歪みきったセリーヌの美貌をじっくりと堪能した後、魔王が小さく顎をしゃくった。
「牝奴隷にも、我に直に奉仕する機会を与えてやる」
「あ、ありがとうございます！」
今にも絶望感で崩れ落ちそうだったセリーヌが一瞬で破顔。
フィオナが咥えていても、長すぎて有り余っている竿肌に向かおうとする。
「ふぐうぅ⁉」
しかしその動きも、魔王の大きな手に鷲掴みにされて阻まれてしまう。
「誰が陰根への直接奉仕を許した」
「で、でも、今……」

「我に逆らうか？」
「も、申し訳ございません」
相手の屈服を確認してから、魔王はセリーヌを自身の後ろに回した。
「奴隷が我に触れていいのは、ソコだけだ」
「ソ、ソコって……ッッ⁉」
女騎士の目の前には魔王の臀部。
皆まで言わずとも、ソコ、がどこなのかは明白である。
「フィオナと同じように、口だけ使って奉仕せよ」
「……わ、わかりました。誠心誠意、魔王様にお仕えいたします」
魔王への奉仕に対しては、常にポジティブなテンションで返事していたセリーヌの声が、初めて僅かに揺れる。
フィオナは口内のペニスに淫らな舌奉仕を続けながら、湯船の水面に映るセリーヌの姿に視線を向けた。
牝奴隷と化した親友は、自ら魔王の真後ろに両手を着くと、その美貌を彼の尻に寄せていく。
「んっ……んんっ……」
そして彼女の唇から出た桃色の肉片が、魔王のよく引き締まった浅黒い尻を舐め始めた。
なんて屈辱的な光景だろうか。
靴を舐めさせられるほうが、まだずっとマシだろう。
「何をしている？　牝奴隷が舐めるのに、もっと相応しい汚れたところがあるだろう」
魔王はフィオナのフェラ顔を轟然と見下ろしたまま、後ろを窺うこともせずそう言い放った。
「え？　あ、あの……ッッ⁉」
セリーヌの息を飲む声が聞こえ、遅ればせながら魔王が何を言ってるのか気づく。
アナルを舐めろ、と命令したのだ。
臀部を舐めるだけでも充分に屈辱的なのに、人体でもっとも不浄な部分に舌を這わせろ、と言っている。
「わ、わかり……ました……」
親友の忸怩たる声が、男の分厚い腰の向こう側から聞こえてくる。
これまで様々な経験をしてきたであろう女騎士も、ここまで屈辱的な奉仕行為は初めてなのかもしれない。
（セリーヌ……）
見ないほうが彼女のためかとも思ったが、視線が横の湯船に映る親友の姿から離れられない。
「……ッッ」
女騎士は強く下唇を噛んでいた。
さすがに嫌なのだろう。
覚悟も必要なのだろう。
しかも彼女がこれほどの葛藤をしているというのに――その奉仕を命じた魔王は、フィオナだけを見下ろしてペニスをしゃぶらせている。
親友の誇り高さをよく知っているだけに、その心情を思い瞼をギュッと閉じてしまう。
魔王は肉体的な快感だけでなく、こんな自分たちの傷つく心も楽しんでいるに違いない。
「ああ。魔王様……」
切なげな声が、分厚い腰の向こうから聞こえてきたと思ったら――。
ピチャ。んんっ、ピチャピチャ。
少しくぐもった吐息とともに、何かを舐める湿った音が聞こえてきた。
「おおぉ……」
それと同時に魔王が初めて、はっきりとわかる愉悦の声を漏らす。
すでにこれ以上ないほど硬いと感じていた口内の肉棒も、ビギッとさらに硬度を増した。
（気持ちいいんだ。すごく……）
自分も処女を失う前から、散々アナルだけで絶頂を極めたことを思い出す。
性器では味わうことのできないあの独特の快感を、男の魔王も感じているのだろうか。
視線を再び水面に向けると、セリーヌが魔王の尻に深くその美貌を埋めていた。彼女も魔王が感じていることを実感しているようで、奉仕前に見せていた躊躇はその表情からは窺えない。
むしろ魔王を喜ばせている嬉しさに、その横顔が輝いて見えるほどだ。
「おい」
そんな時、魔王の声が上から急に降ってきた。
「いつまで生温（なまぬる）い奉仕をしている」
そんなつもりはまるでない。
なにしろ自分にその気がなくとも、イセリアの呪いともいうべき力で、命令には逆らえなくなっている。
今まで幾多の男たちに教えられ、喜ばせてきたテクニックを、嫌でも施してしまっている。
そんな自分の思いがこちらの表情に現れたのだろう。
見下ろす魔王が唇の端をほんの少しだけ釣り上げた。
「物足りぬわ」
片手でフィオナの頭を掴むと、なんの遠慮もなくそれを引き寄せる。
「ふぐうぅぅ⁉」
口内に収まりきらなかったペニスに喉を深く突かれ、思わず両目が見開かれる。
構わず魔王は腕を動かし続けた。
「ぐっッ！　ふぅぐうぅッ！」
「いいぞ。このまま褒美をくれてやる」
魔王の息が僅かに上がり出し、フィオナの頭を掴んで動かすスピードも速くなる。
それはこちらの苦痛など一切考えず、己の満足のみを追い求めている動きだった。
「んん♥　魔王様のお尻、先ほどから気持ちよさそうにキュンキュンしています♥　レロんちゅ♥　レロレロ♥」
そして魔王の限界を悟った後ろのセリーヌは、こちらの耳まではっきり聞こえてくるほどの勢いで、不浄の小穴を舐め始めた。
その行為がただ屈辱的なだけでなく、ちゃんと魔王を感じさせている、と実感できたからだろう。
なにしろフィオナの頬越し奉仕でも、あれほど懸命に舌を躍らせていたのだ。

硬く窄まった皺穴を、さぞかし情熱的にえぐり舐めているに違いない。
「いいぞ、フィオナ。我が精でお前のすべてを闇色に浄化してやる」
しかし魔王は、そんなセリーヌの献身的な奉仕には一切触れない。
「舌を使え。もっとだ」
少し弾んだ口調でフィオナにそう命令してくる。
激しいイラマチオの最中で、本来ならばそんなことは不可能なのに――。
ヌルルッれろン。ぬるるるッ。
これもイセリアの血の宿命か。
これほどの苦しみの中でさえも、舌がペニスの裏側を巧みに這い回る。
さらなる喜びを与えるため、竿肌に浮く太い血管を、積極的になぞり舐めてしまう。
「おおっ。おおおおっ」
そうして前後の排泄器官をイセリアの姫と女騎士に一方的に奉仕させながら、魔王が深い愉悦の声を漏らして全身を息ませた。
どりゅン！　ドギュドプッ！　ドプドプっどぎゅドプン！
その射精は、人間の男と変わらなかった。
ただ己の唇が相手の陰毛に密着するところまで突き込まれているために、吐き出される精液が、口内ではなくそのまま食道へとぶちまかれていく。
それでもなお、これまでの誰よりも濃密な牡臭が鼻孔へと立ち上ってきてむせそうになる。
「レロんちゅん♥　魔王しゃまがドクドクしてるのが、ンチュんん♥　おしりの穴でもわかりましゅぅンンン♥」
対して後ろのセリーヌは、魔王が性的絶頂を迎えていることが本当に嬉しいらしく、今も熱心にアナル舐めを続けているようだ。
「ふうぅぅ……」
そうして魔王が一方的すぎる愉悦を堪能し終えると、使い終わったオモチャを捨てるようにフィオナの頭を手放した。
「がはっッ！　ごほごほっッ！」
すぐさま、うずくまるようにして咳き込むフィオナを余所に魔王は、
「牝奴隷。後始末をしろ」
イッても萎えない肉棒を、今度はセリーヌに向かって突き出した。
「はい！　ありがとうございます！」
汚れの処理を命じられたというのに、女騎士は喜びに顔を輝かせ、さきほど触れることが許されなかった肉棒にむしゃぶりついた。
「んちゅんん♥　これが魔王様の……んん♥　おちんぽぉ♥　んん♥」
魔王はセリーヌにペニスを好きにさせたまま、悠然と仁王立ちし、咳き込むフィオナを見下ろしてくる。
「フィオナよ。思えば我が現世に受肉せし牝胎はお前の母アリオナ。人の世なれば、我とお前は姉弟であるな」
その言葉に思わず顔が上がり、魔王を見上げる。
そして視線が合った瞬間、魔王の口元に楽しげな笑みが浮かんだ。
「ふふッ。我らが母は良き抱き心地であったぞ」
「ッッ⁉」
「どれ。次は姉の肉を味わうか」
魔王はそれまで献身的にペニスを口掃除していたセリーヌを振り払い、こちらに襲いかかってきた。
「嫌ッ！　嫌あぁぁ！」
力づくで押し倒され、精霊装甲が次々と外されていく。
今まで様々な性的タブーを犯させられてきたが――近親相姦は初めてだ。
その本能的な嫌悪感でガムシャラに抵抗するが、女の細腕で敵う相手ではない。両手でいくらその分厚い胸板を叩いてもビクともせず、激しくバタつかせる両脚もあっさりと掴まれ、大きく開かされてしまう。
その際に垣間見た陵辱者の薄笑いに、背筋がゾクッと震えた。
そうだ。魔王は自分に好きなように命令し、従わせる力を持っている。
先ほどの口奉仕はまさにそれだった。
しかし今、あえてその力を使っていない。
抵抗する女をこうして力でねじ伏せ無理矢理犯すのが、この上ない快感なのだろう。
「ダ、ダメ！　本当にダメ！」
と叫ぶ言葉も、それが本気であればあるほど、大きな喜びになっているに違いない。
（そ、それに……）
魔王のペニスの感触を、口腔がまだしっかりと覚えている。
あの圧倒的な牡肉の塊に貫かれ、自分は正気を保てるだろうか？
命令されて仕方なく、という免罪符がない今、官能の声をあげるだけでも抵抗心が破壊されかねない。
そうして自分も今のセリーヌのように、いつしか本気で魔王を求めるようになってしまうのではないか？
己の性的感度の良さを、これまでの経験で嫌というほど思い知らされているだけに、その不安が拭いきれない。
――ぐぷっ。
「ああっ⁉　ダ、ダメッ！」
そんな激しい葛藤の最中、女の入り口に先ほどまで唇で感じていた熱い牡肉が押し当てられ、
――ぐちゅヌるるるッ！
「イヤあぁあああぁぁぁ！」
それが一気に中へと侵入してきた。
処女を奪われて以降、様々な男に犯されてきた。
しかし今、己の膣壁を押し開くようにして侵入してくる男根は、やはり過去の牡たちを圧倒している。
単純なサイズや硬度の差ではない。
性粘膜で直に感じる、女を犯す、という悪意の濃度が明らかに過去最高なのだ。
「ああッッあああああぁぁぁ！」
その灼熱ペニスに触れる膣襞が、細胞レベルで性の愉悦に沸騰する。
しかも相手は魔王で、なおかつ母の

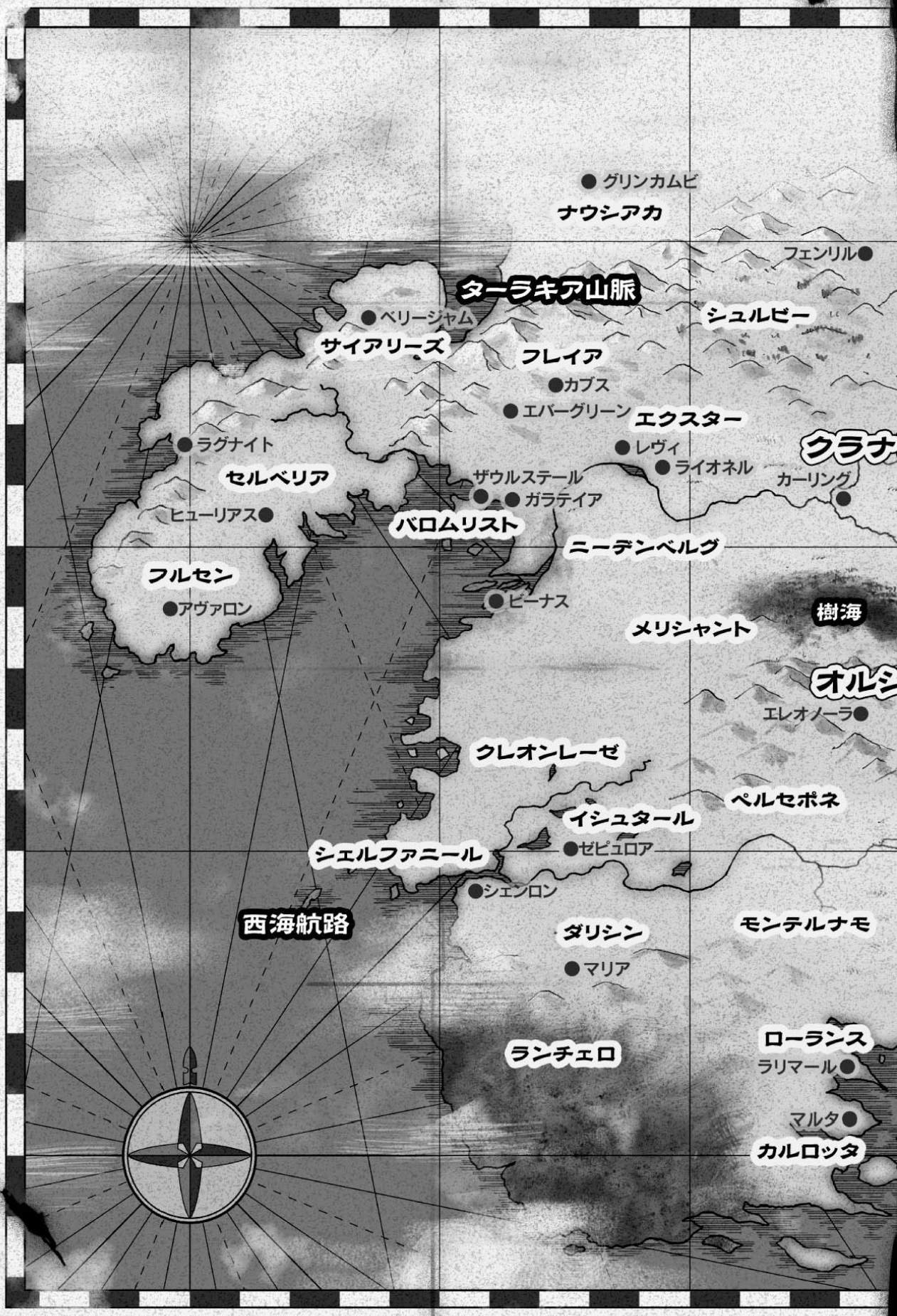
二次元ドリームマガジン2015年10月号　特別付録

ハーレムドリーム

the Legend of harem dream

原作
竹内けん
小説 栗栖ティナ／筑摩十幸
漫画 神保玉蘭

ハーレムシリーズの世界


グリンカムビ
ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
シュルビー
ベリージャム
サイアリーズ
フレイア
カブス
エバーグリーン
エクスター
ラグナイト
レヴィ
クラナ
ライオネル
セルベリア
ザウルステール
カーリング
ガラテイア
ヒューリアス
バロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
オルシ
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
シェルファニール
ゼピュロア
シェンロン
西海航路
モンテルナモ
ダリシン
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

ハーレムフュージョン　～イセリア英雄公国編～

「……ここは？」
「んっ……え、お、お母様？　それに……セリーヌまで」
「アリオナ様、フィオナ……どういうことだ？」
天蓋付きの、優に五人は並んで眠れるであろう広く豪華なベッドの上。
ほぼ同時に目覚めた美女達は、互いに顔を見合わせて戸惑いの表情を浮かべていた。
「私は……どこで何を？　頭の中にモヤがかかったようで、何も思い出せません」
大きく胸元が開いた純白のロングドレス。そこから覗き見えるやや上向きの豊かな乳房を上下させて深呼吸をしながら、アリオナは頭を抱える。
ここがどこなのか。どうしてここにいるのか。そもそも、自分は今までどこで何をしていたのか。すべて思い出すことができない。
ただ、とても辛く悲しい日々を過ごしてきたような気がする。
左右に寄り添う愛娘とイセリア英雄公国が誇る騎士団長も同じなのだろう、ふたりとも沈鬱な顔でうつむき、押し黙っていた。
その重苦しい空気を破ったのは――。

「あ、あの……大丈夫ですか？」
ベッドのすぐ傍らに立ち、目を丸くしていた愛らしい顔立ちの王太子の声だった。
（ど、どうなってるの⁉）
イシュタール王国の王太子であるフィリックスは、義母である女王グロリアーナとの夕食を終え、今日は早めに休もうとひとり私室に戻ってきたばかり。ベッドに身を投げ込もうとした刹那、枕の辺りで眩い光が弾け、この美女達が現れたのだ。
戸惑っている様子からして、彼女達も事情がわからないらしい。
敵意も感じないし、少なくとも王太子である自分を狙った暗殺者ではないだろう。
（……凄い美人だな、三人とも）
蜂蜜色の長い髪、乳白色の美しい肌。少年が『ママ』と呼んで慕うグロリアーナに負けず劣らずの大人の魅力を醸し出す、アリオナと呼ばれる淑女。
お母様と呼びかけていたから、彼女の娘なのだろう。少年より少し年上に見える、フィオナと呼ばれる美女もまた、母に負けない魅力的なスタイルだ。
金色の髪を飾る、対の羽根つきのティアラ。その肢体を包むのは薄緑色の鎧。
開いた胸元からこぼれ落ちそうなサイズの双乳にどうしても目を奪われてしまう。
「……お前は？」
気づかうフィリックスへ警戒の眼差しを向けてきたのは、騎士らしい銀の鎧に身を包ん

だ、セリーヌと呼ばれていた美女。
ロイヤルブルーの髪と蒼い瞳が凛々しくクールな美しさを醸し出す。
鎧の上からでもわかる、細く引き締まったスタイル。鎧の胸元がかなり隆起しているところから察するに、その下の双丘も見事な大きさだろうと想像できた。
（って、見とれてる場合じゃない！）
ハッと我に返ったフィリックスは警戒を解くように微笑み、声をかける。
「あ、怪しい者じゃありません！　と言うか、ここ、ぼくの部屋だから。えっと……それより、大丈夫ですか？　何だか、顔色があまりよくないですけど……」
三人を宥（なだ）めつつ、少年は彼女達の様子をもっと近くでうかがおうとベッドへ上がる。
光の中から、突然現れた美女達。もしかして、天から降りてきた女神様だったりするのだろうか。思わずそんなことを考えつつ、すぐ傍で美女達を見つめる。
「大丈夫です、私は……んっ、あぁ……」
優しい少年の眼差しに警戒を解いたアリオナは、そう微笑み返そうとした刹那、ほのかに漂ってきた香りに思わず声を上擦らせてしまった。
栗の花に似た、青臭い香り。気高きイセリアの女王としては縁遠いはずなのに、酷く馴染み深く、そして魅力的に感じる――男の精の匂い。
フィリックスは夕食の後、グロリアーナに『食後の運動』と称し、たっぷりと可愛がっ

てもらったばかり。湯も浴びておらず、その残り香を身にまとっていたのだ。
そんな事情は知るよしもないアリオナだが、鼻孔をくすぐる淫臭に鼓動が高鳴り、意識が朦朧と蕩けていくのを止めることができなかった。
「お、お母様……わたくし……ンッ、はぁはぁ」
「何故だ。こんな……くっ、うぅっ」
フィオナとセリーヌもまた、少年が漂わせる精臭に欲情していた。頬を赤らめ、吐息を熱く切らし、四つん這いになって自分達を見つめてくる少年を潤んだ瞳で見つめる。
「あ、あの……？」
女王や様々な美女達と秘事を重ねてきたフィリックスは、彼女達がどういうわけか欲情しているとすぐに察することができた。
（どうしたんだろう、急に。とにかく、落ち着いてもらわないと）
水でも飲ませてあげれば、ひと息つけるだろうか。そう考え、ベッドサイドのテーブルに置かれた水差しを取ろうと腰を浮かせた直後。
「……ごめんなさい。私……もう、あぁっ」
許しを乞うように呟いたアリオナが、フィリックスを白いシーツの上へ押し倒した。
そのまま夢中で自分を魅了する匂いの源――彼の股間を片手でさすり、ふくらみを確かめるとすぐさまズボンと下着を引き下ろしてしまう。

「はうっ⁉　あ、あの、待って……うわっ」
「あぁっ、もうこんなにたくましく……」
仰向けに寝転がる少年の股間へ覆い被さるようにしながら、アリオナはあらわになった肉槍をうっとりと見つめる。
イセリア英雄公国を代表する美女達に見とれていたせいだろう、少年の屹立はまだ刺激を受けていないというのに雄々しく隆起していた。
剥き出しになったことで漂う精臭も濃くなり、間近で嗅ぐアリオナは胸の奥が熱く燃えるような昂りを堪えられなくなる。
「申し訳ありません。はしたないことだとわかっています。それでも……んっ」
純白のロングドレスの胸元をみぞおち辺りまでずらして豊かな双乳を露出させると、そのふくらみを自らの両手で中央に寄せ、正面から屹立の裏筋へ押しつけた。
「えっ、おっぱい……そんなっ、くふぁっ、ああっ」
柔らかな白肌はしっとりとしていて、吸いつくような感触だ。
ただ当てられただけだというのに、フィリックスはくすぐったいような刺激に耐えられずに思わず腰を浮かせて甲高い声を漏らしてしまう。
「ビクビクと脈打って、とてもたくましいおちんちん……はぁ、はぁっ……」
快感を訴えるように脈動する怒張。その動きを確かめるように、アリオナは自ら揉み寄

2D Dream Magazine Special Supplement - Harem Dream

特別抜粋掲載『ハーレムシークレット』

第一章 裏切り者の子供たち

小説◎竹内けん

第一章　裏切り者の子供たち

（うわ、綺麗な人だなぁ）

これがスペンサーの初対面の感想である。

仙樹暦１０３４年。ドモス王妃アンサンドラが、大望の男子アレックスを出産した。

ドモス国王ロレントの四男であるが、正室の腹であるからこれが嫡男である。

ドモス王国は、歓びの声に包まれた。……少なくとも表面上は。

祝福モードに沸き立つドモス王国の副都カーリングにあって、スペンサーとその姉フランギースは、時の人アンサンドラに呼び出された。

女将軍ルーシーに案内されて、王妃殿下の持つという部屋に入る。

おそらく、私的な謁見をするための場所なのだろう。豪華ではあるが、それほど広くはなく居心地のいい室内である。

そこにある藤の椅子に彼女は座っていた。

艶やかな金髪を結いあげ、磨き上げた真珠もかくやといったしっとりとした白い肌。大きな蒼い瞳。すっと通った鼻筋に、限りなく小さな鼻梁。桜色の形のいい唇。華奢な首筋に、長い手足。夏らしい白いサマードレス越しにも存在感を主張している大きな乳房。

御年二十八歳。まさに女盛りの堂々たる美女だ。
世に「血塗られた毒婦」という物騒な異称で呼ばれていることもあるらしいが、実際に目の当たりにすると、優しそうな雰囲気をしている。
「フランギース、久しぶりね」
「ご無沙汰しています、王妃殿下。再び御尊顔を拝す機会をいただき、恐悦至極にございます」
スペンサーよりも四つ年上の姉は、いささか緊張した面持ちであったが、貴婦人に対する礼としては完璧な挨拶をした。
「まぁ、立派な口をきくようになって、昔はアンサンドラお姉ちゃん、と呼んでくれたのにね」
聞くところによると、フランギースは幼少の時分、クラナリア王女であったアンサンドラの身の回りの世話をする侍女をしていたらしい。
といっても、年端もいかない子供にまともな仕事などできるはずがないから、王女様の情操教育のために側に置かれていた、というのが正しいだろう。
「十一年ぶりね。月日が流れるのは早いわ。すっかり美人さんになって」
「妃殿下もお変わりなく、いえ、一段とお美しくおなりになりました」
やんごとなきお方と久闊を叙するフランギースは、感動のあまり目を潤ませている。

一方で、姉の脇に立っていたスペンサーにとって、アンサンドラは未知の女性であった。同じカーリングに住んでいるのだから、遠目には何度か拝見していたが、ひたすら雲の上の存在である。

恐懼(きょうく)はしても、親しく声をかけられて涙ぐむほどの感情移入はできない。

「うふふ、なにオバサンにお世辞をいっているの。あなたこそ綺麗になったわ。さぞモテるのでしょうね」

王妃の世辞に、頭を高くしたフランギースは毅然と応じる。

「男になどにうつつを抜かしている暇はありません。わたくしは王妃殿下のお役に立ちたい、その一身で勉学に励んで参りました。ぜひしかるべき職を与えて欲しくございます」

自分の忠誠心を判ってくれと、身悶えんばかりに訴えるフランギースの姿に、アンサンドラは席を立った。

そして、昂るフランギースを宥(なだ)めるように両腕でそっと抱きしめる。

「ありがとう。あなたにも辛い思いをさせました」

「いえ……アンサンドラに比べましたら、わたしなんてなにも……うう……」

アンサンドラの大きな胸に顔を埋めて、フランギースは啜り泣いている。

（なんでお姉ちゃん泣いているだろう？）

自分に厳しく、他人にも厳しい。鬼気迫る勢いで、日々、勉強にばかり打ち込んでいる

気の強い姉が、今日はまるで童のようだ。
鬼の目にも涙、というか、あまりにも不可思議な光景に、スペンサーはキョトンとしてしまった。
アンサンドラとフランギースが生き別れた運命の時のことを、当時、乳飲み子であったスペンサーが知るはずもない。とはいえ、成長するに従って周りから否応なく身に染みて教えられていた。
いまや広大な領土を誇るドモス王国だが、ほんの十四年前は、北の貧しい辺境国の一つにすぎなかったらしい。
一つの転機とされるのが、仙樹暦１０２３年に行われたクラナリア征服である。
仙樹暦１０２０年に北の辺境国ドモスの国王に即位したロレントは、瞬く間にセレスト、シュルビーの両国を攻め滅ぼす。
一方、そのころのクラナリア王国は、中原の大国と呼ばれていた。
輝布河を押さえていた地理的な要因が大きい。というのも、ここから北はドモス王国などに通じる山がちの地形。南は樹海と南北が交通に適さない地形であったため、東と西を繋ぐ流通の要衝として、極めて重要であったからだ。
東の超大国ラルフィント王国が南北朝に分裂し、混迷を極めている中で、もっとも強力な軍事力を持ち、平和的で住みやすい国といわれ、国民もそれと自負していたらしい。

2D Dream Magazine Special Supplement - Harem Dream

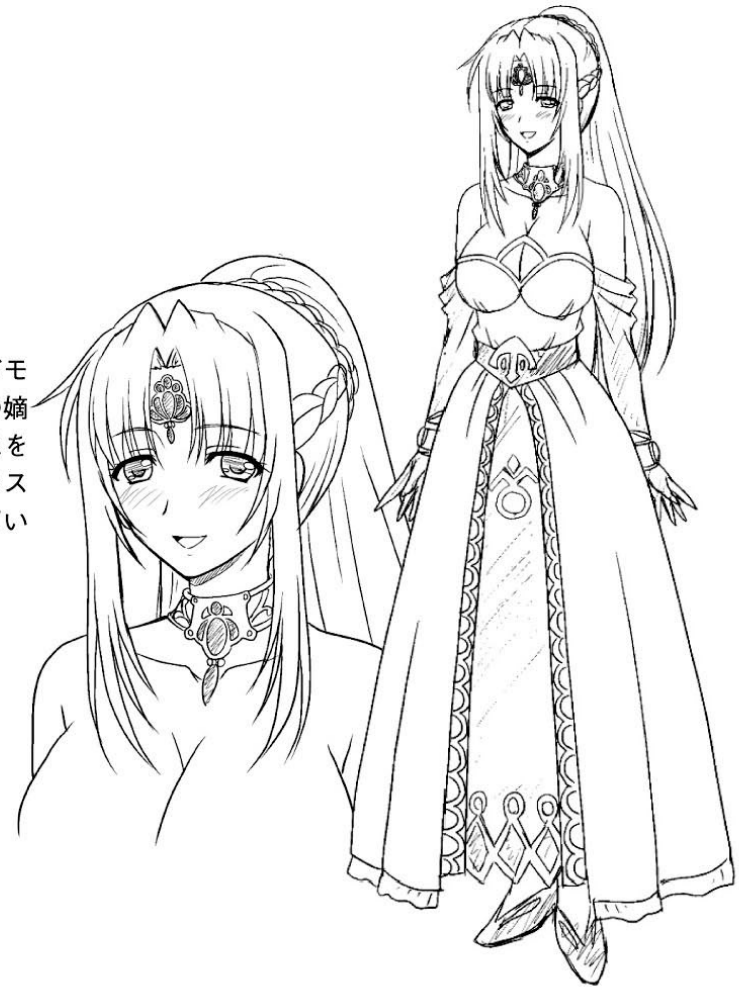
読み切り漫画『ハーレムシークレット』

王妃様たちの秘密の教え

漫画◎神保玉蘭

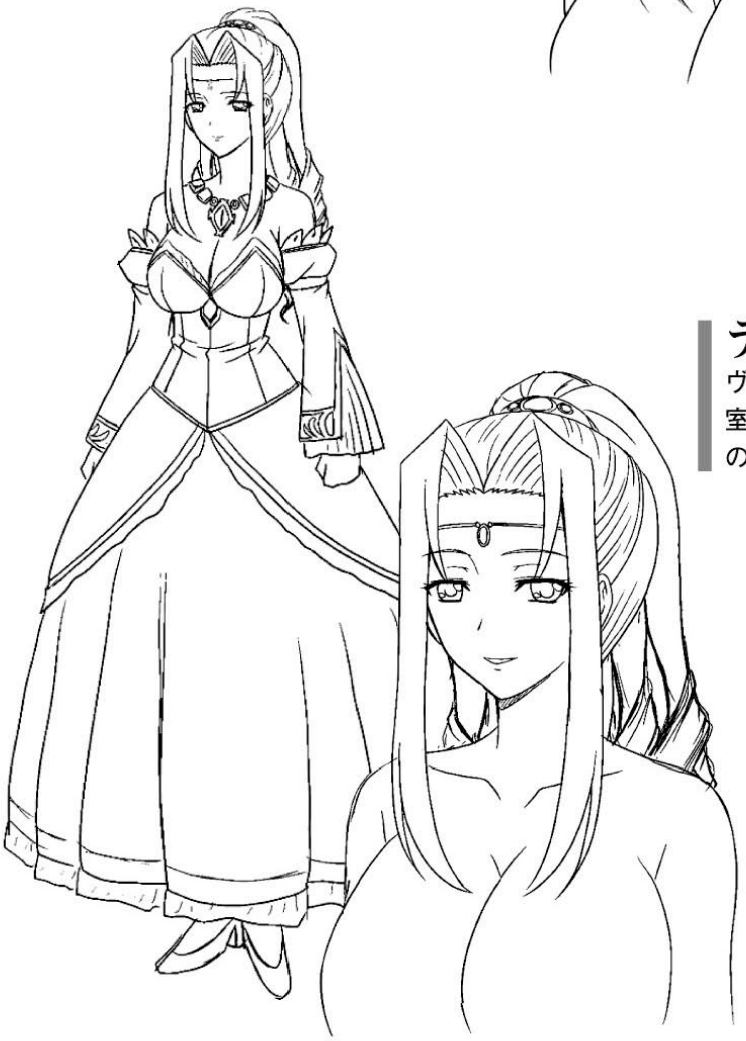
登場人物紹介

Characters



アンサンドラ

元クラナリア王国の第二王女で現在はドモス王妃。国王ロレントとの間には大望の嫡男アレックスが誕生した。フランギースをアレックスの乳母に任命、その弟であるスペンサーに自らの小姓を任せ可愛がっている。まるで聖母のように優しい女性。



ティファーヌ

ヴィーヴル領主の娘でロレントの側室のひとり。今回アンサンドラの出産のお祝いと帰国の挨拶にやってきた。

スペンサー

アレックスの将来の側近となるようアンサンドラやルーシーからエリート教育を施されている青年。可愛いばかりで実力はまだまだ。

仙樹歴１０３４年
ドモス王国
副都カーリング
ぼく……
こんなところに
いていいんだろうか？
スペンサー
クルッ
背中のホックを
お願いします

アアンサンド様!?
そんな恐れ多い
スペンサー
お仕事ですよ
早くなさい
アンサンドラ様
のうなじ……
はっはいっ
ゴクリ
ふるふる
ふるん
緊張して指が
うまく動かないよ
ドキ
ドキ
ドキ
おっ終わりました
ふふふふっ
ご苦労さま
クスッ
はっはい
カァーッ

この案件についてですが
そうね
その案件は宰相のほうにまわして

スペンサー

あんた ちゃんと仕事しているんでしょうね

それは……

フランギース 心配は無用よ

スペンサーは ちゃんと役に立っているわよ ねっ♥

服の背中のホックを留めることが仕事といえるのかな…

ハ、ハ、ハ…

そろそろ ティファーヌが やってくる時間ね

アンサンドラ様 ご無沙汰しております

いらっしゃい ティファーヌ

2D Dream Magazine Special Supplement - Harem Dream

コラボ小説『ハーレム×白百合の剣士×黒薔薇の騎士』ハーレムキャッスル番外編

フィリックス王子の受難

小説◎筑摩十幸　挿絵◎助三郎

フィリック王子の受難

（う、動けない……こ、このままじゃ……っ）

囚われの身になったフィリックス王子は、絶体絶命のピンチからなんとか逃れようと汗まみれの身体を足掻かせる。しかし身体は鉛のように重く、思うように動いてくれなかった。拘束されているわけではない。拷問による疲労もあったが、理由はそれだけではなかった。

「どうです、身分を明かす気になりましたか？」

フィリックスの両脚を脇にガッシリと抱え、股間を踏みつけている金髪碧眼の美少女はブリジット・ローゼンバーグ。ランドール領王国の第一王女だ。

「強情を張っていると、こうですよ」

ブーツを脱いだ脚線は濃紺のストッキングに包まれ、しなやかで優美な拷問具となって、王子のペニスを揉み扱いている。

「うああ……ああぁ……」

白い仮面を着けていてもその美しさを隠すことはできない。切れ長の瞳は聡明さと意志の強さを表すようにキラキラ輝き、スッと通った上品な鼻筋は高貴な血筋を感じさせる。少し両端が上がった桜色の唇は、どこかいたずら好きな子猫のような愛らしさを感じさせ、

それが王女でありながら、親しみやすさを醸し出していた。
「素直になったほうが身のためだぞ」
もう一人、王子の上に馬乗りになり、ヒップで顔面を圧迫しているのはローザ・フリージンガー。シュバルト神聖帝国の美しくも猛々しい女帝である。熟れて脂ののった双臀がズッシリくる重量感とともに頬の両側をピタリと挟み込み、逃れることを許さない。汗を含んだシルクの下穿きは、女の芳香で鼻と口を覆い、呼吸と理性を奪おうとする。
「痴漢を処刑しても、罪にはならんからな」
恐ろしいことを平然と言ってのけるローザ。鋭く厳しい視線、硬く結んだ唇、透明感のある銀髪、そして染み一つない白い肌など、まるで雪の女王のような峻厳さであった。しかしその一方で、乳房やお尻はブリジットより大きく、見た目の年齢よりも熟れている。鉄のような厳しさの中に、すべてを包み込むような母性も併せ持つ、不思議な魅力の女性だ。
（どうして……こんなことに……）
朦朧としたまま、フィリックスの意識は時を遡(さかのぼ)る……。

「きみきみ、ちょっといいかな」
「はい？」
郊外を散歩していたフィリックスに声をかけたのは、見知らぬ男だった。黒いフードを

深々と被り、顔はよく見えないが声の感じからすれば若い。といってもフィリックスよりは上だろう。
「イシュタールのフィリックス王子とお見受けするが、間違いないかな」
「え……どうしてそれを……？」
（一体、誰だろう……？）
そこはかつて騎士見習いとして汗を流した演習場のそばにある森林だった。王子となった今、ここを使うことは滅多にないが、ふと城の生活の窮屈さに疲れたときに、こっそりと立ち寄るのだった。
「ぼくくらいになれば、一目見ればわかるものだよ。なんと言っても、ぼくはかの有名な天才魔術師ヴラッドヴェインだからねぇ」
「は、はあ……そうですか」
「驚かないね……知らなかったのかな」
「はい……すみません」
フィリックスの薄いリアクションに少ししらけたように頭をかく。
「んん……まあ、それはいいとしよう。そもそも西国にもコネを作るというのが目的でもあるわけだし。ところで王子、何か悩みがあるようだけども、ぼくに話してみないかな」
「うわ、どうしてそんなことまでわかるんですか!?」
「はっはっはっ。なんたってぼくは天才魔術師ヴラッドヴェインだからねぇ」

占い師の常套文句であるが、世間知らずのフィリックスにとっては驚きの連続だった。
「きっと力になれると思うんだ。もちろん、もらうものはもらうけどね」
親指と人差し指でリングを作り、にんまりと笑う。
「あの、ぼくもっと強くなりたいんです。男としていつまでもウル姉に甘えっぱなしじゃいけないと思っているんです！」
「ほほう、これは随分ストレートだね。しかし安易に魔法に頼って強くなるというのはいかがなモノだろう」
「あ……そうか……」
「はっはっはっ。いやいや、楽してもいいんだよ。所詮この世はやったもん勝ち。人間なんてそんなもんだよ。そこでだ」
自称天才魔術師は懐から水晶玉を取り出す。
「これは異世界に通じる扉を開く魔導具だ。これで異世界にいる最強の剣士に会ってくればいい」
「わざわざ異世界に……ですか」
「もちろんこの世界にも強い騎士はいるけれど、一国の王子がそう敵対する他国に行けるわけがないし、友好国ならもし試合を頼んでも君に気を遣って手加減するだろう。それでは君が望む本当の強さは手に入らない。そう思わないか？」
「な……なるほど……そうかもしれませんね。わかりました」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/